

# 丸野・中谷遺跡発掘調査報告

2003（平成15）年8月

三重県埋蔵文化財センター

# 序

人や物の移動が自動車を中心として行われる現代、自動車道の整備は県内各地で実施されています。これらの整備予定地には、いくつかの埋蔵文化財包蔵地が発見されています。これらの埋蔵文化財は、私たちの先祖が、その時代を生きた証であり、先人の文化や教訓等を今に伝えてくれる貴重な財産ともいえましょう。しかし、これらは土木工事等により破壊されると、二度とその実態を把握することが不可能になる性格のものもあります。三重県埋蔵文化財センターでは、このような埋蔵文化財を開発行為から守り、後世に伝える努力を続けているところです。

三重県政においても、埋蔵文化財のこうした特性を踏まえ、その保護に努めているところではありますが、どうしても現状保存が困難な部分については発掘調査を行い、記録として保存せざるを得ない場合もあります。丸野遺跡・中谷遺跡の発掘調査は、こうした経緯で行われたものです。本書が消滅した遺跡に代わり、先人の文化や教訓を後世に伝える一助となることを願うものあります。

なお、文化財保護法の精神を尊重され、協議から発掘調査に至るまで多大のご理解とご協力をいただいた各関係機関や地元自治会の方々には、ここに心からのお礼を申し上げます。

2003年8月

三重県埋蔵文化財センター

所長 吉水康夫



## 例　　言

- 1 本書は、平成14年度に現地調査を実施した丸野遺跡・中谷遺跡の発掘調査結果をまとめたものである。
- 2 調査は下記の体制で実施した。
  - 調査主体 三重県教育委員会
  - 調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査研究グループ  
主査 森川常厚 臨時技術補助員 川崎志乃
  - 調査作業受託 東海アナース株式会社
- 3 本書の執筆・編集は調査担当者が行い、写真撮影は調査担当者及び調査作業受託者が担当した。
- 4 本書が対象とした調査面積は、丸野遺跡 1,853m<sup>2</sup>、中谷遺跡 1,506m<sup>2</sup>である。
- 5 本書が対象とした現地調査期間は、平成14年7月8日～平成14年10月28日である。
- 6 本書で示す方位は、国土座標第VI系を基準とする座標北を用いた。なお、磁北は約6°40'西偏（平成14年）している。なお、この座標は世界測地系に移行する以前のものである。
- 7 本書では、下記の遺構表示略記号を用いた。  
SA：柵 SB：掘立柱建物 SD：溝 SK：土坑 SH：竪穴住居 SX：土器棺
- 8 本書で表記する色調は、小山・竹原編『新版標準土色帖』（9版 1989）を使用した。
- 9 発掘調査及び本書の作成に際しては、下記の方々のご指導・ご協力をいただいた（敬称略）。  
川添和暁 中村健二 松阪市教育委員会 地元地権者各位 松阪県民局松阪建設部
- 10 本書が扱う発掘調査の原因事業は、一般地方道松阪環状線緊急地方道路整備事業である。
- 11 発掘調査の経費は、三重県県土整備部道路整備チームが負担した。
- 12 本書が扱う発掘調査の資料や出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

# 目 次

I	前言	(森川常厚)	1
1	調査に至る経過		1
2	調査の体制		1
3	調査の経過		1
II	位置と環境	(森川常厚)	2
1	地理的環境		2
2	歴史的環境		3
III	丸野遺跡	(川崎志乃)	5
1	遺構		5
2	遺物		11
3	結語		12
IV	中谷遺跡		18
1	層序	(森川常厚)	18
2	遺構	( " )	18
3	遺物	( " )	33
4	自然科学分析	(パリノ・サーヴェイ株式会社)	40
5	結語	(森川常厚)	41

## 挿 図 目 次

<p>II 位置と環境</p> <p>第1図 遺跡位置図 ..... 2</p> <p>第2図 遺跡地形図 ..... 3</p> <p>第3図 調査区位置図 ..... 4</p> <p>III 丸野遺跡</p> <p>第4図 SD15土層断面図 ..... 5</p> <p>第5図 SH13遺物出土状況図・土層断面図 ..... 5</p> <p>第6図 SH24・25土層断面図 ..... 5</p> <p>第7図 SH 7・SK 8 土層断面図 ..... 5</p> <p>第8図 調査区西壁土層断面図 ..... 6</p> <p>第9図 調査区南壁土層断面図 ..... 6</p> <p>第10図 調査区平面図 ..... 7~8</p> <p>第11図 SB26平面図・断面図 ..... 9</p> <p>第12図 SB 4 平面図・断面図 ..... 9</p> <p>第13図 出土遺物実測図(1) ..... 13</p> <p>第14図 出土遺物実測図(2) ..... 14</p> <p>第15図 出土遺物実測図(3) ..... 15</p>	<p>IV 中谷遺跡</p> <p>第16図 A区遺構平面図 ..... 19</p> <p>第17図 B区遺構平面図 ..... 21</p> <p>第18図 土層断面図〈1〉 ..... 22</p> <p>第19図 土層断面図〈2〉 ..... 23</p> <p>第20図 SX101~106実測図 ..... 24</p> <p>第21図 SK 1~12実測図 ..... 26</p> <p>第22図 SK13~17・19~24実測図 ..... 28</p> <p>第23図 SH602・SK502・507実測図 ..... 30</p> <p>第24図 SB301~303実測図 ..... 31</p> <p>第25図 SX101・102出土遺物実測図 ..... 34</p> <p>第26図 SX103出土遺物実測図 ..... 35</p> <p>第27図 SX104出土遺物実測図 ..... 36</p> <p>第28図 SX105・106出土遺物実測図 ..... 37</p> <p>第29図 SK10・12・13・17、SD404、 包含層他出土遺物実測図 ..... 38</p> <p>第30図 土器棺・土壤墓配置図 ..... 43</p>
---	--

## 写 真 図 版

<p>写真図版 1 ..... 周辺の空中写真</p> <p>丸野遺跡</p> <p>写真図版 2 ..... 遠景 ..... 全景</p> <p>写真図版 3 ..... SD15断面 ..... SD15検出 ..... SD15完掘</p> <p>写真図版 4 ..... SH13土器出土状況 ..... SH13完掘</p> <p>写真図版 5 ..... SB 4 検出 ..... SB 4 完掘</p> <p>写真図版 6 ..... 出土遺物</p>
--

中谷遺跡	
<p>写真図版 7 ..... A区調査前風景 ..... B区調査前風景</p> <p>写真図版 8 ..... 調査区全景 ..... A区上層全景</p> <p>写真図版 9 ..... A区下層全景 ..... B区全景</p> <p>写真図版 10 ..... B区拡張区からC区を望む ..... SX101</p> <p>写真図版 11 ..... SX102</p> <p>写真図版 12 ..... SX104</p> <p>写真図版 13 ..... SX103</p> <p>写真図版 13 ..... SX105</p> <p>..... SX106</p>	

写真図版 14	SK 2	写真図版 18	出土遺物
	SK 6	写真図版 19	出土遺物
写真図版 15	SK12	写真図版 20	出土遺物
	SK17	写真図版 21	出土遺物
写真図版 16	SK16土層	写真図版 22	出土遺物
	SK16		
写真図版 17	SK21		
	SB301～303		

## 表 目 次

### III. 丸野遺跡

第1表 遺構一覧表	10
第2表 出土遺物観察表(1)	16
第3表 出土遺物観察表(2)	17

### IV. 中谷遺跡

第4表 土器棺一覧表	25
第5表 土坑一覧表	27
第6表 遺物観察表	39
第7表 微細物分析結果表	41
第8表 遺構番号対照表	44

# I 前 言

## 1 調査に至る経過

一般地方道松阪環状線緊急地方道路整備事業は、既に周知されている丸野遺跡、中谷遺跡にその事業範囲が及ぶ可能性が大きい計画であった。県土整備部から依頼を受けた三重県埋蔵文化財センターでは、平成13年12月2・3・7日の3日間、当該遺跡の範囲確認調査を行った。その結果、丸野遺跡からは古墳時代を中心とした土師器片が出土し、溝や土坑が検出された。中谷遺跡でも少量の土師器片と柱穴状遺構が検出された。これにより、事業地内には、丸野遺跡で1,600m<sup>2</sup>、中谷遺跡で1,400m<sup>2</sup>の範囲に遺跡が広がることが判明した。この結果は、平成14年6月3日付教埋第59号にて県土整備部へ通知され、両遺跡の取扱について両者で協議が重ねられた。その結果、両遺跡とも発掘調査により記録として保存し、発掘調査終了後に事業を行うこととした。これに従い、平成14年度の工事計画に伴い、当埋蔵文化財センターの調査計画に組み込まれることが決定され、当年度上半期に発掘調査、下半期に道路工事とする年間計画で実施されることとなった。平成14年度に入り、県土整備部による竹林等の抜開作業が終了した後、発掘調査を開始した。

## 2 調査の体制

調査は、三重県埋蔵文化財センター調査研究グループが担当し、2班体制により、丸野・中谷両遺跡の調査を同時並行で行った。現地調査作業は民間発掘調査会社に委託するかたちで実施したが、三重県埋蔵文化財センター調査担当者が監督員として現地に常駐した。この発掘調査作業委託は、現地作業に限定して行い、遺物洗浄等の一次整理以降の室内作業においては、三重県埋蔵文化財センターで行った。

## 3 調査の経過

現地発掘調査作業は東海アーナス株式会社が受託し、7月8日に開始した。文化財保護法第58条の2第1項の規定により平成14年7月10日付教埋第115号にて「発掘調査の報告」を三重県教育委員会へ行った。

調査は、夏の酷暑や台風の大風による水没等に悩まされながら進行した。

丸野遺跡では、調査区の西側から東側へ調査を進めた。事業地の北半は伊勢電気鉄道建設時に遺跡の破壊が予想されていたが、調査の進展によりその被害が軽微であることが判明したため調査区を拡張した。調査区の東端では、検出面の大半が搅乱を受け、遺構の検出が困難な状況であった。

一方、中谷遺跡では、標高の高いA区から調査を開始した。B区に至り、当初の予想に反して縄文時代晩期の墓域が広がることが判明した。標高は低いものの、さらに西側へ広がる可能性も残るため、調査区の拡張を行い、その有無を確認した。中谷・丸野両遺跡を隔てる谷筋においても関連遺構の有無を確かめるため、調査区を追加設定した。また、土器棺や土壙墓の埋土に対しては、その洗浄を行い、微細遺物の検出を試みた。

調査終盤の9月23日には現地説明会を行い、一般に調査現場を公開した。最後に、中谷遺跡の土器棺の記録、取上げ作業と一部において下層調査を行い、10月28日に現地調査を終了した。

なお、丸野遺跡出土遺物については、三重県教育委員会から平成14年12月3日付教委第12-6-3号にて、中谷遺跡出土遺物についても同じく平成14年12月3日付教委第12-6-4号にて松阪警察署長へ発見認定が通知されている。  
(森川常厚)

## II 位置と環境

### 1 地理的環境

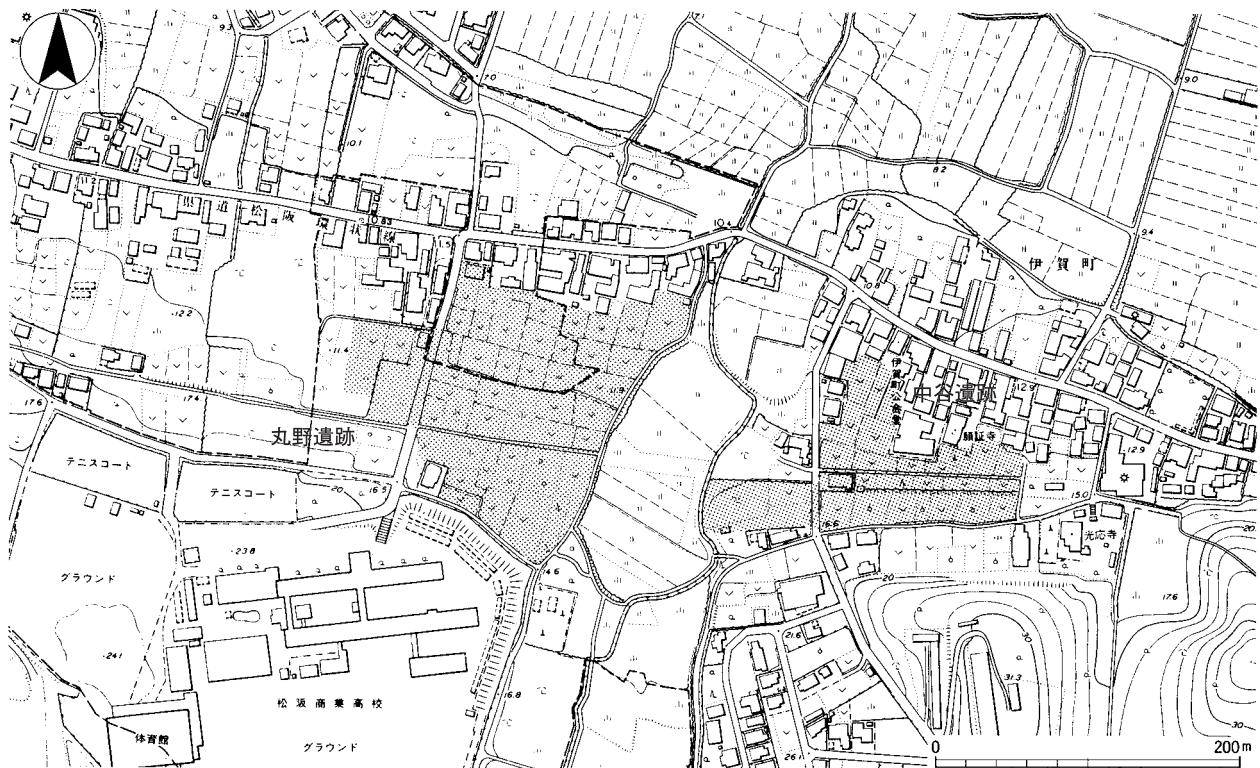
伊勢平野は三重県の中央部で南北方向から東西方向に大きく屈曲して広がっている。松阪市は、その屈曲部に位置する。蒲生氏郷の築城による松阪城を中心とする城下町であり、商業も盛んである。三井をはじめとする多くの商人を生み、これらは「松阪商人」と呼ばれ、近世以降、各地で活躍した。JR紀勢本線、近鉄山田線、国道23号線等の三重県を縦断する主要交通機関が同市を通過し、人口10数万人を擁する県中南部の中心都市である。

丸野・中谷遺跡は同市の中心部から南東へ5kmの

郊外に位置する。この付近は、紀伊山地北端部の低位丘陵が途絶え、伊勢平野が広がりはじめる変換地点で、地質的には中位段丘堆積層が広がっている。この堆積層は赤褐色を呈し、円礫を含む。別名、松阪礫層と呼ばれ、後述する中谷遺跡（1）検出面は、これに相当するものと考えられる。中谷遺跡は低位丘陵北端の北～西斜面に広がり、北側に沖積平野を望む。西側には、幅50mの開析谷があり組み、細長い谷底平野を形成している。丸野遺跡（2）は中谷遺跡からこの谷を隔てた対岸に位置し、丘陵端部というよりは、低位段丘とすべき地形で、遺跡内は比



第1図 遺跡位置図 (1 : 50,000)『この地図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図(松阪)を掲載したものである。』



第2図 遺跡地形図（1：5,000）

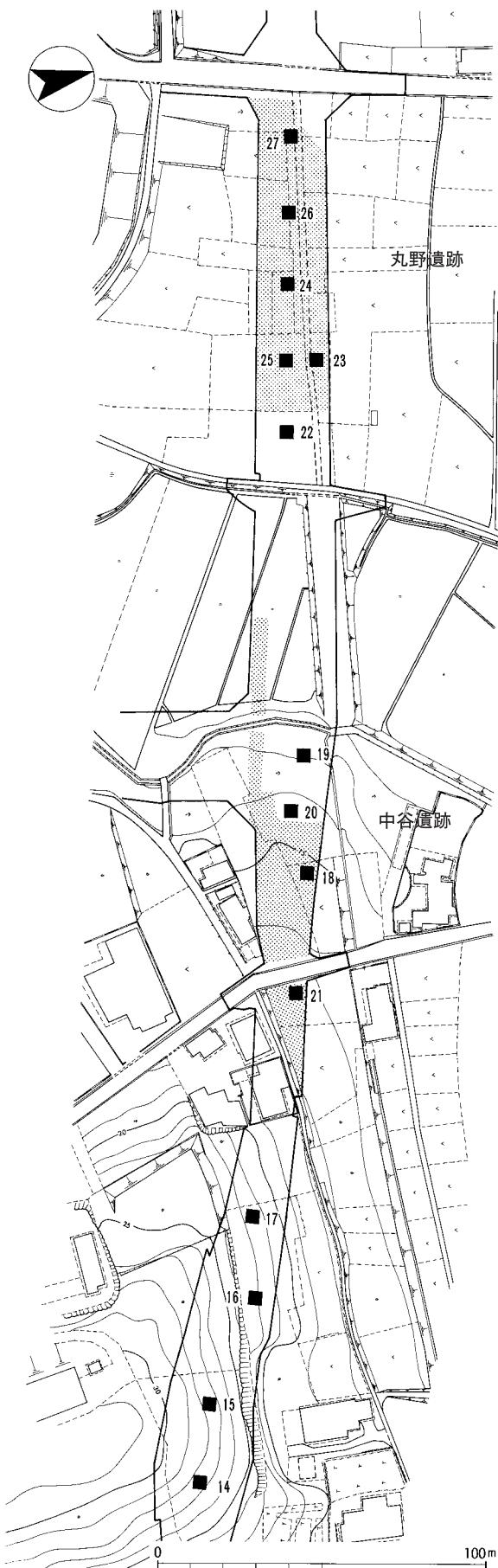
較的平坦である。現況は、丸野遺跡が畑、中谷遺跡は竹林、畑、宅地である。

## 2 歴史的環境

稻作を中心とする弥生文化は九州から東進し、やがて三重県に至る。県内最古の弥生土器は、前期中段階に相当し、丸野・中谷遺跡の北西9kmに所在する中ノ庄遺跡から出土している。これにより、近畿地方から雲出川を下り、中ノ庄遺跡に定着した弥生人が、一方は北進し、一方は東進したものと考えられてきた。丸野・中谷遺跡はこの東進先に所在することになる。近年、当遺跡の南東3.5kmに所在する金剛坂遺跡（3）から前期中段階に属する遺物が出土しており<sup>③</sup>、この伝播速度は極めて速いものであった様である。金剛坂遺跡をはじめとする伊勢平野南部のやや内陸寄りには前期新段階に至り、「垂流遠賀川式土器」と呼ばれる一群が分布する地域である。この一群については、縄文文化との接触をはじめとする弥生文化伝播の実相を示すものとして注目する研究者も多い。

さて、この弥生文化を享受することになるこの頃

の縄文遺跡については、奥義次氏により県内の遺跡数が集計されている<sup>④</sup>。それによると、縄文晚期後半の凸帶文系土器が出土した遺跡は1989年末現在、86ヶ所を数える。その分布は、伊勢平野において北勢地域で希薄であるのに対し、櫛田川水系や、雲出川水系では濃密な分布を示している。櫛田川水系に属する当遺跡周辺においては上出遺跡（4）、閑淨寺遺跡（5）、射原垣内B遺跡（6）等があげられ、<sup>⑤</sup>上出遺跡からは弥生時代前期の遺物も出土している。しかし、県内全般的に一遺跡からの出土量は微量に止まり、この傾向は馬見塚式期においては、いっそう顕著になる。このことから奥義次氏は、拠点的な大集落は希薄になり、小規模な集落に拡散していく様子を読み取っている。<sup>⑥</sup>また、この時期を代表する遺構として土器棺がある。県内では13遺跡から凸帶文系の土器棺が検出されているが、一遺跡からは4基を最多とし、群集するものは検出されていない<sup>⑦</sup>。これは、前述した出土遺物の状況とも合致する。また、単棺形態と合口形態の地域的な偏在は認められず<sup>⑧</sup>、これらの土器棺と住居の関係も明確でないものが多い。そのなかで、蛇亀橋遺跡では谷を隔て相対



第3図 調査区位置図 (1:2,000)

する低台地で2棟の竪穴住居が検出されている。<sup>⑨</sup>

この様な背景のなかで享受された弥生文化は、後期に至り環濠を伴う集落に発展するものが多くある。草山遺跡(7)、堀町遺跡(8)、杉垣外遺跡(9)、阿形遺跡等で環濠が検出されており、ある程度の時期差はあるものの、この地域での集中が顕著である。続く古墳時代には、伊勢国最大の前方後円墳、宝塚1号墳が築造され、強力な首長が成長したことを表している。また、平野に南接する低位丘陵上には、天王山古墳群(10)、高田古墳群(11)、山添古墳群(12)等、無数の群集墳が築かれ、佐久米古墳(13)のように沖積平野に立地するものもある。これ以降、伊勢神宮の存在が顕著になり律令期には斎宮の成立をみる。この斎宮、あるいは伊勢神宮と都を結ぶ官道は、松阪市駅部田町(14)から早馬瀬町(15)へ一直線に延びていたことが推定されており、その場合、丸野・中谷遺跡近辺を通過していたことになる。昭和初期にはこの経路に沿って当遺跡を縦断するかたちで伊勢電気鉄道が開通し、昭和16年の廃止まで通勤、通学、参宮の手段として機能した。また、近世参宮街道は当遺跡の北側を通過しており、律令期から近世、近代に至るまで、当遺跡は主要交通路に位置していたことになる。

(森川常厚)

[註]

- ① 鈴木忍ほか『松阪の地質』三重県教職員組合松阪支部 昭和56年1月30日
- ② 谷本銳次『中ノ庄遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会 1972
- ③ 萩原義彦・川崎志乃『金剛坂遺跡(第4次)辰ノ口古墳群(第2次)発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1999. 3
- ④ 奥義次「三重県における凸帯文系土器出土遺跡の分布相」『Miehistory vol. 1』三重歴史文化研究会 1990. 5
- ⑤ 松阪市史編さん委員会『松阪市史第二巻資料篇考古』1978. 10. 31
- ⑥ 前掲④に同じ
- ⑦ 森川幸雄「三重県の縄文墓址」『研究紀要第11号』三重県埋蔵文化財センター 2002年3月
- ⑧ 前掲⑦に同じ
- ⑨ 新田洋「蛇龜橋遺跡」『昭和56年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1982. 3
- ⑩ 松阪市教育委員会『草山遺跡発掘調査月報』1982~1985年
- ⑪ 小濱学ほか『堀町遺跡』三重県埋蔵文化財センター 2000. 3
- ⑫ 前掲⑤に同じ
- ⑬ 福田哲也ほか『ヒタキ庵寺・打田遺跡・阿形遺跡ほか』三重県埋蔵文化財センター 1992. 3
- ⑭ 足利健亮「大和から伊勢神宮への古代の道」『探訪古代の道第1巻』1988

### III 丸野遺跡

#### 1 遺構

##### (1) 地形と層序（第8・9図）

本調査区は、南側の丘陵部から北方へ張り出す台地縁辺部に相当する。

基本層序は、表土（1層）・旧耕作土（場所により表土でもある3層）・包含層（3'層）・いわゆる地山である基盤層（8層）・8層の非土壤化層である礫層（8'層）である。3層は土壤のブロックは細かく遺物もほとんど含まないことから、長期間にわたり耕作等の土壤の攪拌を受けていると考えられる。また、地表面からの堆積が浅いこともあり、本来の包含層3'層が削平されていた。したがって、遺構検出は8層上面で実施した。

なお、調査区の北半は伊勢電鉄線路（当区間は昭和5～17年開業）跡地であり、側溝や基礎工事の痕跡が残存していた。また、側溝は調査開始直前まで畠の排水溝として機能していた。調査区南東部の著しい搅乱は、主に植木の栽培あるいは抜き取り痕跡である。南北方向（一部東西方向）の区画溝は、表土直下の3層から切り込む遺構であり、近世後期の棧瓦等が出土したSD1より後出である点から搅乱扱いとした。

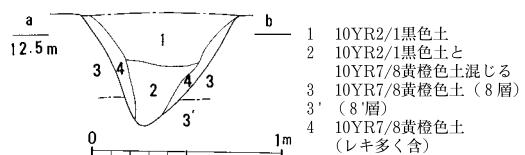
##### (2) 古墳時代前期の遺構

SD15（第4図） 幅60cm、深さ60cmを計る。平面的には、ゆるやかに円弧を描き、断面形態は、鋭利なV字状を呈する。基盤層である8層の下層に相当する礫層まで掘削されている。埋土は下層に礫混じりの崩落土が堆積し、上層に1層が堆積する。平面的にはゆるやかに円弧を描き、断面形態は鋭利なV字状を呈する。埋土には、少量の土師器が含まれており、時期的には古墳時代前期前半に相当する。

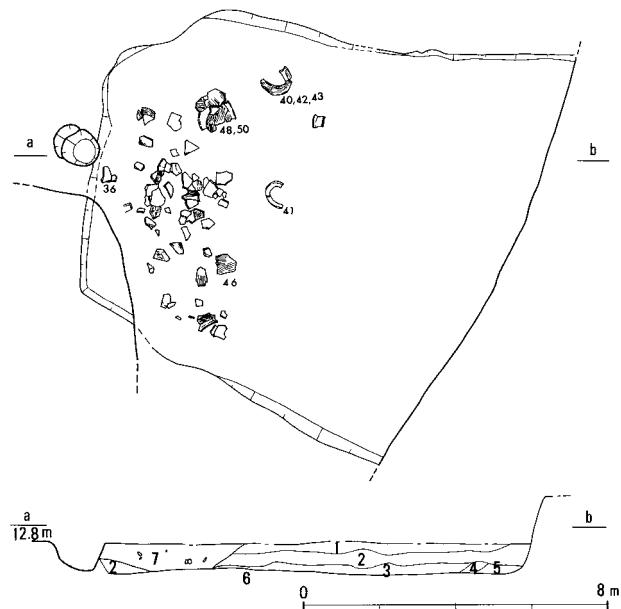
##### (3) 飛鳥～奈良時代の遺構

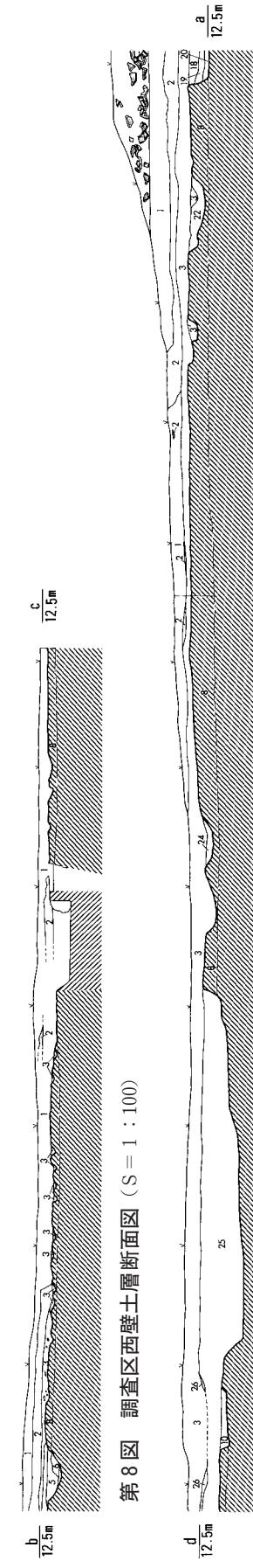
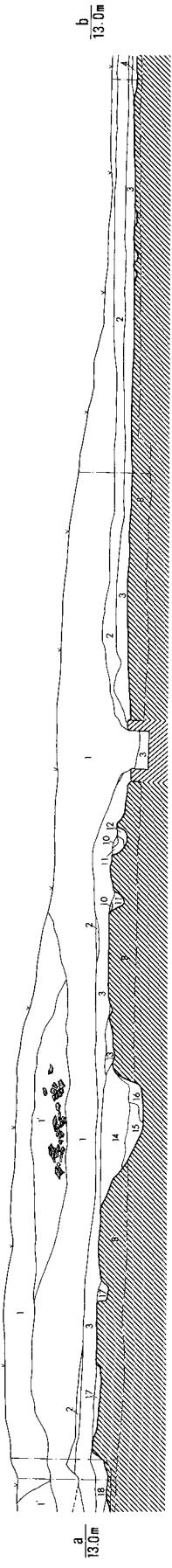
SH13（第5図） L17～18グリッドで検出した。床面付近からは51が出土した。埋土の7層には、多量の土師器が含まれていたが、欠損品が多い。時期的には、須恵器杯H<sup>①</sup>が出土していることから、TK217並行期頃と考えられる。

SH24（第6図） L19～M20グリッドで検出した。

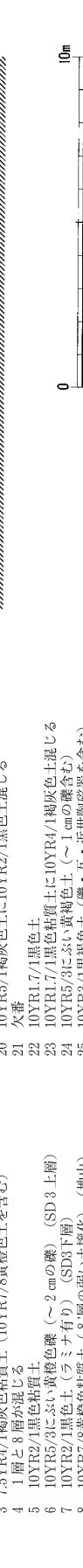
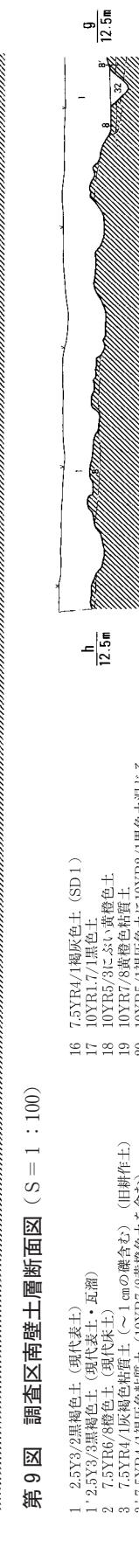
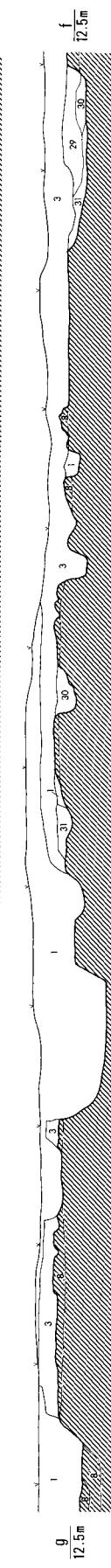
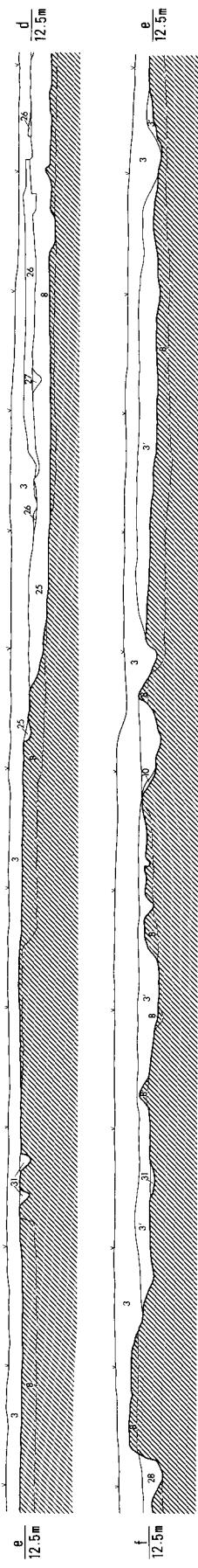
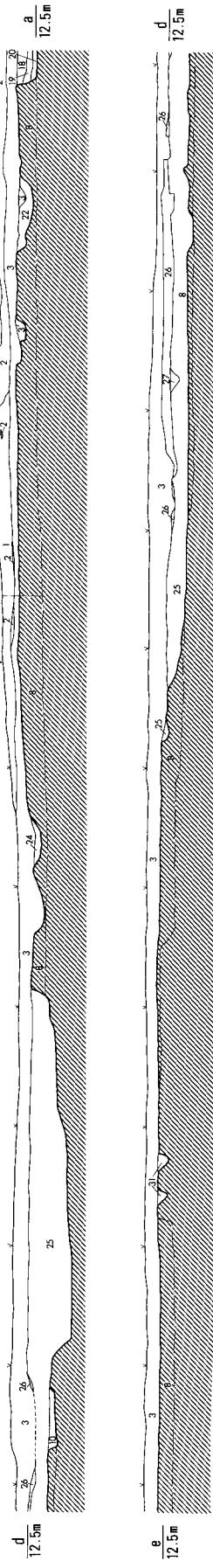


第4図 SD15土層断面図(1:40)



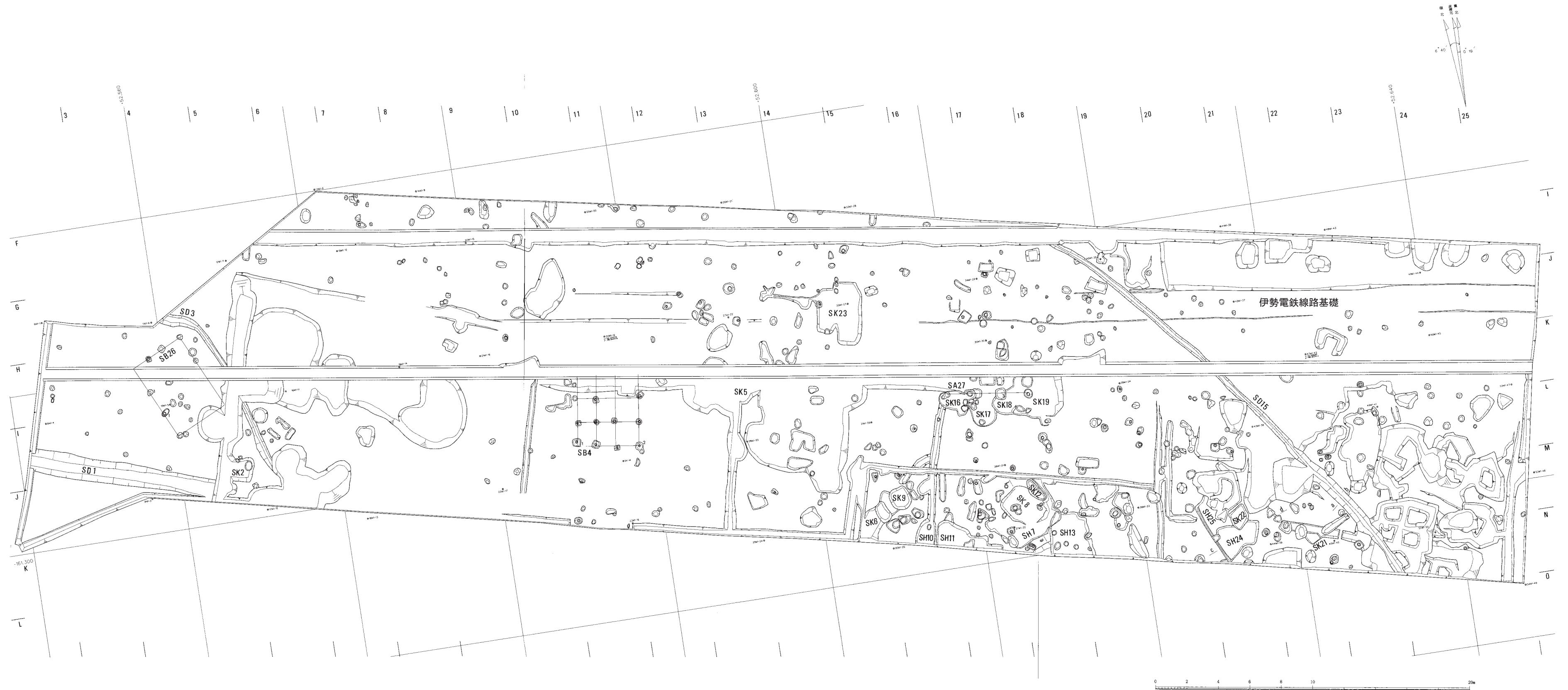


第8図 調査区西壁土層断面図 ( $S = 1 : 100$ )



第9図 調査区南壁土層断面図 ( $S = 1 : 100$ )

- 1 2.5Y3/3黒褐色土 (現代表土・瓦溜)  
2 2.5Y3/3褐褐色土 (現代表土・瓦溜)  
3 7.5YR7/8褐色土 (現代表土)  
4 7.5YR4/1灰褐色粘質土 (10YR7/8黄褐色土を含む)  
5 1層と8層が混じる  
6 10YR2/1黑色粘質土  
7 10YR5/3に多い黄褐色土 ( $\sim 2$  cmの屢)(SD3上層)  
8 10YR2/1黑色土 (ラミナ有り) (SD3下層)  
9 10YR7/8黄褐色粘質土 (8層の弱い土壊化) (地山)  
10 10YR8/3浅黃褐色粘土土 (屢含む)  
11 10YR6/2深黄褐色土  
12 10YR2/1黑色粘質土  
13 10YR5/4/1黄褐色土  
14 10YR4/4褐色土  
15 10YR2/1灰褐色土  
16 7.5YR4/1褐色土 (SD1)  
17 10YR1/7/1黑色粘質土に10YR4/1褐色土混じる  
18 10YR5/3に多い黄褐色土 ( $\sim 1$  cmの屢含む)  
19 10YR7/8黄褐色粘質土  
20 10YR5/1褐色土に10YR2/1黑色土混じる  
21 矢番  
22 10YR1/7/1黑色土  
23 10YR1/7/1黑色粘質土に10YR4/1褐色土混じる  
24 10YR5/3に多い黄褐色土 ( $\sim 1$  cmの屢含む)  
25 10YR3/1黑色土 (屢・瓦・近世陶磁器を含む)  
26 10YR5/4に多い黄褐色土 (近代整地土)  
27 10YR5/8黄褐色土 (近代整地土)  
28 10YR2/3黒褐色土 (風倒木)  
29 10YR1/7/1黑色粘質土 (SH13)  
30 10YR1/7/1黑色粘質土と10YR5/1褐色土と10YR7/8  
黄褐色土混じる (SH13)  
31 10YR2/1黑色土  
32 10YR2/1黑色粘質土 (SD15)  
33 10YR2/1黑色土 (SK9)



第10図 調査区平面図（1：200）（調査区内の座標値2点は、世界測地系による）

SH25の後出であり、SK22より前出である。

SH 7 (第7図) L 16~17グリッドで検出した。

SH 8・SH13・SK12と重複しており、SH13より後出であり、SH 8・SK12より前出である。

SH10 (第10図) L 15~16グリッドで検出した。

埋土に多量の遺物を包含していた。SH11より前出である。時期的には、須恵器杯<sup>①</sup>Gが出土していることから、TK217<sup>②</sup>並行期頃と考えられる。

SB26 (第11図) 調査区西寄りのH 3~I 4グリッドで検出した。東西3間(一間約1.2m)南北3間(南から一間約1.8m+1.5m+1.8m)の南北棟である。主軸はN 26°Wである。東に隣接するSD 3と類似する方向をとる。

SD 3 (第10図) 幅70cm、深さ18cmを計る。下層にはラミナが見られた。遺物を包含するのは上層のみで、礫も多く含む。

SK23 (第10図) H 14~I 15グリッドで検出した。平面的には約3mの隅丸方形で、豊穴住居の可能性もあるが、底面は不定形であった。

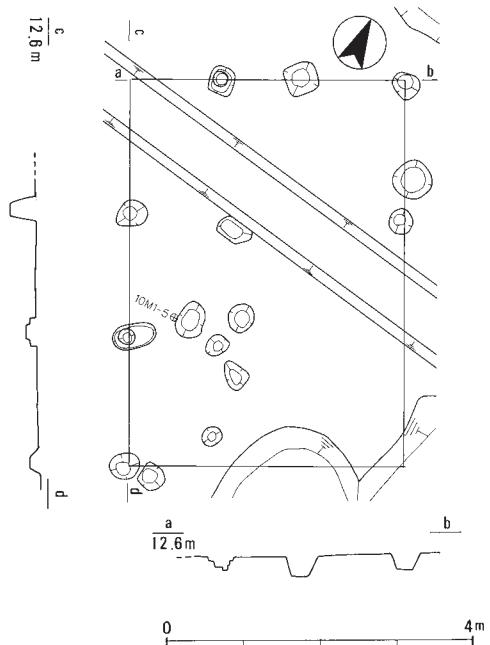
SK16・17・18・19 (第10図) 調査区中央部のJ 16~17グリッドで検出した。各土坑はそれぞれに埋土が異なり、重複することからそれぞれに番号を付けて遺物を取り上げた。不定形な形状であり、遺物も細片しか含まれていなかった。なお、SA27の柵と重複し、土坑群が前出である。

SK 6・9 (第10図) L 14~15グリッドで検出した。不定形の土坑である。埋土は単層で、遺物もほとんど含まない。

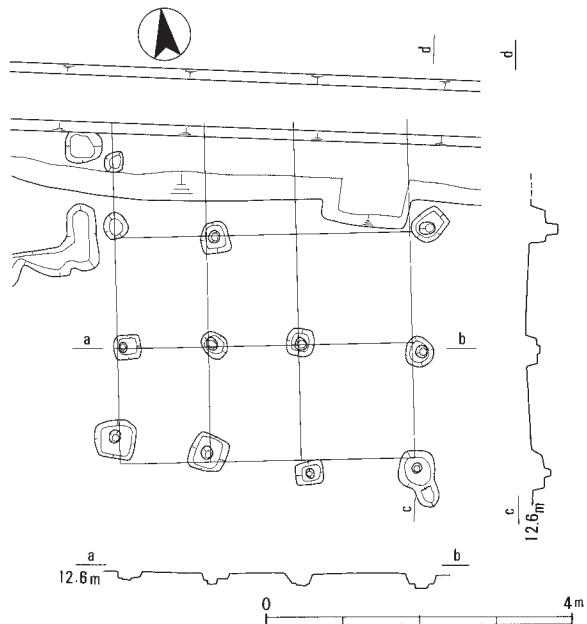
#### (4) 古代の遺構

SB 4 (第12図) 調査区中央部のJ 11~12グリッドで検出した。東柱がやや小振りであることから、東西3間(西から一間約1.2m+1.2m+1.5m)・南北2間(一間約1.5m)以上と考えられる。主軸はN 8°Eである。柱堀方は隅丸方形で、最大のもので一辺約50cm程度である。遺物は土師器片しかないとから遺物からの時期決定は困難であるが、柱堀方の形状からは古代と推定される。

SA27 (第10図) J 16~17で検出した。東西3間(1間は約1.8m)の柱列であり、主軸はN 8°Eである。柱列の北方は柱穴よりも低い標高まで削平されていたことから、北方に向かって掘立柱建物が立つ



第11図 SB26平面図・断面図 (1 : 100)



第12図 SB4 平面図・断面図 (1 : 100)

ていた可能性がある。柱堀方は隅丸方形で、最大のもので一辺約80cm程度である。遺物は土師器片しかないとから遺物からの時期決定は困難であるが、柱堀方の形状からは古代と推定される。

遺構番号	性格	時期	グリット	特徴・形状・計測数値など
SD1	溝	近世	I1～J4	棧瓦、土師器出土
SK2	土坑	飛鳥・奈良	I5～J5	土師器片出土
SD3	溝	奈良	G5～J5	土師器、須恵器出土
SB4	掘立柱建物	古代？	J11～J12	3間×2間以上、N8° E
SK5	土坑	古墳前期	J13	竪穴住居か？、台付甕片出土
SK6	土坑	飛鳥・奈良	L14～L15	350cm×200cm
SH7	竪穴住居	飛鳥	L16～L17	SK8・SK12と重複
SK8	土坑	飛鳥	L17	SH7・SK12と重複
SK9	土坑	奈良？	L15	140cm×150cm
SH10	竪穴住居	飛鳥	L15～L16	土師器片出土
SH11	竪穴住居	飛鳥・奈良	L15	土師器片出土
SK12	土坑	飛鳥・奈良	L17	長胴甕出土、焼土、SH7・SK8と重複
SH13	竪穴住居	飛鳥・奈良	L17～L18	上層部に多量の土器群
SH14				SH13下層に変更
SD15	溝	古墳前期	H18～M22	深さ60cm、二重口縁壺片出土
SK16	土坑	飛鳥	J16	SA27と重複
SK17	土坑	飛鳥・奈良	J16	SA27と重複
SK18	土坑	飛鳥・奈良	J17～J18	SA27と重複
SK19	土坑	飛鳥・奈良	J17～J18	SA27と重複
20	欠番			
SK21	土坑	飛鳥・奈良	M21	竪穴住居か？土師器出土
SK22	土坑	飛鳥	M20	150cm×140cm、SH24と重複
SK23	土坑	飛鳥	H14～I15	300cm×300cm
SH24	竪穴住居	飛鳥	L19～M20	SH25・SK22と重複
SH25	竪穴住居	古墳前期？	L19～M20	周溝を検出、SH24と重複
SB26	掘立柱建物	奈良	G3～I4	3間×3間の掘立柱建物、N26° W
SA27	柵	古代？	J16～17	3間（1間は1.8m）、N8° E

第1表 遺構一覧表

## 2 遺物

SD15（1～3） 1・2は土師器壺であり、1は口縁端部を板状工具により刻み、ヘラ描きを巡らせる。2は二重口縁壺である。3は小型の高杯である。個別には時期決定が困難であるが、ヘラミガキが見られず粗雑化している点や二重口縁壺がいわゆる伊勢型二重口縁壺でない点などから、古墳時代前期前半と考えられる。

SH24（4・5） 4は土師器甕である。口縁端部が垂下する点や頸部にハケ調整が残存する点で他の甕と異なるが、全体の形態および胎土や調整からは飛鳥・奈良時代の甕と考えられる。5は砥石である。石材の粒子は緻密で細かい。1カ所に孔が穿たれている。

SH10（6～9） 6は土師器椀、7は土師器杯である。6の内面には板状工具によるナデが残る。8は須恵器杯蓋である。返り部分が退化しており、陶邑編年のTK217型式に相当する。9は土師器甕である。

SH7（10・11） 10は須恵器杯蓋である。返り部分が退化しており、陶邑編年のTK217型式に相当する。11は敲石である。中央部には敲打痕が明瞭に残り、窪んでいる。

SK23（12～15） 12は須恵器杯身、13は須恵器高杯である。14は土師器皿、15は土師器高杯である。14は口縁部をつまみ上げる。15の脚上部には、杯部との接合時に杯部側に刻んだ痕跡がネガで見られる。脚柱部は板状工具による面が見られるが、意識的な面取りとまではいえない。

SK22（16・17） 16は須恵器杯蓋。内面の同心円痕は難にナデ消される。外面には植物痕跡が残る。17は土師器椀である。

SK12（18・19） 18・19は土師器甕である。

SK21（20） 20は土師器椀である。

SK16（21） 21は土師器甕である。

SK18（22） 22は土師器甕である。

SK19（23） 23は土師器甕である。口縁端部が板状工具で刻まれている。

SD3（24・25） 24は土師器杯、25は土師器甕である。

M16Pit3（26） 26は土師器甕の底部である。内面

には、接合痕と指押さえ痕跡が明瞭に観察でき、粘土紐を輪積みして成形していることがわかる。

SH13上層（27～50） 27～34は粗製の土師器椀である。31・32の内面は、丁寧にナデて仕上げられている。33の外面には、ヘラ描きが刻まれている。34は内外面ともにヘラケズリされている。35は把手付椀である。36は土師器杯である。37は須恵器杯蓋、38は須恵器高杯である。39は粘土塊である。一部に、植物の茎状の圧痕が付着している。40～50は土師器甕である。口縁部径は約14～15cmの40～42、約19～20cmの43～49、30cm以上の50の3種類が見られ、各サイズはほぼ一定である。基本的には、ハケ調整後内面下半部をヘラケズリで仕上げるが、42の底部はヘラケズリがない点でイレギュラーである。成形は円形の粘土板に粘土紐を輪積みしている。45は外面に粘土が付着している。時期的には、須恵器が陶邑編年のTK217型式に相当する。

SH13下層（51） 51は土師器椀である。器高が高く、やや薄い。

包含層（52～79） 52～54は縄文土器である。52・53は縄文早期の押型文土器である。52の施文は深くしっかりと刻まれており、市松文が縦施文されている。大川式<sup>③</sup>に相当する。53の施文は薄いが、楕円形の施文がネガで刻まれており、神宮寺式<sup>③</sup>に相当する。54は無節の撫糸文が縦施文されている。

55・56は弥生土器壺である。55は、貼り付け突帶上に板状工具による刻目が刻まれる。56も頸部付近に突帶が貼り付けられ、板状工具により刻目が施される。頸部上方は、櫛状の工具により隙間なく直線文が施される。直線文の単位は約5cmで単位ごとに施文工具が土器から離れている。時期的には、貼り付け突帶と櫛状工具による全面施文から弥生時代中期前葉ごろと考えられる。

57は土師器壺である。58～61は土師器甕である。58は叩き甕である。外面は粗い叩き後にハケ調整で仕上げられている。内面はヘラケズリされており、頸部は鋭く屈曲する。器壁はやや厚い。59～61は台付甕の脚台部であり、60・61はいわゆる宇田甕の脚台部である。時期的には、57～59が古墳時代前期前半に相当する。

62は土師器椀、63は土師器杯、64は土師器皿、65・

66は土師器高杯、67は土師器台付椀である。64は内面にヘラ描きが刻まれる。口縁端部は肥厚する。

65は脚柱部をヘラケズリにより、66は板状工具により面取りされている。脚は65が中空で、66が柱実である。65・66ともに杯部にはハケ調整が残る。67は胎土が緻密で、色調も赤みを帯びる精製品である。内面は摩滅しているために、暗文は確認できない。

68～70は須恵器杯身、71は須恵器高杯、72は須恵器甌である。72は注口部が突出している。底部付近は手持ちのヘラケズリで成形され、ナデ消される。須恵器からは陶邑編年のTK217型式に相当すると考えられる。

73は土師器甌である。

74・75は須恵器甌である。74の内外面には、黒褐色の施釉がみられる。

76は陶器椀（山茶椀）である。高台部には粉殻痕が付着しており、尾張産と考えられる。

77は土師質の土製品である。ヘラ描きが刻まれる。胎土が緻密で、焼成も良好のため、極めて新しい時期の遺物である可能性も考えられる。

78・79は敲石である。いずれも2面の中央部に敲打痕が見られる。また、78の片面は面全体が研磨されており、表面が滑らかになっている。

### 3 結語

#### (1) 丸野遺跡の動態

##### 1期（古墳時代前期前半）

SD15は平面形態が円弧状を呈しており、写真図版1および2を参照すると段丘縁に相当する部分が掘削されていることが分かる。この点からは、段丘縁に環壕状に巡っている可能性が伺われる。

##### 2a期（飛鳥・奈良時代）

SH13には、埋土に多量の土師器の投棄が見られる。また、性格不明の不定形な土坑が多い。

##### 2b期（古代？）

SB4・SA27の時期は出土遺物が少なく明確でないが、柱壠方が隅丸方形状を呈し方形を意識していることが明らかであり、中世にまで下らない可能性が高い。また、SA27は飛鳥・奈良時代の土坑群より後出の遺構である。

#### (2) 飛鳥・奈良時代の土器

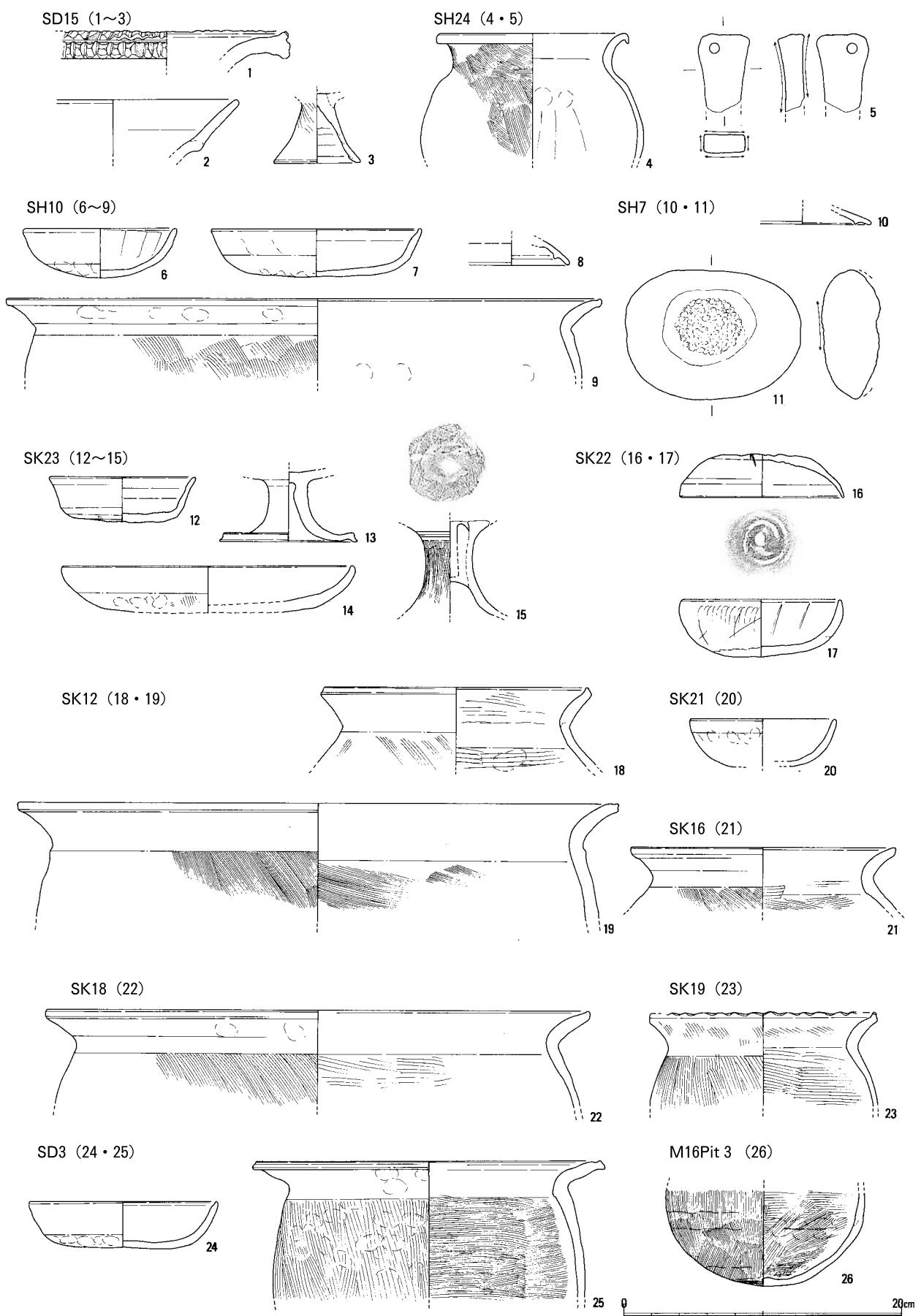
器種組成は圧倒的に土師器が多く、須恵器は稀少

である。土師器は供膳具の粗製椀と煮沸具の甌が大半を占め、甌は口縁部径14～15cm、19～20cm、30cm以上の3種類のサイズにほぼ統一されている。

時期的には、須恵器が少ない点で詳細な時期決定が困難であるが、全体総遺物出土量の大半が粗製椀と甌であり、わずかに出土した須恵器が杯Hから杯Gに移行する時期の所産である。したがって、おおむね陶邑編年のTK217型式に並行する時期が主体を占めると考えられる。

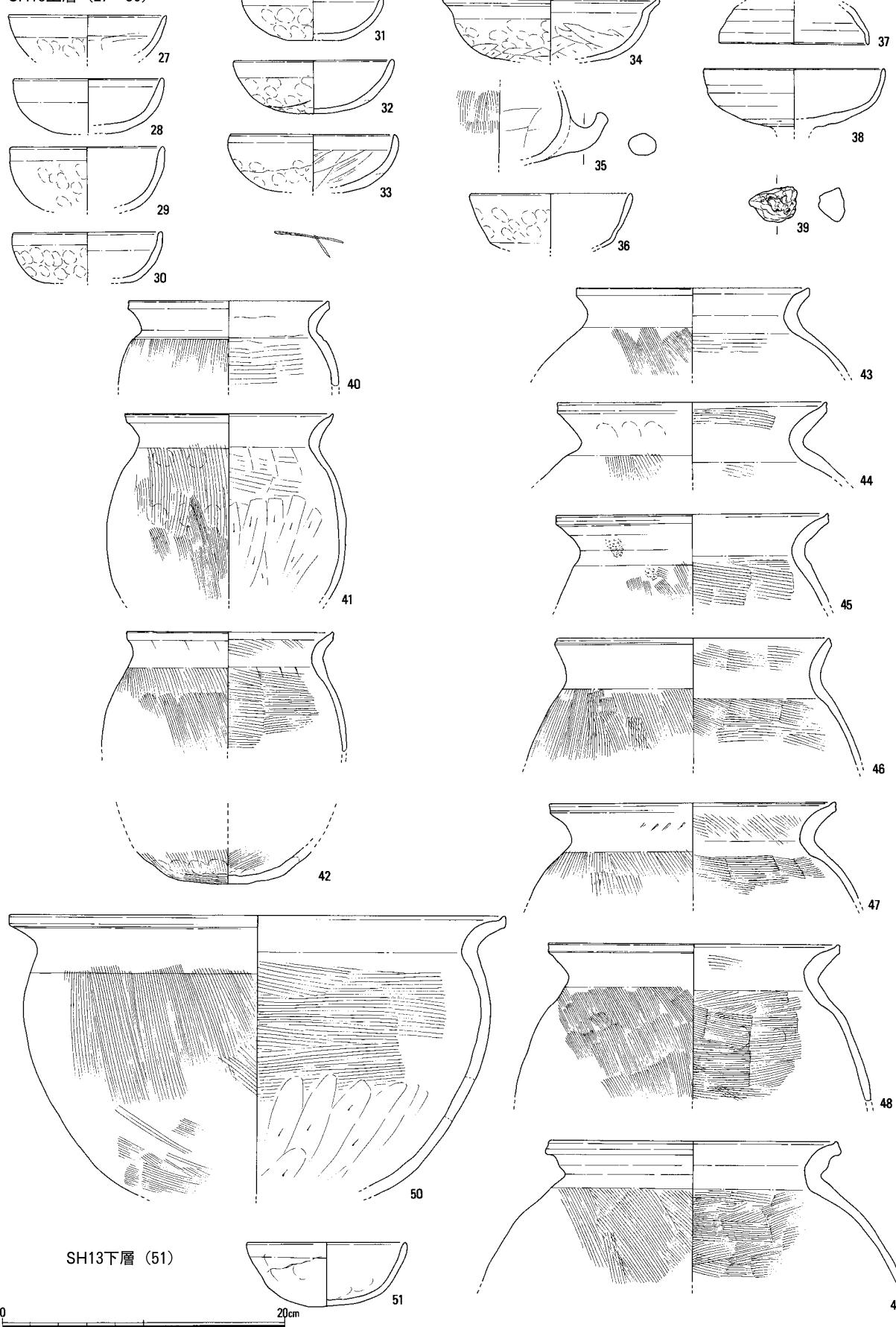
#### [註]

- ① 古代の土器研究会編『古代の土器1 都城の土器集成』1992年
- ② 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年
- ③ 山田猛「考察 繩文土器」『鴻ノ木遺跡』三重県埋蔵文化財センター 1998年

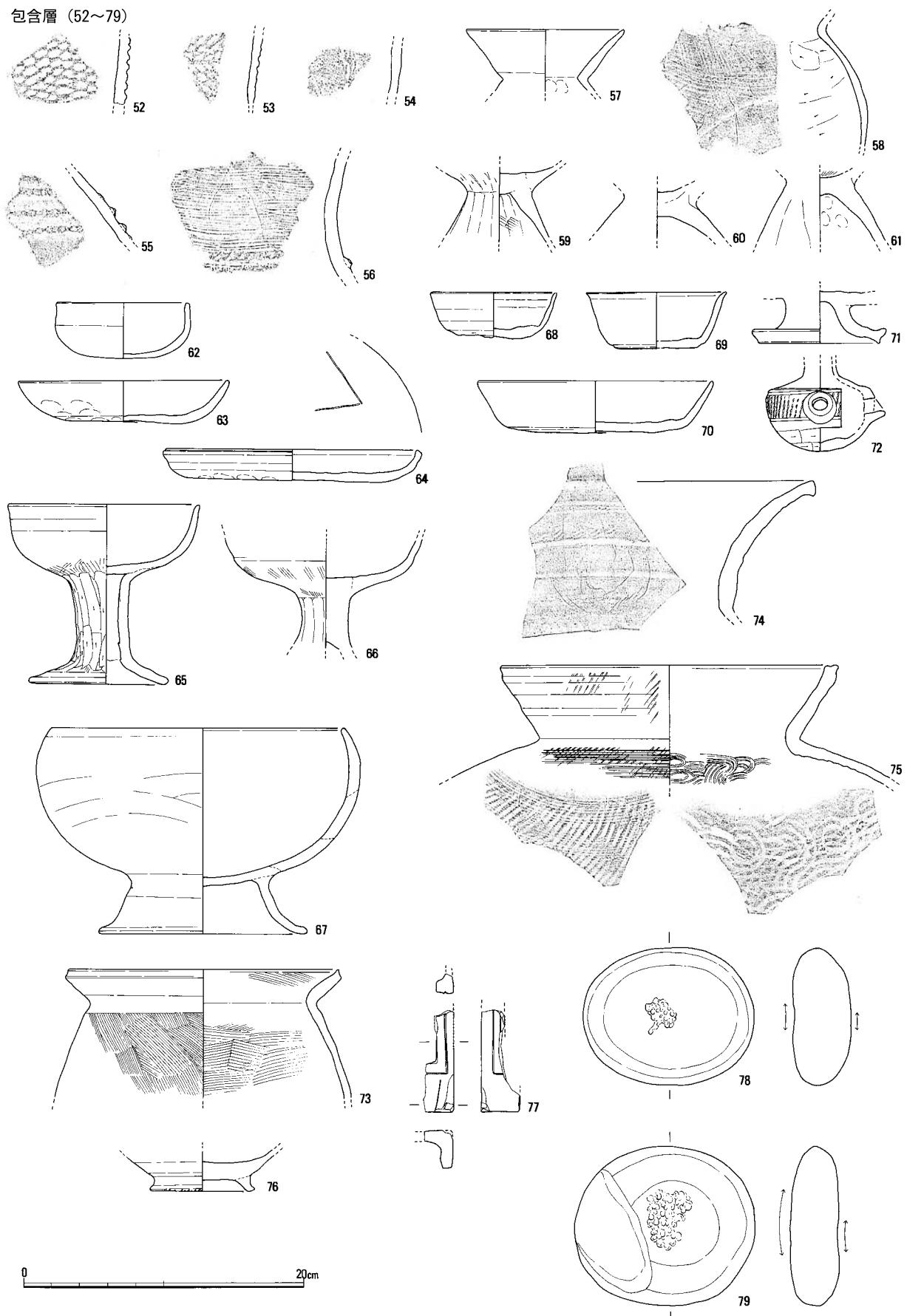


第13図 出土遺物実測図(1) (1 : 4)

SH13上層 (27~50)



第14図 出土遺物実測図(2) (1 : 4)



第15図 出土遺物実測図(3) (1 : 4)

報告番号	実測番号	器種等		グリッド	遺構・層位等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
		質	器形								
1	1303	土師器	壺	I19	SD15	—	ナデ・刻目・ヨコナデ	粗	にぶい黄橙 10YR6/4	細片	
2	1207	土師器	壺	K21	SD15	—	ナデ・ヨコナデ	粗	橙 5YR6/6	細片	
3	1206	土師器	高杯	K21	SD15	底部5.0	ナデ・ハケメ・ヨコナデ	やや密	橙 5YR6/6	完存	
4	801	土師器	甕	M20	SH24	口13.3	ナデ・ハケメ・ヨコナデ	やや密	にぶい橙 7.5YR7/4	3/8	口縁部内面に炭化物付着
5	1002	石	砥石	M20	SH24	5.6	穿孔			欠損	
6	804	土師器	椀	L15	SH10	口10.8	ナデ・板ナデ・ヨコナデ	やや密	にぶい橙 7.5YR7/4	1/6	
7	802	土師器	杯	L15	SH10	口15.0	ナデ・ヨコナデ	やや密	橙 5YR6/6	1/4	
8	1004	須恵器	杯蓋	L15	SH10	—	回転ナデ	やや密	灰白 5Y7/1	細片	
9	901	土師器	甕	L15	SH10	口42.6	ナデ・ハケメ・ヨコナデ	やや粗	にぶい橙 5YR7/4	1/6	被熱による変色
10	1003	須恵器	杯蓋	L16	SH7	—	回転ナデ	やや粗	灰 N5/	細片	
11	1001	石	敲石	M17	SH7	9.4				欠損	敲打痕
12	1104	須恵器	杯	H14	SK23	口10.4	回転ナデ・回転ケズリ	やや密	灰 7.5Y5/1	2/3	
13	1201	須恵器	高杯	I14	SK23	底部9.8	回転ナデ	やや密	灰 7.5Y5/1	1/6	
14	1105	土師器	皿	I14	SK23	口20.8	ナデ・ハケメ・ヨコナデ	やや粗	にぶい黄橙 10YR7/4	1/6	
15	1202	土師器	高杯	I14	SK23	基部5.8	ナデ・ハケメ・ヨコナデ	やや密	浅黄橙 10YR8/4	完存	
16	1204	須恵器	杯蓋	M20	SK22	口11.7	回転ナデ・回転ケズリ	粗	灰 5Y6/1	1/2	内面に同心円痕 外面に植物痕
17	1203	土師器	椀	M20	SK22	口11.2	ナデ・板ナデ・ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/4	2/3	
18	903	土師器	甕	L17	SK12	口19.0	ナデ・ハケメ・ヨコナデ	やや密	浅黄橙 10YR8/3	1/4	被熱による変色
19	902	土師器	甕	L17	SK12	口43.0	ナデ・ハケメ・ヨコナデ	やや粗	にぶい橙 5YR7/4	1/8	被熱による変色 内面剥離激しい
20	1205	土師器	椀	M21	SK21	口10.3	ナデ・ヨコナデ	やや密	橙 7.5YR7/6	1/4	
21	1102	土師器	甕	J16	SK16	口18.9	ナデ・ハケメ・ヨコナデ	やや密	橙 5YR6/6	1/4	被熱による変色
22	1101	土師器	甕	J17	SK18	口38.8	ナデ・ハケメ・ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/4	1/8	被熱による変色
23	1103	土師器	甕	K17	SK19	口15.9	ナデ・ハケメ・ヨコナデ・刻目	やや粗	にぶい黄橙 10YR7/4	1/4	
24	1302	土師器	杯	F4	SD3	口13.3	ナデ・ヨコナデ	やや粗	にぶい黄橙 10YR7/3	完存	内外面に煤付着
25	1301	土師器	甕	I5	SD3	口24.6	ナデ・ハケメ・ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/4	1/3	外面に煤付着 被熱による変色
26	1403	土師器	甕	M16	Pit3	—	ナデ・ハケメ・ヨコナデ	やや密	浅黄橙 10YR8/3	1/2	被熱による変色
27	204	土師器	椀	L17	SH13 p1	口11.0	ナデ・板ナデ・ヨコナデ	やや密	にぶい橙 10YR7/6	1/4	
28	205	土師器	椀	L17	SH13 p7	口10.4	ナデ・ヨコナデ	やや密	にぶい橙 7.5YR7/6	1/3	
29	302	土師器	椀	L17	SH13	口10.7	ナデ・ヨコナデ	粗	にぶい橙 7.5YR7/4	1/8	
30	202	土師器	椀	L17	SH13	口10.4	ナデ・ヨコナデ	やや密	にぶい橙 7.5YR7/4	1/3	
31	207	土師器	椀	L17	SH13 p7	口9.8	ナデ・ヨコナデ	やや密	にぶい橙 7.5YR7/4	1/4	
32	206	土師器	椀	M18	SH13	口11.2	ナデ・ヨコナデ	やや密	にぶい橙 7.5YR7/4	1/8	
33	201	土師器	椀	L17	SH13	口11.5	ナデ・板ナデ・ヨコナデ	やや密	にぶい橙 7.5YR7/4	2/5	外面にヘラ描き
34	301	土師器	椀	M17	SH13	口15.0	ナデ・ヨコナデ・ケズリ	やや密	にぶい橙 7.5YR7/6	1/5	
35	306	土師器	把手付椀	L17	SH13 p10	—	ナデ・ハケメ・貼付	やや密	橙 7.5YR6/6	細片	
36	203	土師器	杯	L17	SH13 p5	口11.2	ナデ・ヨコナデ	やや密	にぶい橙 7.5YR7/6	1/4	
37	303	須恵器	杯蓋	L17	SH13	口10.4	回転ナデ	やや粗	灰 5Y6/1	1/6	
38	304	須恵器	高杯	L17	SH13	口12.6	回転ナデ・回転ケズリ	やや粗	灰 5Y7/1	1/8	
39	305	土師質	粘土塊	M18	SH13	—		粗	にぶい黄橙 10YR6/4	細片	

第2表 出土遺物観察表(1)

40	403	土師器	甕	L17	SH13 p3	口14.0	ナデ・ハケメ・ヨ コナデ	やや粗	にぶい橙 7.5YR7/4	1/3	被熱による変色
41	404	土師器	甕	L17	SH13 p8	口14.5	ナデ・ハケメ・ヨ コナデ・ケズリ	やや密	にぶい橙 7.5YR7/4	2/3	被熱による変色
42	503	土師器	甕	L17	SH13 p3	口14.4	ナデ・ハケメ・ヨ コナデ	やや密	にぶい橙 7.5YR6/4	2/3	被熱による変色外面に 煤付着
43	501	土師器	甕	L17	SH13 p7	口16.3	ナデ・ハケメ・ヨ コナデ	やや密	にぶい橙 7.5YR7/4	1/3	被熱による変色
44	604	土師器	甕	M17	SH13	口18.9	ナデ・ハケメ・ヨ コナデ	やや密	浅黄橙 10YR8/3	1/4	
45	603	土師器	甕	M17	SH13	口19.1	ナデ・ハケメ・ヨ コナデ	やや密	浅黄橙 10YR8/3	1/6	
46	602	土師器	甕	L17	SH13 p6・10	口19.0	ナデ・ハケメ・ヨ コナデ	やや密	にぶい橙 7.5YR7/4	1/4	被熱による変色
47	601	土師器	甕	L17	SH13 p3	口20.0	ナデ・ハケメ・ヨ コナデ	やや密	にぶい橙 7.5YR7/4	2/3	被熱による変色
48	402	土師器	甕	L17	SH13 p2	口20.4	ナデ・ハケメ・ヨ コナデ	やや密	にぶい橙 7.5YR7/6	1/4	被熱による変色
49	401	土師器	甕	L17	SH13	口20.0	ナデ・ハケメ・ヨ コナデ	やや密	にぶい橙 7.5YR7/4	1/3	
50	701	土師器	甕	L17	SH13 p2	口34.8	ナデ・ハケメ・ヨ コナデ・ケズリ	密	浅黄橙 7.5YR8/4	1/4	
51	803	土師器	椀	M17	SH14	口11.2	ナデ・ヨコナデ	やや密	橙 7.5YR7/6	1/2	
52	1803	縄文土器	深鉢	M17	SH13	—	押型文	やや密	暗灰黄 2.5YR5/2	細片	
53	1805	縄文土器	深鉢	M21	包含層	—	押型文	粗	にぶい褐 7.5YR5/4	細片	
54	1806	縄文土器	深鉢	M22	SD15	—	撚糸文	粗	にぶい褐 7.5YR5/3	細片	
55	1804	弥生土器	壺	I22	SD15	—	貼付ナデ・刻目	やや粗	にぶい橙 7.5YR6/4	細片	
56	1802	弥生土器	壺	I9	遺構検出	—	櫛描文・貼付ナデ・ 刻目	やや粗	にぶい橙 7.5YR6/4	細片	
57	1704	土師器	壺	J17	包含層	口11.0	ナデ・ヨコナデ	やや密	浅黄橙 10YR8/3	1/8	
58	1801	土師器	甕	M22	包含層	—	ナデ・タタキ・ハ ケメ・ケズリ	やや密	橙 5YR6/6	細片	外面に煤付着
59	1705	土師器	台付甕	M22	包含層	基部4.7	ナデ・板ナデ	粗	にぶい黄橙 10YR6/3	脚上 完存	
60	1005	土師器	台付甕	L17	SK12	—	ナデ・板ナデ・ヨ コナデ	やや密	浅黄橙 7.5YR8/4	脚上 完存	
61	1706	土師器	台付甕	L18	包含層	基部5.4	ナデ・板ナデ	やや密	浅黄橙 10YR8/3	脚上 完存	
62	1404	土師器	杯	I14	遺構検出	口9.2	ナデ・ヨコナデ	やや密	浅黄橙 10YR8/3	1/5	
63	1402	土師器	皿	L11	表土掘削	口14.8	ナデ・ヨコナデ	やや密	浅黄橙 7.5YR8/4	3/8	
64	103	土師器	皿	I6	P1	口17.4	ナデ・ヨコナデ	やや密	橙 5YR6/6	7/8	内面にヘラ描き
65	101	土師器	高杯	K17	包含層	口13.4	ナデ・ハケメ・ケ ズリ	やや密	にぶい橙 7.5YR7/4	ほぼ 完存	
66	1702	土師器	高杯	M20	包含層	基部3.2	ナデ・ハケメ・ヨ コナデ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/4	完存	
67	1701	土師器	台付椀	M20	包含層	口20.8	ナデ・板ナデ・ヨ コナデ	密	橙 2.5YR6/6	1/2	
68	102	須恵器	杯身	J14	遺構検出	口8.9	回転ナデ・回転ケ ズリ	密	灰 N4/6	1/2	
69	1603	須恵器	杯	H10	カクラン	口9.8	回転ナデ・ヘラ切 り	やや密	灰白 N7/0	1/6	
70	1604	須恵器	杯	M16	遺構検出	口16.6	回転ナデ・ヘラ切 り	やや密	灰白 N7/0	1/8	
71	1602	須恵器	高杯	H8	カクラン	台部8.4	回転ナデ	やや粗	灰白 N7/0	3/8	
72	1601	須恵器	匙	L15	Pit7	7.7	回転ナデ・手持ち ケズリ・刺突文	密	灰白 5Y7/1	—	
73	1401	土師器	甕	M17	遺構検出	口19.1	ナデ・ハケメ・ヨ コナデ	やや密	浅黄橙 10YR8/3	1/4	
74	1502	須恵器	甕	L15	遺構検出	—	ナデ・波状文・ヨ コナデ	やや密	灰白 10YR8/1	細片	口縁部に施釉
75	1501	須恵器	甕	J12	遺構検出	口23.6	タタキ・カキメ・ ヨコナデ	やや密	灰白 N8/0	1/4	
76	1703	陶器	椀	K15	包含層	台部6.5	ナデ・貼付高台・ ヨコナデ	やや密	灰黄褐 10YR6/2	7/8	糊殻痕
77	1903	土師質	土製品	I14	カクラン	—	ナデ・ヘラ描き	やや密	にぶい橙 7.5YR6/4	—	
78	1901	石	敲石	M17	遺構検出	12.1				完存	敲打痕
79	1902	石	敲石	M17	遺構検出	12.8				欠損	敲打痕

第3表 出土遺物観察表(2)

## IV 中谷遺跡

### 1 層序

#### (1) A区

緩やかに傾斜する北西斜面で、畠地となっている。耕作土は10cm～20cmで、その下が赤褐色土<5YR 4/6>である。この層の上面で遺構検出を行った。この間に厚さ10cm程度のにぶい橙色粘質土<5YR 7/4>をはさむ個所もあるが、遺物をほとんど含有しておらず、包含層とすることはできない。検出面とした赤褐色土は厚さ10cm程度しかない。その下は同じ赤褐色ではあるが礫を多量に含み非常に硬く締まった層で、既述した「松阪礫層」<sup>①</sup>と呼ばれるものと考えられる。この層の上面でも再度遺構検出を行った。しかし、遺構は全て赤褐色土から切り込んでいるようである。

#### (2) B区

A区と同様に北西に傾斜する斜面であるが、調査区南側への谷の侵入も加わり、全体として西に傾斜する弱い尾根状を呈する。したがって、調査区中央部では侵食作用が強く働いているものと思われ、厚さ20cmほどの耕作土の直下が既述した松阪礫層になる。A区で認められる赤褐色土は流失しているものと推測され、遺構検出はこの礫層上面で行った。調査区南端では包含層に相当するにぶい黄褐色土<10 YR4/3>が残存する部分もあるが、包含層とするほどの遺物の含有は無い。地表から検出面までが浅いため、各所に搅乱土が認められ、畠作から宅地等に転用された箇所では、耕作土が削り取られ客土が厚く堆積する。

#### (3) C区

B区の西側、丸野遺跡との間に広がる谷に設定した調査区である。遺構は検出されず層序のみを報告する。

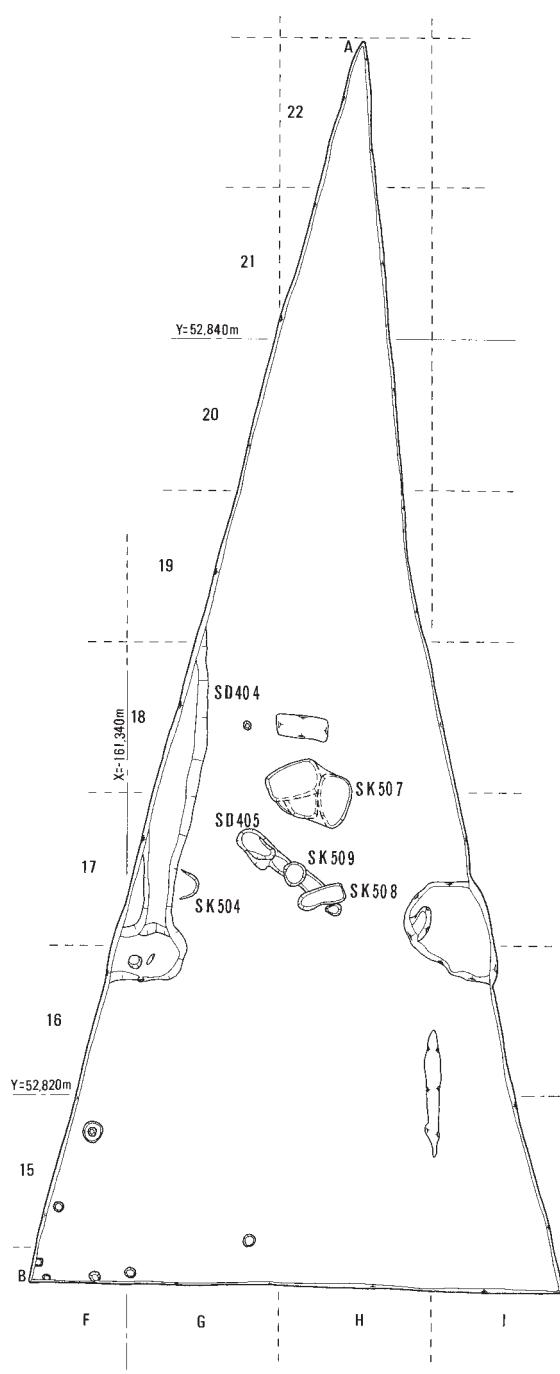
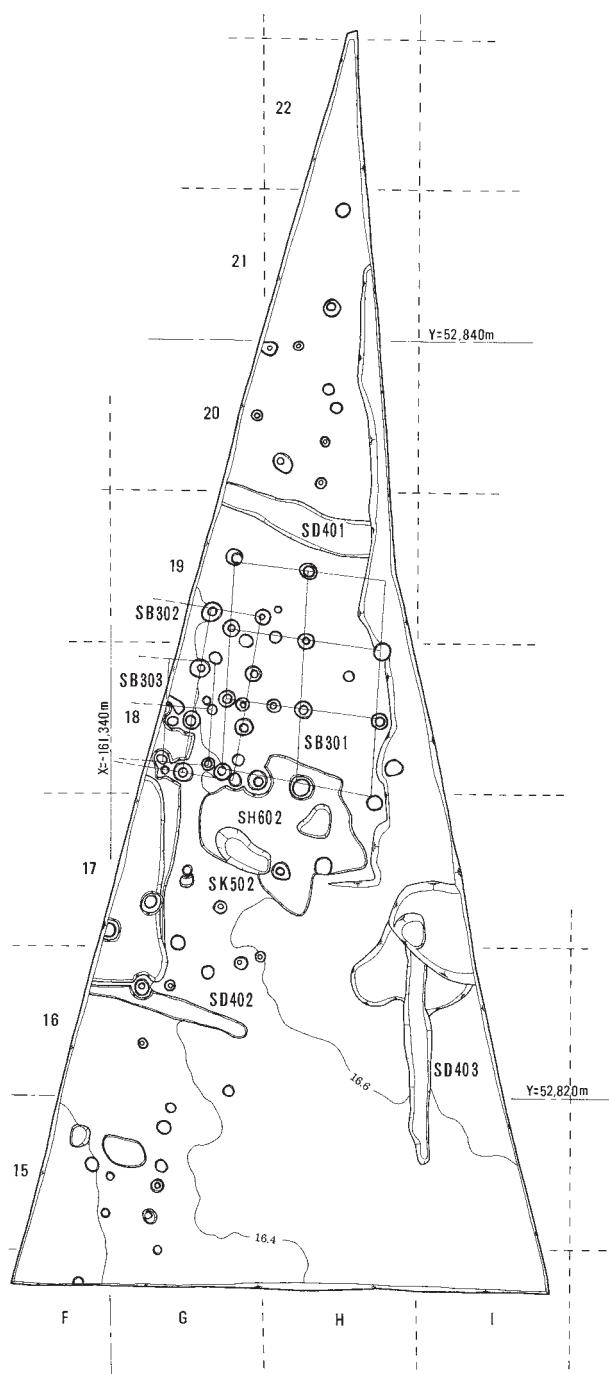
調査区東端に圃場整備前の用廐水路と思われる地層や、一部に層位の乱れる箇所はあるものの、基本的には平行堆積の層序である。厚さ30cmの水田耕作土の下には2層の旧耕作土がみられ、その下に厚さ10～20cmのオリーブ黒色土<5Y3/1>が広がる。この層からは山茶椀と煙管（42）が出土している。煙

草の伝来は16世紀とされていることから、この上層に位置する旧耕作土は近世以降のものであることがわかる。その下は、黒色系の有機質粘質層と砂礫層の互層となり、流れたり淀んだりしていたことが推測される。この層からは、8世紀前半の須恵器（41）が出土しており、この谷の埋没がこの頃から中世までに進んだものと考えられる。その下、地表から170cmで浅黄色粘土<5Y7/4>に至る。この層は、よく締まった無機質の粘土で、この谷のある時期の底と考えられる。ただし、この粘土はよく締まっているものの部分的に有機質分が残り茶褐色を呈する箇所もある。したがって、完全な安定層とはいえないが、湧水も激しく遺物の出土も無いため、これ以下の掘削は行わなかった。

### 2 遺構

A区では既述したように上下2層にて検出を行ったが、上下の検出面の差は4～10cm程度である。下層検出遺構のほとんどが上層検出遺構の直下に位置することもあり、後述するように下層検出遺構の大半は上層遺構と一体、あるいは上層から検出可能であったものと考えられる。出土遺物も少なく時期決定が困難なものが多い。奈良時代の土師器片・須恵器片と縄文土器片が出土しており、これらいずれかの時期に属するものと推測されるが、検出面が耕作土直下であり、後世のものも含まれる可能性も大きい。

B区では縄文時代晚期後半の土器棺群や土坑群、多数の柱穴状遺構を検出した。出土遺物は土器棺を除けば僅少であり、柱穴状遺構の東端のものから須恵器の甕片、南東隅にちかいものから近世陶器が出土している他は、全て縄文土器である。なお、土器棺及び土壤墓想定遺構については、埋土の洗浄を行い微細遺物の検出を試みた。その結果、剥片や炭を採集し、詳細は第4・5表のとおりである。また、自然科学分析については、検出面が非常に浅いことから後世の影響が強く及ぶことが予想されたため化学的な分析は断念せざるを得ず、SX102・SK7に



0 10m

第16図 A区遺構平面図 (1 : 100)

についてのみ詳細な微細遺物の同定を実施した。結果は後述のとおりである。

### (1) 土器棺

検出した6基は全てB区からの検出で、削平により上半を欠損している。6基とも一定の間隔を保って検出され、全て縄文時代晩期後半に属するものである。

**SX101（第20図）** B区北東部で検出した。75cm×50cmの楕円形の土坑に縄文土器片が充満した状態で検出された。深さは10cm程度しか残存していない。上部の小片を取り除くと深鉢体部（4）の残存が明らかになり、これも横位の土器棺であるものと推測される。口縁部方向は北と思われるが判然としない。また、土壙中央部の浅い位置には底部片（2）があり、これは前述した4とは別個体と推測されるものである。他にも2と同様な赤褐色系の発色を呈する小片もあり、4と2の合口であった可能性もある。小片の観察では少なくとも3個体分の土器片があるものと考えられ、覆い被さる破片も多く、4の残存も他の土器棺と比べ劣悪なことから、一般的な土器棺とするには早計かもしれない。埋土には若干の炭を含んでいる。

**SX102（第20図）** B区中央部で検出した土器棺である。単棺で、口縁部を北東に向けて埋設している。後世の削平のため、横位に寝かせた深鉢の上半1/2を欠損している。口縁部付近には、別個体片も無く、蓋をした様子は認められない。掘形は、65cm×40cmの隅丸方形であるが比較的土器の形態に従っており、底部の位置はそれに従いやや浅く掘削している。埋土には若干のサヌカイト剥片と炭が含まれている。後述の分析の結果、炭には常緑針葉樹のマツと落葉広葉樹のコナラの2種がある。

**SX103（第20図）** B区南部で検出した。口縁部を南方に向けて埋設している。後世の削平のため、横位に寝かせた深鉢（9）の上半1/2を欠損している。9とは別個体の深鉢片6を9の口縁部を塞ぐ様に立てて蓋としている。さらに、これらの上には多くの破片が被さる様に検出された。9の上部が落下したものとして横位の单棺と推測するのが穩当ではある。しかし、上部片はほとんど接合せず、他のSX102・104・105では上部片が落下した様子がみら

れない等のため、9は予め半裁され、破片で口縁部と上部に蓋をした可能性も残しておきたい。掘形は、直径65～75cmの楕円形で、東側は土器に対してやや大きく掘削している。埋土には若干の炭を含んでいる。

**SX104（第20図）** B区西部で検出した土器棺である。後世の削平のため、上半を欠損しているが、大型の深鉢（13）を横位に寝かせて埋納している。口縁部を欠損しているが、口縁部を東方に向けた東西方向に埋設していることがわかる。掘形はそれよりやや大きく、60cm×50cmの楕円形である。掘形の形状と横位であることから、この土器棺は单棺であったものと推測される。この他に、別個体の口縁部片（10・11）や底部片（12）が出土しており、合口等であった可能性も否定しきれないが、小片であるため混入と考える。埋土には、若干のサヌカイト剥片と炭を含む。

**SX105（第20図）** B区西部で検出した。深鉢（14）の口縁部を北東方に向けた埋設している。掘形は、直径50cm程度の楕円形を呈し、底部の掘削は北東ほど浅い。深鉢は掘形に従い底部を土壙底と壁に接し、口縁部をやや上に向けて埋設している。後世の削平のため、上半2/3を欠損しており明確ではないが、斜位にちかい埋葬形態である。口縁部付近には蓋をするかの様に別個体の深鉢体部片が覆っている。埋土には若干の炭を含む。

**SX106（第20図）** B区西部で検出した土器棺である。上半を欠損しているため詳細は不明であるが、円形の土坑に深鉢（17）を据え、上から別の深鉢（16）を被せるように設置している。17はおよそ45°の角度をもっているが、16の口縁部はほぼ残存し、倒立状態で土坑底に接する。したがって、斜位の合口土器棺が土圧、削平等で潰れたものとは考え難く、17が土圧等により傾いたものと推測される。したがって、17に16を被せ、垂直状態に埋設されたものと推測でき、他のものと比べ異質である。埋土においても、他のものにみられる炭や剥片は含まない。

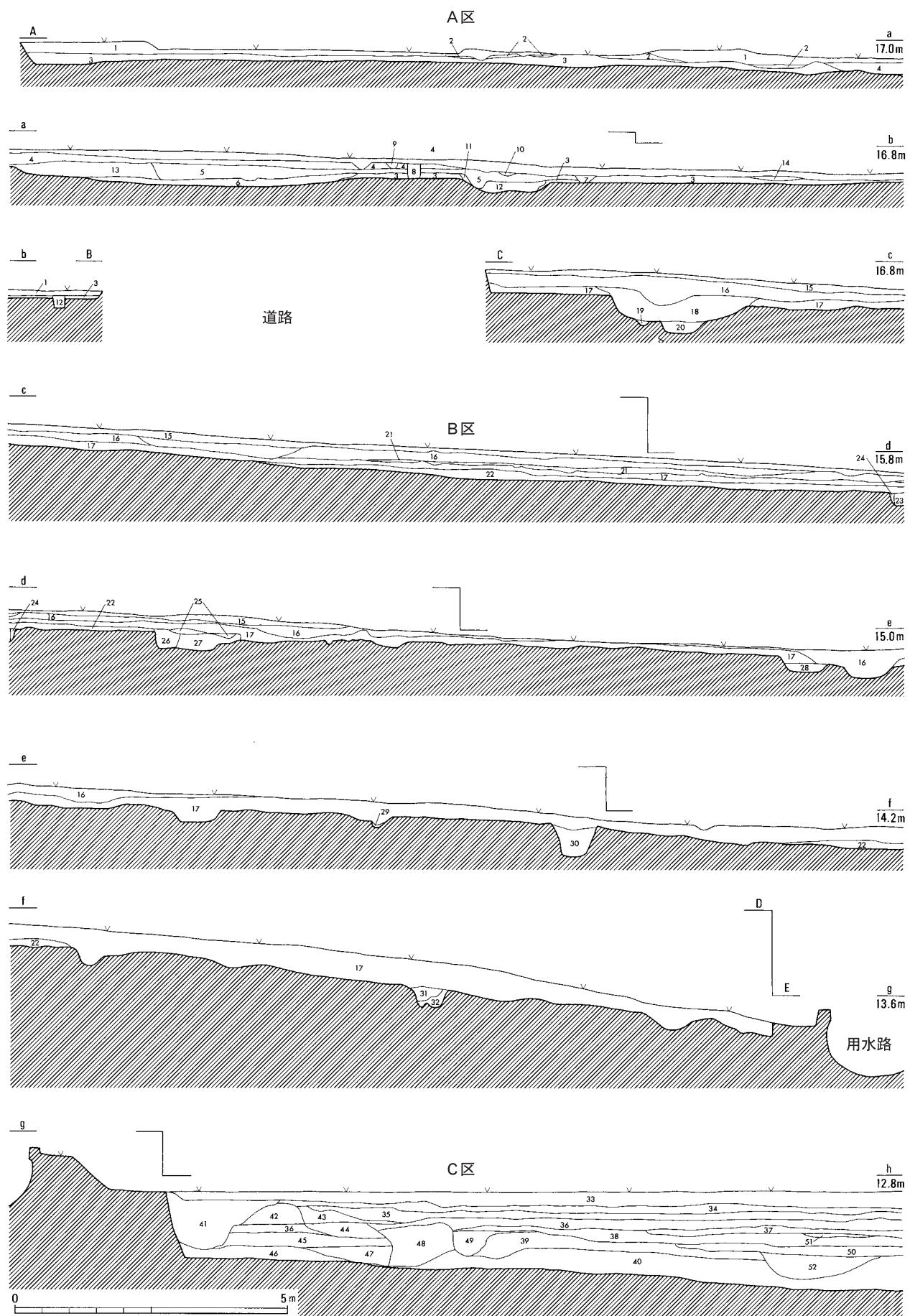
### (2) 土坑

特にB区から多数検出されている。その多くは土壙墓と推測され、時期についても土器棺と近接したものである。しかし、土器棺との相関は不明である。

**SK1（第21図）** B区北東隅で検出した。調査区



第17図 B区遺構平面図 (1 : 200)



第18図 土層断面図（1）（1:100）

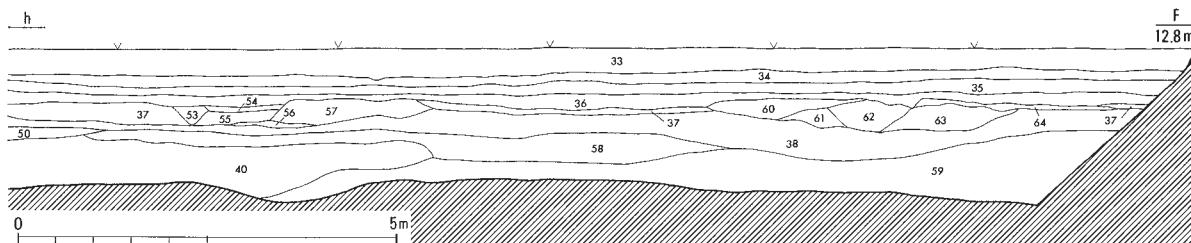
端での検出のため全体の形態は不明であるが、東西150cm、南北80cmの長方形を呈するものと考えられる。深さは検出面から10cm程度しかなく、若干のサヌカイト剥片と炭を含む黒褐色の有機質の埋土である。形態が他の土壙墓と類似しているためその可能性を残すが、他の土壙墓にみられるような埋土の無機質と有機質の層位が認められないこと、近世土師器の小片が出土していることから、一応、近世の土坑としておく。

**SK 2 (第21図)** B区東部で検出した。長辺150cm、短辺80cmの東西に長い不整長方形を呈する。隣接するSK 3とは直角に配列されるが、深さはSK 3よりやや深く、検出面から16cmを測る。埋土は炭を含むやや有機質の強い灰褐色土であるが、土坑壁から10cm程は無機質の褐色土である。この土は検出面土層と類似しており、土坑掘削後時間をあまり経ずに埋め戻されたものと推測される。このことから、長辺130cm、短辺60cmの木棺あるいはそれに類似したものを埋葬した可能性がある。遺物は、サヌカイトの剥片、縄文土器の小片が出土したに止まるが、縄文時代の土壙墓と考えられる。

**SK 3 (第21図)** B区東部で検出した。長辺150cm、短辺80cmの南北に長い不整長方形を呈する。隣接するSK 2とは直角に配列されるが、深さは検出面から10cm未満の残存しかない。埋土はやや有機質の強い黒褐色土であるが、土坑壁付近の無機質土は認められない。遺物は、縄文土器の小片が出土したに止まり、炭も含まない。土壙墓とする根拠に極めて乏しいが、他のものと平面形の規模、形態が類似するため、一応、土壙墓と考えることにした。

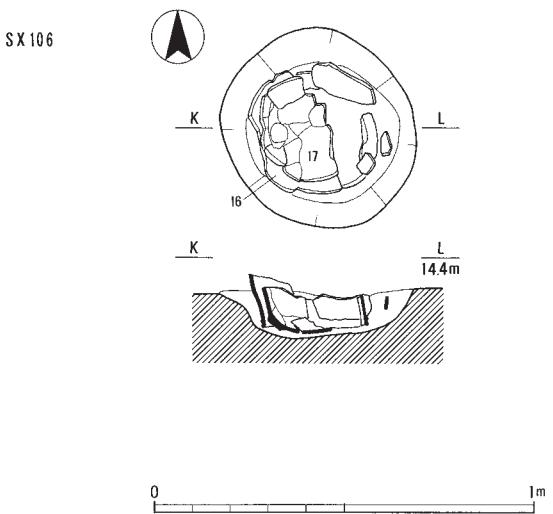
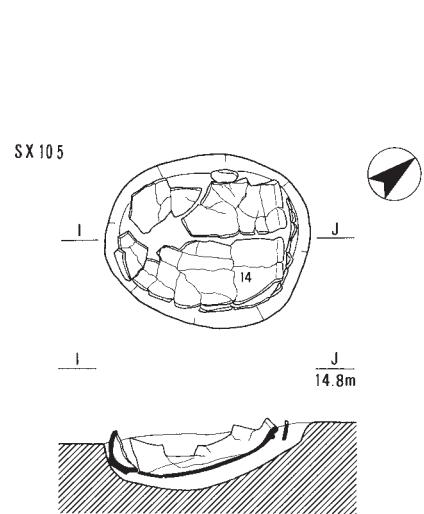
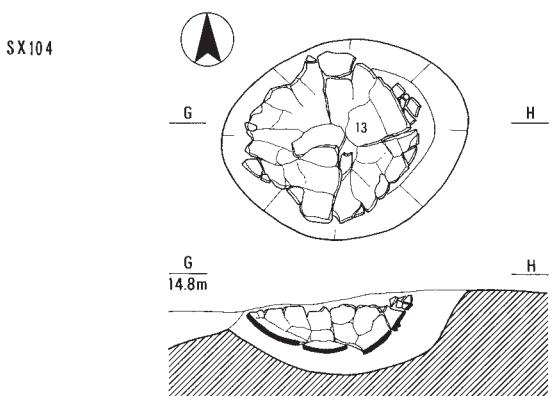
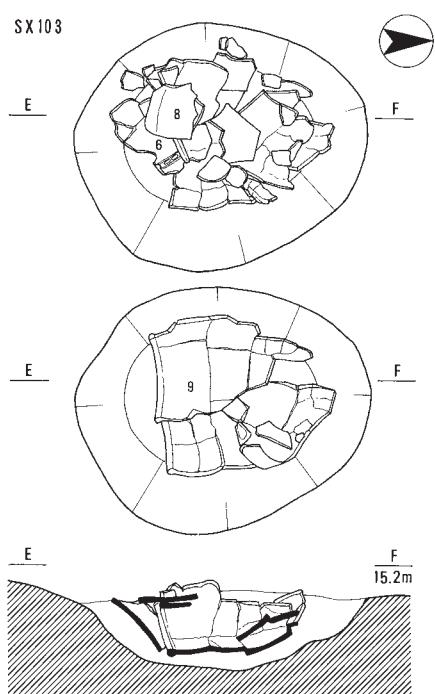
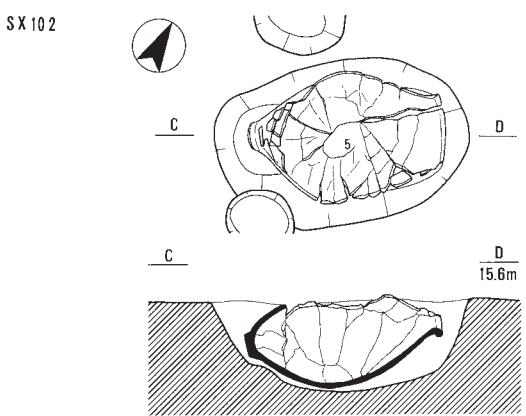
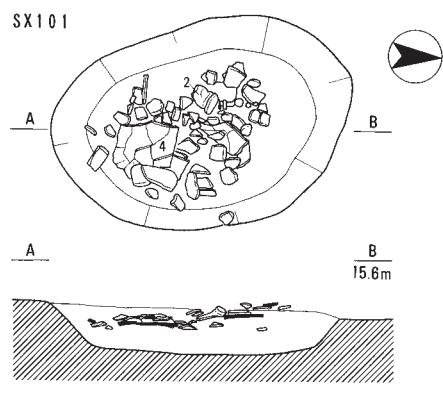
**SK 4 (第21図)** B地区北東部の搅乱坑底部から検出された。80cm×50cmの長方形を呈し、深さは10cm程度の残存しかない。埋土は、炭を含む有機質の強い黒褐色土で、土坑壁付近の無機質土は認められない。小片ではあるものの縄文土器が出土しており、土壙墓の可能性も無いわけではないが、他のものより平面規模が一回り小さく、埋土の状況も既述した様に他の土壙墓のものとやや異なるため、搅乱坑の一部である可能性が高いものと考えられる。

**SK 5 (第21図)** B区中央部で、SK 6・7と2.5m間隔で南北に並んで検出された。140cm×60cmの長方形を呈するが、深さは10cm未満の残存しかない。



- |                               |                                    |                                       |
|-------------------------------|------------------------------------|---------------------------------------|
| 1 灰褐色土<7.5YR5/2>（耕作土）         | 24 褐灰色混礫土<7.5YR4/1>（柱穴状遺構埋土）       | 45 灰褐色粘質土<7.5YR4/1>                   |
| 2 橙色土<5YR6/6>                 | 25 褐灰色土<7.5YR4/1>                  | 46 オリーブ黒色粘土<10Y3/1>                   |
| 3 赤褐色土<5YR4/6>（上層検出面）         | 26 黒褐色土<7.5YR3/1>（柱穴状遺構埋土）         | 47 灰オリーブ砂<5Y6/2>                      |
| 4 にぶい橙色粘質土<5YR7/4>            | 27 褐色土<7.5YR4/3>（SK8埋土）            | 48 灰色粘質砂<5Y4/1>                       |
| 5 赤褐色粘質土<7.5YR3/3>（SD404埋土）   | 28 明赤褐色粘質土<5YR5/6>                 | 49 オリーブ黒色粘質砂<7.5Y3/1>                 |
| 6 黒褐色混礫粘質土<7.5YR3/2>（SD404埋土） | 29 にぶい黄褐色土<10YR5/2>                | 50 灰褐色砂礫<7.5Y4/1>                     |
| 7 黒褐色土<10YR3/1>（SD402埋土）      | 30 褐灰色土<10YR4/1>（搅乱）               | 51 灰褐色砂<7.5Y5/1>                      |
| 8 黑褐色土<10YR3/2>               | 31 黒褐色粘質土<7.5YR3/1>（SD201埋土）       | 52 オリーブ黒色粘土<10Y3/1>に灰褐色砂礫<10Y5/1>が混じる |
| 9 黑褐色土<7.5YR3/2>              | 32 31に明褐灰色土<7.5YR7/2>が混じる（SD201埋土） | 53 黑褐色粘質土<10YR3/1>                    |
| 10 黑褐色土<7.5YR3/1>             | 33 灰色土<7.5YR6/1>（耕作土）              | 54 にぶい黄橙色礫<10YR6/3>                   |
| 11 黑褐色混礫土<10YR3/1>            | 34 灰色土<7.5YR5/1>（旧耕作土）             | 55 灰褐色砂<10YR4/1>                      |
| 12 灰褐色土<7.5YR4/2>（SD404埋土）    | 35 灰色土<7.5YR4/1>（旧耕作土）             | 56 白色砂<5Y7/1>                         |
| 13 黑褐色混礫土<10YR3/1>（SD404埋土）   | 36 オリーブ黑色土<5Y3/1>                  | 57 明黄褐色砂礫<2.5Y7/6>                    |
| 14 暗赤褐色土<5YR3/4>              | 37 にぶい黄橙色混礫砂層<10YR6/3>             | 58 黑褐色砂<2.5Y3/1>                      |
| 15 砕石                         | 38 黒色砂質土<5Y2/1>                    | 59 灰白色砂<5Y7/1>                        |
| 16 明赤褐色混礫土<5YR5/8>（客土）        | 39 褐灰色粘土<7.5YR5/1>                 | 60 灰褐色砂礫<7.5YR6/2>                    |
| 17 灰褐色混礫土<10YR4/1>（耕作土）       | 40 にぶい黄橙色粘質土<10YR6/4>              | 61 褐灰色混礫土<7.5YR4/1>                   |
| 18 黄灰色土<2.5YR4/1>（搅乱）         | 41 黄橙色粘質土<2.5Y5/4>                 | 62 にぶい黄橙色砂礫<10YR6/3>                  |
| 19 黑褐色土<2.5YR3/1>（搅乱）         | 42 黑褐色土<2.5Y3/2>                   | 63 黑褐色土<2.5Y3/2>                      |
| 20 オリーブ褐色土<2.5YR4/3>（搅乱）      | 43 灰白色砂礫<10Y7/1>                   | 64 黄灰色砂<2.5Y6/1>                      |
| 21 黄橙色混礫土<7.5YR7/8>（客土）       | 44 灰色砂礫<10Y5/1>                    |                                       |
| 22 にぶい黄褐色土<10YR4/3>           |                                    |                                       |

第19図 土層断面図 〈2〉 (1 : 100)



第20図 SX101～106実測図（1：20）

埋土は、弱い有機質の褐灰色土で、土坑壁付近の無機質土は認められない。出土遺物は無く、若干の炭が出土したに止まる。土壙墓とする根拠に乏しいものの、3基並んで配置されていること等を含め、一応、土壙墓としておく。

**SK 6 (第21図)** B区中央部で検出した。南北両側に2.5m間隔でSK 5・7が配置され、南北に3基並ぶ結果となる。140cm×70cmの不整方形というよりは長円形にちかい形を呈し、深さは20cm程度である。埋土は褐色土で有機質の弱いものである。土坑中央部に直径50cm、深さ30cm程度の柱穴状の遺構が重複する。土層観察によれば土坑より後出のものであるが、丁度土坑の中央部に位置することから、両者は一体の可能性もある。

この柱穴状遺構の底には、拳大の川原石が6～7個置かれていた。この石には1個を除き、熱を受けた様子が認められる。被熱範囲は石の接地面に及んでいないことから、これらの石は土坑底に設置された状態で熱を受けたものと考えられる。埋土にも多量の墨を含んでおり、壁の一部も焼土化している。しかし、壁の焼土は非常に弱く、恒常的な炉とはできない。埋土の炭も比較的鮮明であり、相当新しい時期の可能性も残される。

以上により、この遺構の性格は、その所属時期を含め不明とせざるを得ないが、3基並ぶことが留意されるものの、土壙墓の可能性は少ないものと考えられる。

**SK 7 (第21図)** B区中央部で、SK 5・6と2.5m間隔で南北に並んで検出された。120cm×70cmの隅丸長方形を呈するが、深さは10cm程度しか残存しない。埋土は、黒褐色の有機質の強い土壙とにぶい褐色の無機質の土壙に分かれ。前者は後者の上部に位置するが、土坑南端には分布せず、北に向かって徐々に深くなる。以上により、木棺等を埋設した

とは考え難いが、平面形が類似することから一応、土壙墓と考えておく。埋土からは、縄文土器小片と炭、比較的多くのサヌカイト剥片が出土した。炭は後述する分析によりクヌギ・コナラの落葉広葉樹である。

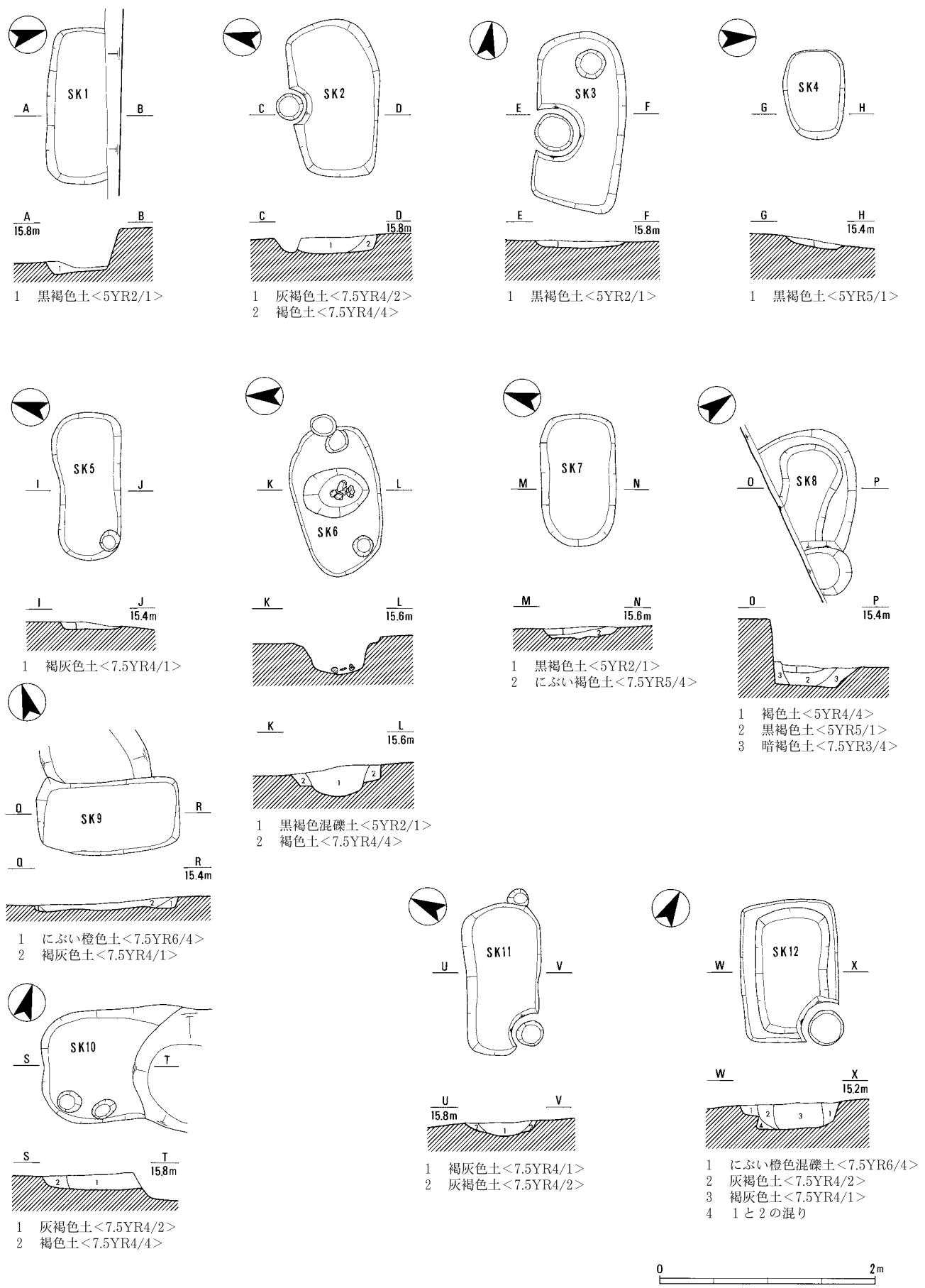
**SK 8 (第21図)** B区南端で検出したため、全体の形態は不明であるが、直径130cmの不整円形を呈するものと考えられる。深さは検出面から20cm程度であり、土坑周囲は暗褐色土、中央部は上部が褐色土、下部が黒褐色土である。他の土坑の様な周囲の無機質土壙は無く、いずれも有機質の土壙で、中央下部が最も有機質が強い。埋土からは炭、比較的多くのサヌカイトの剥片、縄文土器の小片が出土している。木棺の埋葬は想定し難い状況であるが、土壙墓の可能性も残しておく。

**SK 9 (第21図)** B区北部で検出した。長辺130cm、短辺70cmの長方形を呈する。深さは検出面から10cm未満の残存であるが、土坑壁から10cm程は無機質のにぶい橙色土、中央部分は有機質の褐灰色土の埋土であることが観察できる。この無機質土は、検出面土壙と類似しており、土坑掘削後、まもなく埋め戻された土壙の可能性がある。したがって、土坑の形状等も勘案し、110cm×50cm程度の木棺を埋葬した可能性も推測可能である。埋土からは縄文土器の小片と炭が出土したに止まるが、縄文時代の土壙墓の可能性が高いものと考えられる。

**SK10 (第21図)** B区中央部で検出した。東側を搅乱坑により破壊されているが150cm×100cmの長方形を呈するものと推測され、他のものより一回り大きい形態である。深さは10cm程度であるが、埋土は土坑壁から20cmほどが無機質の褐色土、中央部が弱い有機質の灰褐色土であることが観察できる。この灰褐色土は垂直に底部にまで達している。また、無機質土は、検出面土壙と類似しており、土坑掘削後、

遺構名	構造	埋設	剥片	炭	備考
SX101	?	横位	—	0.1g	合せ口の可能性もあり。小片多い。
SX102	単棺	横位	0.1g	0.8g	
SX103	単棺	横位	—	0.3g	別固体片で口縁部に蓋。棺上半を半裁し、破片で蓋をした可能性もあり。
SX104	単棺	横位	0.5g	0.5g	
SX105	単棺	斜位	—	0.3g	横位にちかい。口縁部を破片で蓋。
SX106	?	立位	—	—	

第4表 土器棺一覧表



第21図 SK1~12実測図 (1 : 50)

まもなく埋め戻された土壌の可能性がある。このことから、110cm×60cmの木棺を埋葬した可能性も考えられる。埋土からは、縄文土器片(27)、炭の他、若干のサヌカイト剥片が出土している。以上により、縄文時代の土壙墓の可能性が高いものと考えられる。

**SK11(第21図)** B区中央部で検出した。140cm×60cmの長方形を呈し、深さは10cm程度である。埋土は中央部に幅50cmの有機質の褐灰色土が分布し、その周囲に有機質の弱い灰褐色土が分布する。褐灰色土はほぼレンズ状を呈し、底部まで達している。また、有機質の弱い灰褐色土は、検出面土壤と類似しており、土坑掘削後、まもなく埋め戻された土壙の可能性がある。このことから、土坑掘削後、何かを埋納し、直ちに埋め戻されたものと推測できるが、木棺状のものは想定し難い。埋土からは、縄文土器片、炭、サヌカイト剥片が出土している。廃棄土坑とするよりは、これも他のものと同様、縄文時代の土壙墓とするほうが可能性が高いものと考えられる。

**SK12(第21図)** B区中央部で検出した。130cm×

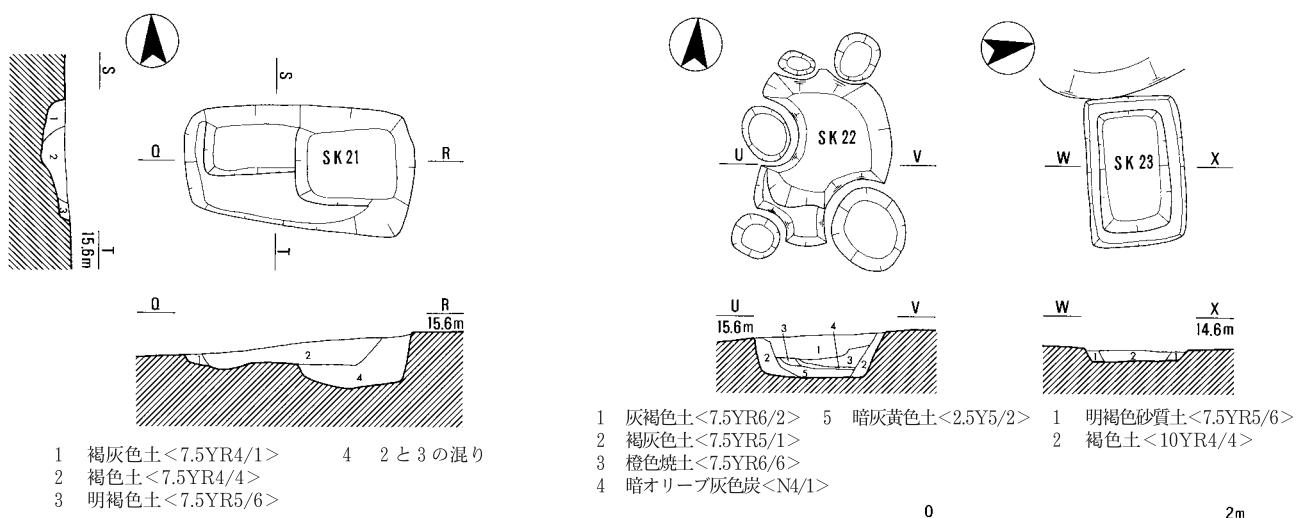
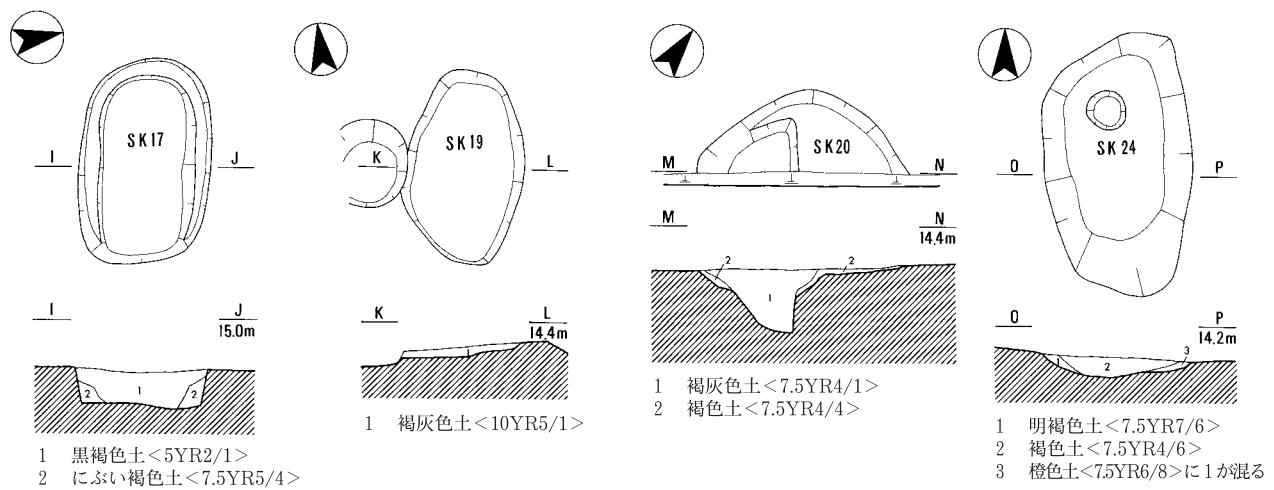
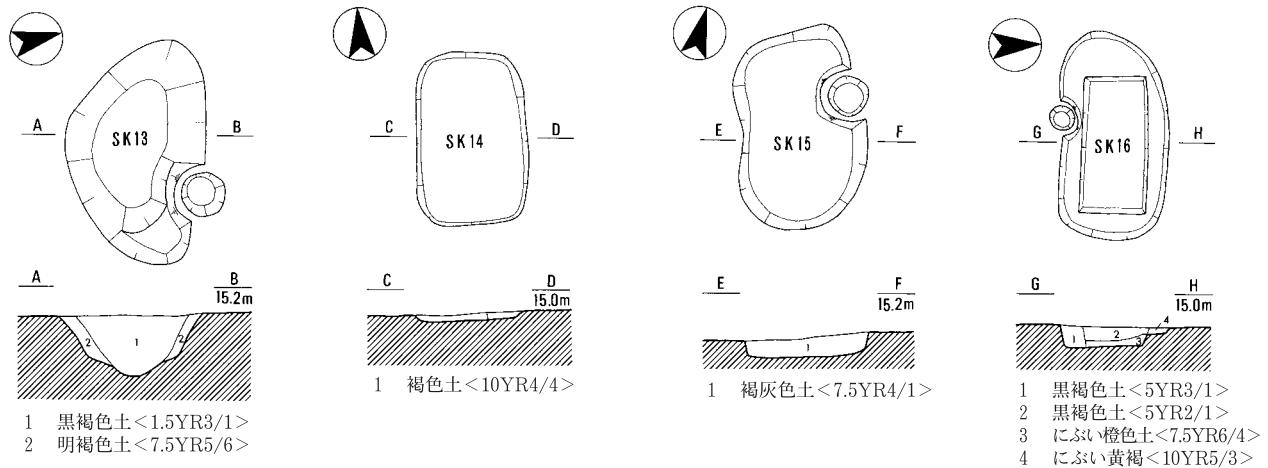
90cmの長方形を呈し、深さは25cm程度であるが、土坑西端20cmほどは深さ10cm程度である。したがって、25cmの深さを保つのは120cm×70cmの長方形の範囲である。埋土は中央部に幅40cmの有機質の褐灰色土が分布し、その両側に有機質の弱いにぶい橙色土・灰褐色土が分布する。有機質の褐灰色土はほぼ垂直に底部まで達している。また、有機質の弱いものは、検出面土壤と類似しており、土坑掘削後、まもなく埋め戻された土壙の可能性がある。このことから、100cm×40cmの木棺状のものを埋葬した可能性も考えられる。埋土からは、縄文時代晚期後半の土器片(26)、炭の他、若干のサヌカイト剥片が出土している。以上により縄文時代晚期後半の土壙墓の可能性が高いものと考えられる。

**SK13(第22図)** B区南部で検出した。長辺150cm、最大幅90cmの三日月状を呈する土坑である。深さは40cmを測り、他のものと比べ非常に深いものである。これらの状況から風倒木の可能性が高いものと考えられるが、埋土は他の土壙墓にみられるように土坑

遺構名	時期	形状	規模	木棺規模	土器	石器	剥片	炭	備考
SK1	近世	長方形	150×80	—	○	×	0.5 g	0.3 g	
SK2	縄文	長方形	150×80	130×60	○	×	0.2 g	2.5 g	土壙墓
SK3	縄文	長方形	150×80	—	○	×	×	×	一応土壙墓
SK4	現代	長方形	80×50	—	○	×	×	0.7 g	攪乱か
SK5	縄文?	長方形	140×60	—	×	×	×	0.6 g	一応土壙墓
SK6	不明	長円形	140×70	—	×	×	×	12.7 g	土壙墓の可能性少
SK7	縄文	長方形	120×70	—	○	×	9.9 g	0.7 g	一応土壙墓
SK8	縄文	不整円形	直径130	—	○	×	10.8 g	0.7 g	土壙墓の可能性少
SK9	縄文	長方形	130×70	110×50	○	×	×	1.0 g	土壙墓
SK10	縄文	長方形	150×100	110×60	○	×	0.4 g	1.0 g	土壙墓
SK11	縄文	長方形	140×60	—	○	×	4.8 g	1.1 g	土壙墓
SK12	縄文晚期後半	長方形	120×70	100×40	○	×	0.1 g	1.3 g	土壙墓
SK13	不明	三日月状	150×90	—	○	×	0.1 g	0.1 g	風倒木か
SK14	縄文?	長方形	110×70	—	×	×	×	×	土壙墓
SK15	縄文	長方形	130×80	—	○	×	3.8 g	2.3 g	一応土壙墓
SK16	縄文?	長方形	140×70	80×40	×	×	0.5 g	0.1 g	一応土壙墓
SK17	縄文晚期後半	長方形	135×90	120×60	○	○	×	3.4 g	土壙墓
SK18	不明	長円形	180×45	—	×	×	×	1.3 g	性格不明
SK19	不明	不整楕円形	130×80	—	×	×	×	×	性格不明
SK20	不明	不整円形	直径140	—	△	×	×	0.1 g	風倒木か
SK21	縄文	長方形	150×80	—	△	×	0.4 g	0.3 g	有段土壙墓
SK22	不明	長方形	110×80	—	×	×	未計測	未計測	性格不明
SK23	縄文	長方形	100×60	80×45	×	×	未計測	未計測	土壙墓
SK24	不明	不整楕円形	170×100	—	×	×	未計測	未計測	性格不明
SK502	奈良?	長円形	160×80	—	×	×	未計測	未計測	SH602の貯蔵穴?
SK504	不明	円形	直径60	—	×	×	未計測	未計測	性格不明
SK507	縄文	楕円形	200×150	—	△	×	未計測	未計測	3基の土坑の重複の可能性有り
SK508	不明	長円形	70×20	—	×	×	未計測	未計測	性格不明
SK509	不明	楕円形	55×30	—	×	×	未計測	未計測	SD405と一体か。

○=出土、△=微小片のみ出土、×=出土無し

第5表 土坑一覧表



第22図 SK13~17・19~24実測図 (1 : 50)

壁周辺に無機質の明褐色土が分布する。中央部は有機質の黒色土で縄文時代晚期後半の土器片（25）、サヌカイト剥片、焼土粒、炭等が出土した。この様な状況から前述の可能性が高いものの、縄文時代晚期後半の土壙墓の可能性も残しておきたい。

**SK14（第22図）** B区南部で検出した。110cm×70cmの長方形を呈するが、深さは5cm程度しか残存しない。周囲は後世に検出面が10cm以上削り取られており、この際、土坑のほとんどを破壊されたものと考えられる。埋土にも有機質の土壤は含まれなく、土器片や炭等の出土も無かった。しかし、その形態からこれも縄文時代の土壙墓の残骸であるものと推測したい。

**SK15（第22図）** B区中央部で検出した。130cm×80cmの不整長方形を呈し、深さは10cm程度である。土坑壁は垂直で、埋土は褐灰色土の単一層で有機質は比較的弱い。埋土からは、縄文土器片、炭、サヌカイト剥片が出土している。土壙墓とする確証に乏しいが、その形状から縄文時代の土壙墓と推測したい。

**SK16（第22図）** B区中央部で検出した。140cm×70cmの楕円形にちかい長方形を呈し、深さは20cm程度である。土坑中央部で80cm×40cmの方形状に木棺の痕跡を検出した。ただし、埋土の状況は、無機質土と有機質土に鮮明には分離せず、想定木棺の南外側にも有機質の黒褐色土が分布する。したがって、木棺を埋葬したとするに若干の疑問も残る。埋土からは遺物の出土は無く、サヌカイト剥片の小片と炭が出土したに止まる。前述した疑問もあるものの、その形状から縄文時代の土壙墓と推測したい。

**SK17（第22図）** B区西部で検出した。135cm×90cmの隅丸長方形を呈し、深さは25cm程度である。埋土は、黒色の有機質の強い土壤とにぶい褐色の無機質の土壤に分かれる。前者は120cm×60cmの方形に広がり、後者は、東側を除く3方の土坑壁付近に分布する。ただし、土坑上部では前者が後者を覆うような状態である。また、無機質のにぶい褐色土は検出面土壤と類似しており、土坑掘削後、まもなく埋め戻された可能性がある。以上により木棺状のものを土坑の東側に寄せて埋葬した可能性が考えられる。埋土からは、小片ではあるが比較的多くの縄文時代

晩期後半の土器片（18～22）と炭、完形の石鎌（24）が出土した。以上により縄文時代晚期後半の土壙墓の可能性が高いものと考えられる。

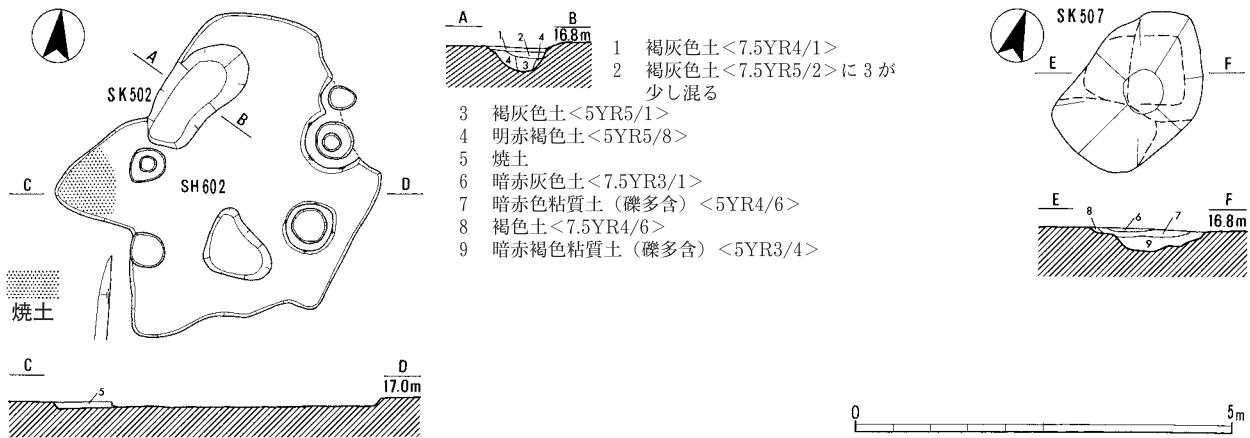
**SK18** B区南西端で検出した。180cm×45cmの長円形を呈する溝状のものである。深さは5cm程度の残存しかなく、埋土は暗褐色土で5cm程度石や炭を含んでいる。遺物の出土は無い。形状から見て土壙墓とは考えられず、所属時期も含め不明である。

**SK19（第22図）** B区西端部で検出した。130cm×80cmの不整楕円形を呈し、深さは6cm程度である。埋土は褐灰色土の単一層で有機質は比較的弱い。出土遺物は無く、埋土に炭も含まない。土坑墓とする根拠に極めて乏しく、所属時期を含めて不明である。

**SK20（第22図）** B区南西端で検出した。調査区端での検出のため全体の形態は不明であるが、直径140cmの不整円形を呈するものと考えられる。深さは東側で4cmほどしかないが、土坑西部は直径60cmの不整方形に極端に深くなり、40cmを測る。埋土は有機質の褐灰色土であるが、土坑壁の僅かの部分と浅い東側には無機質の褐色土が分布する。若干の縄文土器小片と炭が出土したが、この土坑の性格は不明である。縄文時代の土壙墓の可能性も残るが、形狀からはSK13と類似点が多く、風倒木痕の可能性がおおきい。

**SK21（第22図）** B区南部で検出した。長辺150cm、短辺80cmの長方形を呈する。深さは土坑西部で10cmほどであるが、土坑東部は一辺70cmの正方形に一段深くなり、35cmを測る。埋土は土坑の東側を除く3方に幅10～20cmの無機質土、中央部から東端までは褐色の有機質土である。土坑底が有段であることを除けば、他の土壙墓と類似した状況である。2基の土坑の重複と考えられなくもないが、平面形に乱れのないことや、土層に相違点があるものの大阪府向出遺跡において「有段底型土坑」に分類されるものに酷似するため、これも土壙墓であるものと考えられる。埋土からは縄文土器小片、若干のサヌカイト剥片と炭が出土した。なお、骨片状の物質を採集したが、鑑定の結果、流紋岩の風化石であることがわかった。

**SK22（第22図）** B区中央部で検出した。長辺110cm、短辺80cmの長方形を呈するが、南端25cmほどは



第23図 SH602・SK502・507実測図 (1 : 100)

5cm未満の深さしかなく、一辺80cmの方形土坑で、深さ30cmを測るものと考えることも可能である。土坑両端に有機質の弱い褐灰色土が分布することは他の土壌墓と共通である。しかし、中央部の様子は複雑で、8cmほど有機質の暗灰黄色土が堆積した後、焼土や炭の堆積があり、上部20cmほどは灰褐色土が覆う状態である。以上により、木棺の埋葬は想定し難い状況であるが、SK 8・13と同様、土壌墓の可能性も残しておく。

**SK23 (第22図)** B区南西部で検出した。長辺100cm、短辺60cmの長方形を呈する。深さは10cm程度で、埋土は土坑端10cmほどが明褐色砂質土、中央部は褐色土である。この中央部の褐色土は長辺80cm、短辺40cmの長方形状に広がり、これが木棺の範囲を表すものかも知れない。ただし、両者とも弱い有機質土である。埋土から出土したものは無いが、縄文時代の土壌墓と考えて良さそうである。

**SK24 (第22図)** B区南西部で検出した。長径170cm、短径100cmの不整長円形を呈する。埋土は土坑端10cm程度は無機質の明褐色土が分布するが、東端のものは検出土層と酷似するため、土坑幅は90cm程度であった可能性がある。中央部は有機質の褐色土がレンズ状に堆積し、したがって、無機質層が有機質層の下に回り込むような状況である。埋土からは特に何も出土していない。木棺の埋葬は想定し難い状況であるが、土壌墓の可能性も残しておく。

**SK502 (第23図)** SH602の竈の北側に接して検出した160cm×80cmの長円形の土坑である。貯蔵穴の可能性があるものと考えられるが、遺物の出土も無

く断定できない。また、埋土の様相はB区で検出されている土壌墓と類似する部分もあり、縄文時代晩期の土壌墓の可能性も若干残るものと考えられる。

**SK504** A区下層、中央北部で検出した。北側は削平により消滅しているため全体の形態は不明であるが、直径60cmの円形か長円形を呈するものと考えられる。残存部の深さも5cm未満で出土遺物は無く、遺構の性格や時期は不明である。下層検出を重視すれば縄文時代晩期に属する可能性もある。

**SK507 (第23図)** A区中央下層からの検出であるが、SH602床面でその形態を現していたものである。当初、SK 1として1基の土坑を掘削し、その後、下層遺構検出時に150cm×100cm前後の土坑が3基重複するものとして、それぞれSK 5・6・7として調査を行った。掘削の結果、これら4基の土坑の縁がほぼ一致し、壁面も一体にちかいものとなった。したがって、200cm×150cm程度の橢円形で、検出面からの深さが30cm程度に擂鉢状に落ち込む一つの大きな土坑と考えた方が良いものと考えられる。埋土は赤褐色系の検出面よりやや暗い色調である。SH 602に先行するものであるが、縄文土器小片が一片のみ出土したにすぎず、明確な時期は不明である。一応、B区で検出している多くの遺構と同時期として縄文時代晩期と推測しておく。

**SK508・509** A区下層で検出した2基の土坑である。平面形は円形から長円形で、深さは検出面から10cm程度である。SD405と重複しているがSK509についてはSD405と一体の可能性もある。出土遺物が無く、遺構の性格や所属する時期は不明である。

上層検出のSH602と完全に重複するため、この堅穴住居に関連する遺構であるかもしれない。

### (3) 堅穴住居

**SH602 (第23図)** A区中央部で検出した。一辺3mほどの堅穴住居と考えられるが、不整形な形態であり疑問も多い。西側には竈の痕跡と考えられる焼土の広がりが認められることから、削平が激しく、残存の劣悪な堅穴住居と想定している。遺物の出土は無く時期は不明であるが、A区では奈良時代の遺物の他には縄文土器が若干出土している程度のため、奈良時代に属するものと推測される。

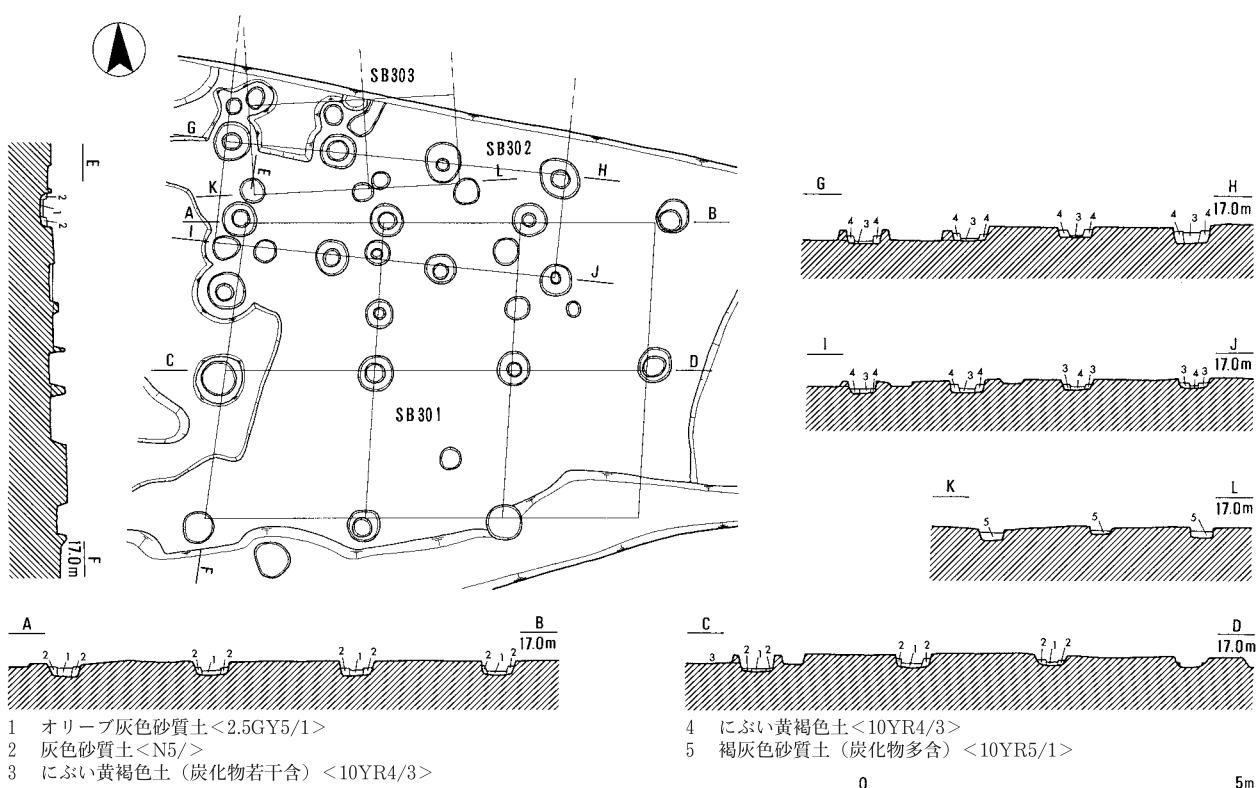
### (4) 掘立柱建物

**SB301 (第24図)** A区中央部で検出した。全体的に平行四辺形状に歪んだ形態であるが、3間×2間の総柱の東西棟と考えられる。棟方向はE 4° S、柱間は、桁行2.1m+1.8m+1.8mで西端がやや広く、梁行は1.95mの等間である。柱穴は、直径40~45cmの円形を呈し、埋土は灰色砂質土(N5/)である。柱痕跡を検出できたものも多く、直径20cm程度、埋土はオリーブ灰色砂質土(2.5GY5/1)で掘形より若干色調が暗く、有機質が強いものである。深さ

は検出面から15cm程度の浅いもので、削平により本来の深さを示していないものと考えられる。この柱穴が掘り込まれている地層は、強固に安定したものであり、柱の沈下等の心配は少ないものと考えられる。

上述した灰色砂質土は、他の建物柱穴埋土や隣接する丸野遺跡の建物柱穴埋土にも認められないものである。一見、柱穴埋め戻しからの経年変化をあまり受けていない土壤のようでもあり、また、水田耕作土状の様相であるため、他の場所から搬入した可能性もある。その場合は、柱の固定にこの砂質土が有効であったのかもしれない。いずれにしても、他の建物とは大きく時期の降ることは相違なく、埋土から近世陶器片が1片のみ出土していることもあり、掘立柱建物ではあるもの近世に属するものと考えられる。

**SB302 (第24図)** A区北端での検出のため全体の規模は不明であるが、桁行3間の東西棟と推測し、棟方向はE 10° Sである。桁行の柱間は1.5mの等間としたが、柱筋から外れるものもあり疑問も残る。柱穴は、直径45~50cmの円形を呈し、柱痕跡は30cm



第24図 SB301～303実測図 (1 : 100)

足らずである。この柱列の南に1.35mの間隔をおき柱列が並行する。直径40cm程度でやや小さく、上述したように1.35mの狭い間隔のため、この部分が庇となり、南面庇付建物と考えて良いものと思われる。柱穴の深さは検出面から20cm足らずの浅いものであるが、両端はやや深い。庇列はさらに浅く、10cm程度である。埋土はにぶい黄褐色土（10YR4/3）であるが、柱痕跡は若干暗い。出土遺物が無く、時期決定は困難であるが、奈良時代の溝（SD404）との重複関係から、これに後出のものであり、中世までは下らないものと考えられる。周辺からの出土遺物から奈良時代に納まる可能性が大きいものと考えられる。

**SB303（第24図）** A区北端で検出した2間×1間以上の建物で棟方向は不明であるが、一応東西棟と仮定する。その場合、棟方向はE 1° Sを測り、ほぼ方位に従って建てられている。柱穴は直径30cmの小さいもので、柱痕跡を確認できたものは無い。埋土には褐灰色砂質土（10YR5/1）で炭を多く含むが、柱穴周囲には炭の広がりは確認できない。柱間は、桁行は1.5m+1.2m、梁行は1.2mで統一は無い。深さは検出面から20cm足らずの浅いもので、中央のものはさらに浅く10cmに満たない。したがって、当時の生活面よりかなり削平されているものと思われる。既述したように、柱穴周囲には炭の広がりが認められないものの上述したことや、他の建物の柱穴には炭をほとんど含まないことから、この建物は火災によって焼失した可能性がある。柱穴からの遺物の出土はなく、時期は不明であるが、飛鳥時代の溝との重複関係から、これに後出のものである。柱穴が小型の円形で縦柱の形態を示すため、中世に降る可能性もあるものと考えられる。

##### (5) 柱穴状遺構

いくつかのものから縄文土器片が出土しており、晩期後半まで時期が限定できる遺物が出土したものも1基ある。土器棺や土坑群の周辺で多数検出され、これらが検出されない地域では疎らである。この様なことから、この柱穴状遺構の多くは土器棺墓や土坑群と時期差の少ないもので縄文時代晩期後半に属するものと推測して良さそうである。堅穴住居の柱穴とした場合には、炉跡の残存が無いため手掛かり

を欠き、堅穴住居としてどの様にでも推測することが可能である。さらに、土器棺群や土坑群の周囲で多数検出されていることから、堅穴住居の柱穴では無く、これらに伴う遺構である可能性もある。また、検出面からの深さ40cmを測る比較的深いものもあり、掘立柱建物としての復元も試みたが、まとまるものも無かった。したがって、ここでは根拠の少ない推測は行わず、縄文時代晩期後半の柱穴状遺構群として報告するに止めることとする。

##### (6) 溝

**SD201・202・203** 3条とも調査区西端で検出した。検出面は西への傾斜を強めており、谷に落ち込む直前である。SD201・202は蛇行しており、深さはSD201が40cm、SD202が20cm程度でSD202が後出のものである。埋土は黒褐色粘質土（SD201=7.5YR3/1、SD202=10YR3/2）でSD201の下半には明褐灰色土で礫を多く含んでいる。遺物の出土は無く、遺構の性格や時期は不明である。上述した形状から、流水が斜面を下る際に形成された自然流水路の可能性もあるものと考えられる。SD203については、これらと直交するものであるが、小規模で深さも10cm程度である。やはり遺物は出土しておらず、その性格、時期ともに不明である。

**SD404** A区北端、下層で検出したL字状に屈曲する溝である。幅140cm、深さは検出面から40cmで、底部は比較的平坦である。当初、上層の検出において、2棟の堅穴住居の重複と考え、それぞれSH1・3として調査を行ったが、掘削の結果、堅穴の壁と溝の縁とが概ね一致し、全体としてSD404とした方が良いものと考えられる。したがって、埋土は当初堅穴埋土としていたものを含め3層に分かれ、ほぼ並行に堆積している。最下層は黄褐色土（10YR4/2）で厚さ20cm、その上に黒褐色土（10YR3/1）が厚さ20cmほど堆積し、南端は検出面に到達している。最上層は褐色土（7.5YR4/3）で厚さ10cmほどである。流水や淀みの痕跡は無く、区画溝の一部が調査区に及んだものと考えられる。最上層から土師器の長胴甕片（28~30）、須恵器壺片等が出土しており、明確ではないものの奈良時代の内に最終埋没時期を求められそうである。

**SD401** A区東部、SB301の東側に沿うようにして

検出された南北に延びる溝である。幅1m、深さ10cm程度で遺物の出土は無い。したがって、その時期は不明であるが、SB301に沿うことからこれに関連するものかも知れない。

**SD402・403** A地区西部、上層で検出した溝である。両者とも削平により消滅、攪乱により破壊、調査区外への延伸等で全体の様相は不明である。深さはSD402が10cm、SD403が20cmでSD403がやや深い。両者とも遺物の出土は無く、その性格や時期は不明である。SD402はSD401とほぼ並行し、両者の距離は溝の内側で12.4mを測る。SD403はこれらとは直交しないが、ほぼ正確に東西に延びるものである。以上のことから、遺構の性格の一端を示すものかもしれない。

### 3 遺物

#### (1) SX101出土遺物（第25図）

全て小片であるが、深鉢と推定し、4は土器棺として埋設されていた可能性があるものである。1は断面半円状の凸帯を貼り付け、指により刻目を施す。2は底部片であるが、赤褐色系の発色をし、他のものと異質である。底部粘土板の中心から粘土紐を巻き上げたものか、あるいは後から底部に粘土板を充填したものか、底部は厚さ2cmを測る非常に厚いものに仕上げている。

#### (2) SX102出土遺物（第25図）

出土した遺物は5のみで、土器棺として埋設されていたものである。比較的良好な残存のため全体の形態が明確なものである。頸部は内傾するが、口縁部は外反し、全体として壺にちかい形態である。口縁端部は丸くおさめ、1cmほど下がって低い凸帯を貼り付ける。凸帯には指による刻目が施され、いわゆるO字状を呈する。外面の調整は浅いハケメが施されるが、工具によるナデとしてもよい程度である。色調は赤褐色系を呈し他のものと比べ異質である。体部最大径からやや下方にかけて外面に煤が、内面の下1/3程度に炭化物の付着がみられる。壺にちかい形態を呈するが、煮炊きに使用されたものと推測できる。

#### (3) SX103出土遺物（第26図）

図示したものは全て深鉢と考えられ、9は土器棺

として、6は蓋として埋設されていたものである。凸帯をもつもの（6・7）ともたないもの（9）がある。

6・7は体部から頸部の小片である。両者とも体部と頸部の境に低い凸帯を貼り付ける。凸帯は上端を強くナデすることにより体部に接合されており、下端にはナデを施さない雑な仕上げである。凸帶上には条痕状の痕跡残す工具により刻目が施される。刻目は長さ3cm以上に幅広く押し引いたもので、いわゆるO字状刻目にちかいものである。摩滅のため不明確ではあるが、6の凸帶以上の頸部外面には条痕が施されるものと観察され、7も同様と推測される。8も体部から頸部への屈曲部付近の小片である。屈曲部内面は強くヨコナデされる。頸部内面は浅いヘラケズリまたは工具によるナデである。

9の口縁部はほぼ直立し、端部には粘土紐をそのまま貼り付けることにより肥厚させ、凸帶状を呈している。口縁端部付近まで調整を終え、その後端部に粘土紐を施したようであるが判然としない。条痕は口縁部にちかくほど横方向にちかく、体部では斜めに施す。内面にも口縁部付近には横方向の条痕が観察できる。

#### (4) SX104出土遺物（第27図）

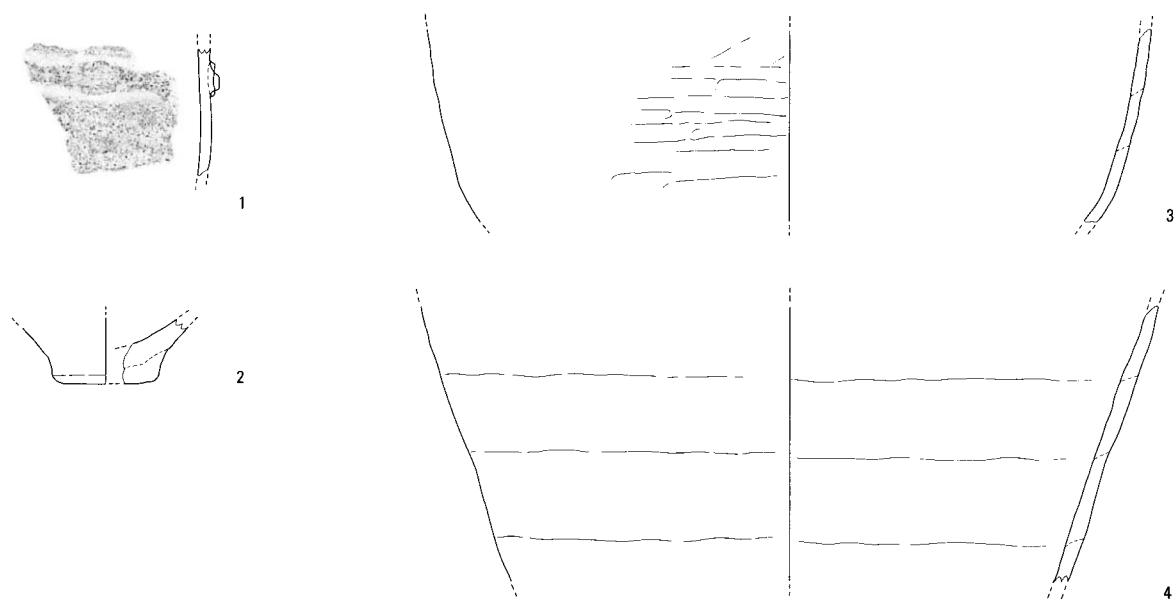
10～12は小片であるが、深鉢と推定しておく。13も深鉢で、土器棺として埋設されていたものである。欠損により口縁部は不明であるが、壺と称した方が適当な形態を呈する。

10は若干内傾する口縁部片で、口径は25～35cm程度と推測されるが、小片のため確定できない。口縁部の傾斜と口径の推測から、13とは別個体と考えられる。口縁端部上端から1.5cm間隔で凸帯が貼り付けられ、2条分を確認できる。上端のものは断面半円状で口縁部を外に肥厚させたもの、2条目はナデにより断面三角形を呈する。この貼り付けによるナデの影響か、対応する内面は緩やかに窪む。

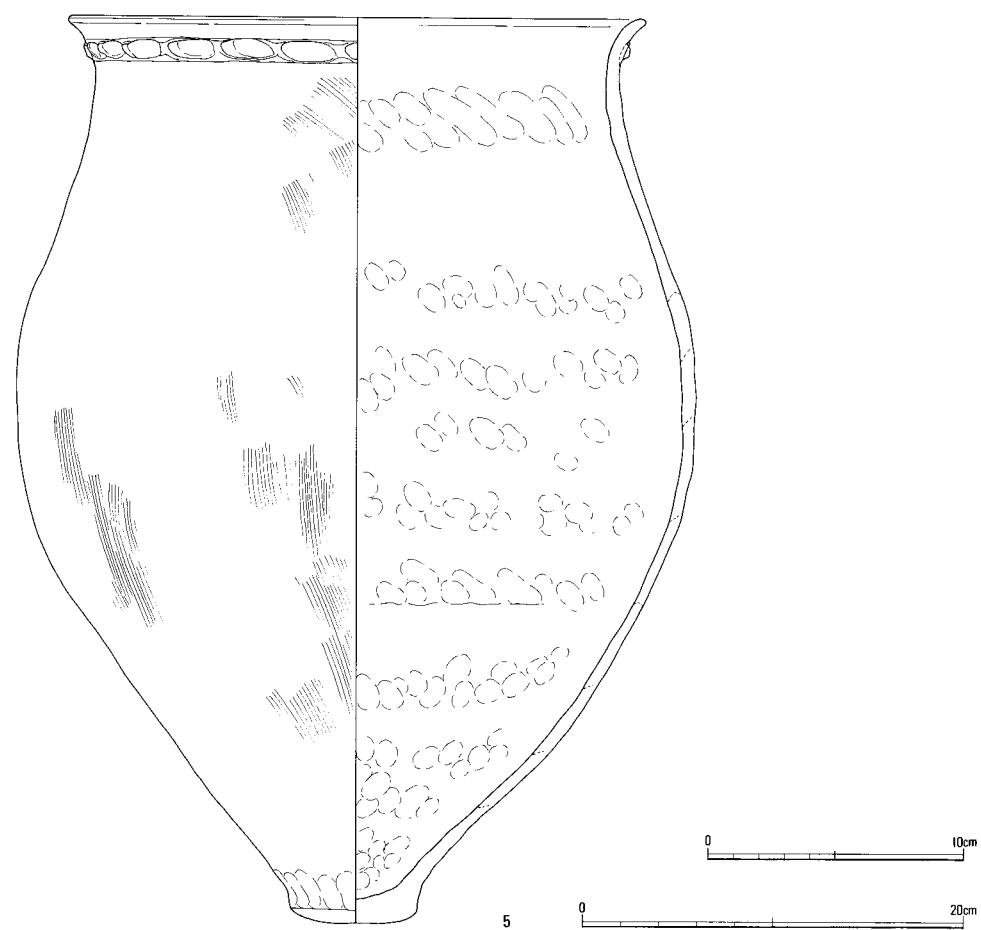
11は体部片である。凸帯は断面が丸みをもつ三角形で2条分確認できる。凸帯の上下や凸帯間は貼り付けのために強くヨコナデされている。13の頸部の可能性もあるが、13のものよりやや小規模であるため、ここでは別個体として扱う。

12は底部片であるが、13とは明らかに異なる個体

SX101



SX102



第25図 SX101・102出土遺物実測図 (1 = 1 : 3 2~5 = 1 : 4)

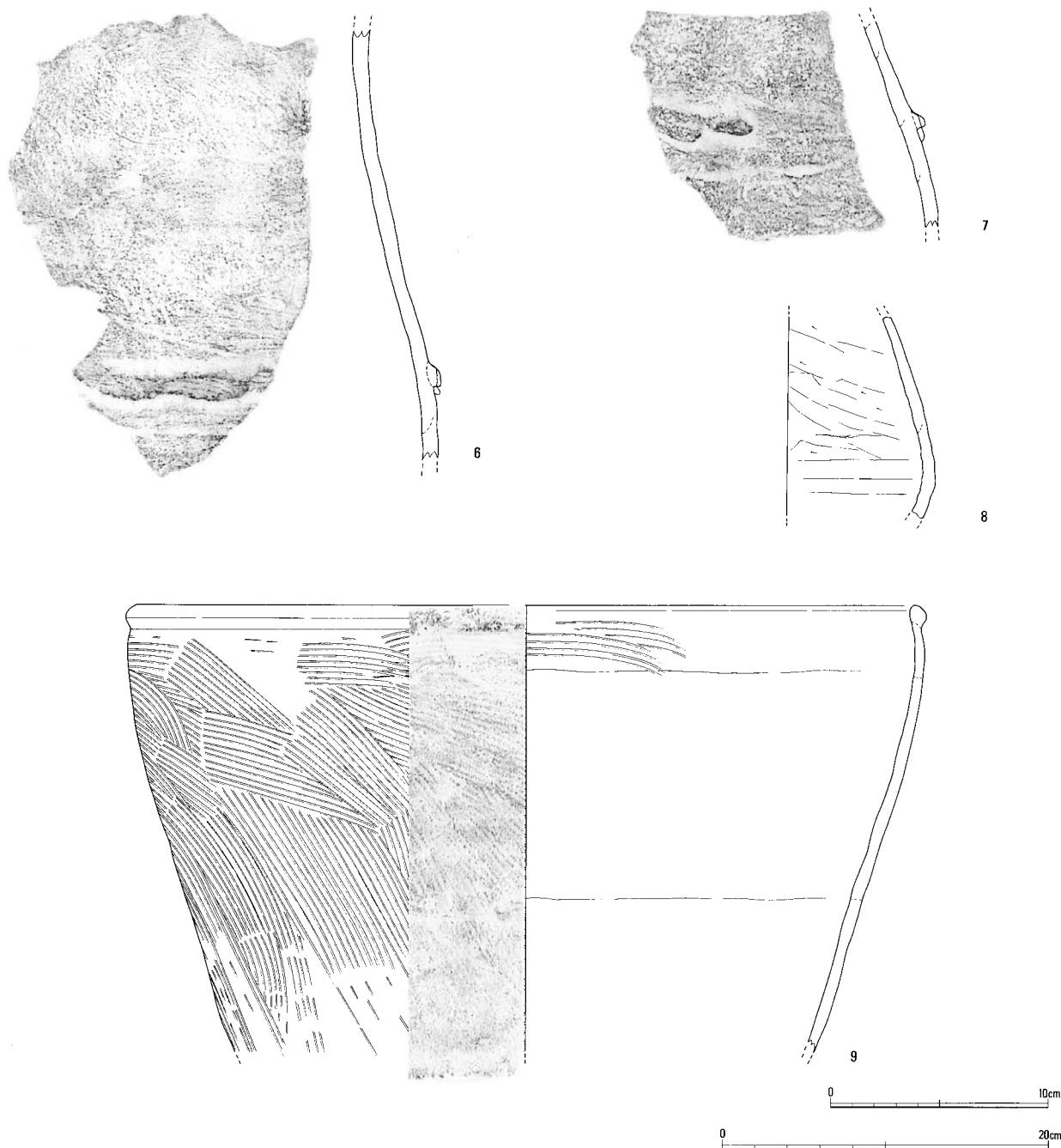
である。外面が橙色を呈しており、2次焼成の可能性もあるが、判然としない。

13の体部と頸部の境界には吸盤状の円形浮文が付けられている。浮文は残存部から推定すると6箇所に貼り付けられていたものと推測され、この間に凸帯を2条貼り付ける。凸帯は、ナデつけにより断面三角形状を呈し、2cm間隔で貼り付けている。浮文を貼り付けた後、凸帯を施したものと観察できる。調整はこの凸帯を境にして頸部外面は16と同様な工

具による条痕、体部外面はヘラケズリまたは工具によるナデである。なお、条痕は凸帯下まで及んでおり、条痕を施した後、凸帯は貼り付けられたものである。類例の少ない遺物であるが、松阪市西部の杉垣内遺跡<sup>5</sup>から類似遺物の出土がある。

#### (5) SX105出土遺物（第28図）

図示したものは14のみである。深鉢で土器棺として埋設されていたものである。口縁部は内傾し、端部を外に肥厚させ、凸帯状を呈している。その直下



第26図 SX103出土遺物実測図 (6・7 = 1 : 3 8・9 = 1 : 4)

には断面三角形状の凸帯を貼り付ける。凸帯は素文で両端をナデにより口縁部に貼り付けているが、下端のナデは弱く、指押えのみの部分もある。外面上半の調整はヘラケズリと思われるが摩滅のため判然とせず、下半においてはヘラケズリとは判断し難い。

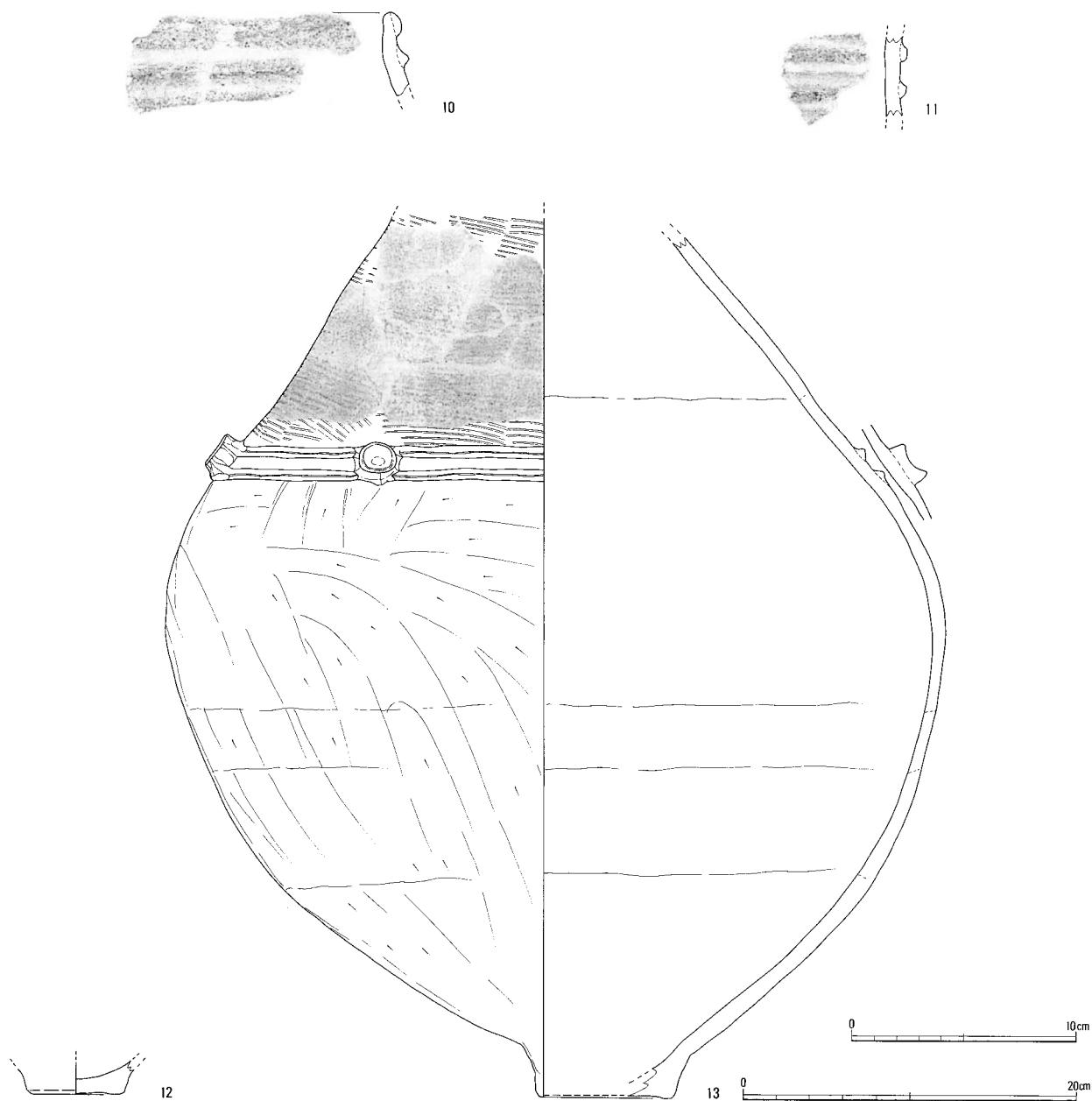
#### (6) SX106出土遺物（第28図）

図示したものは全て深鉢と考えられ、16・17は土器棺として埋設されていたものである。

15は口縁部の小片である。口縁端部上面は比較的平坦で、1cmほど下がって素文の凸帯を1条貼り付ける。凸帯の断面形は方形を呈し、上下端ともナデ

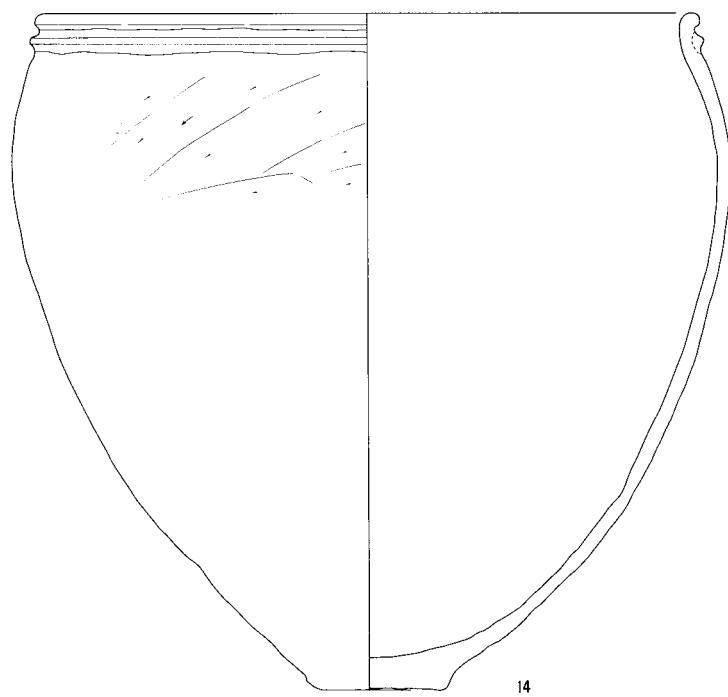
により貼り付けられる。上端は指によるナデ、下端は工具によるナデの様であるが煤の付着のため判然としない。

16は、口縁部は完存するものの体部以下は欠損のため不明である。口縁端部はやや外反し、1cmほど下がった位置に凸帯を貼り付ける。凸帯上面は、凸帯が潰れるほど大きく押し引かれている。凸帯を押し引いたものと同一の工具で頸部外面に幅の広い条痕を施す。若干残る体部外面の調整は摩滅のため観察でき難いが、条痕は及んでいない。内面は指頭圧痕を多く残すナデである。

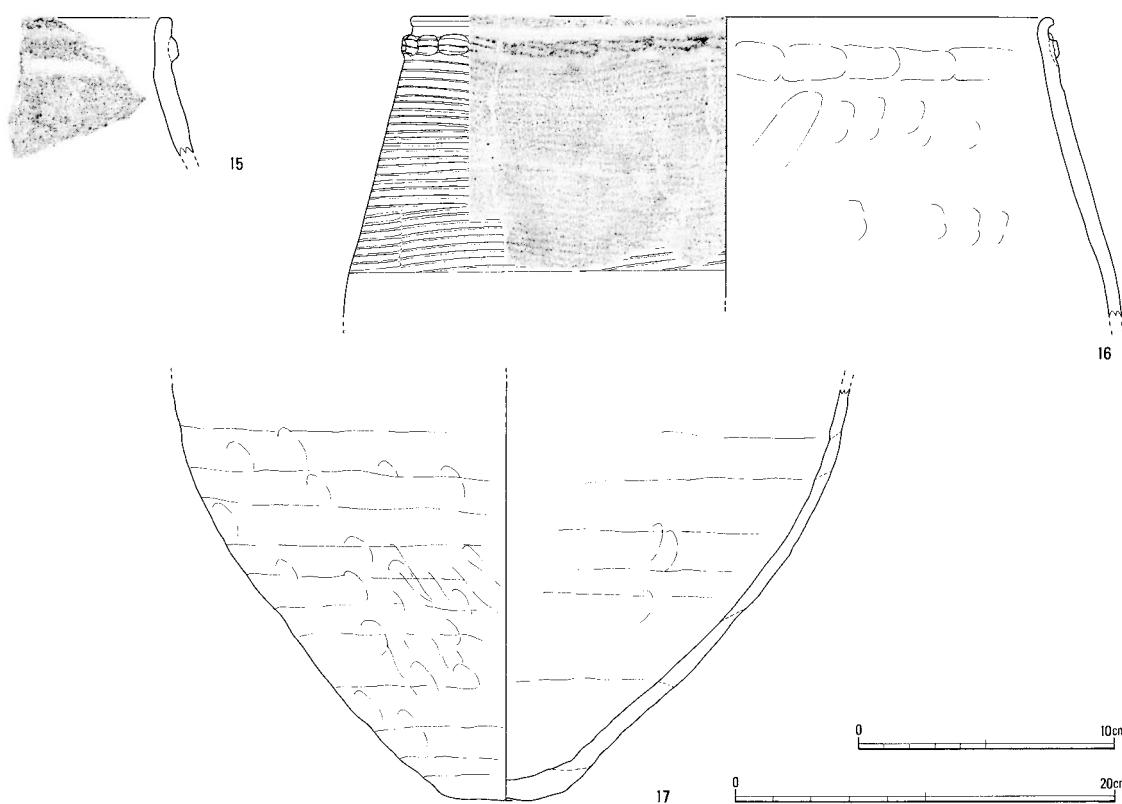


第27図 SX106出土遺物実測図 (10・11=1:3 12・13=1:4)

SX105



SX106



第28図 SX105・106出土遺物実測図 (15=1:3 14・16・17=1:4)

### (7) SK10出土遺物（第29図）

図示できるものは27のみである。体部片で深鉢と考えられる。外面には工具幅1cmに4本の条痕が施される。条痕は斜位の後横位に施される。

### (8) SK12出土遺物（第29図）

図示できるものは26のみである。体部小片で凸帯を貼り付けるが、凸帯を潰すような大きな刻目が施される。摩滅のため刻目の工具等は不明である。

### (9) SK13出土遺物（第29図）

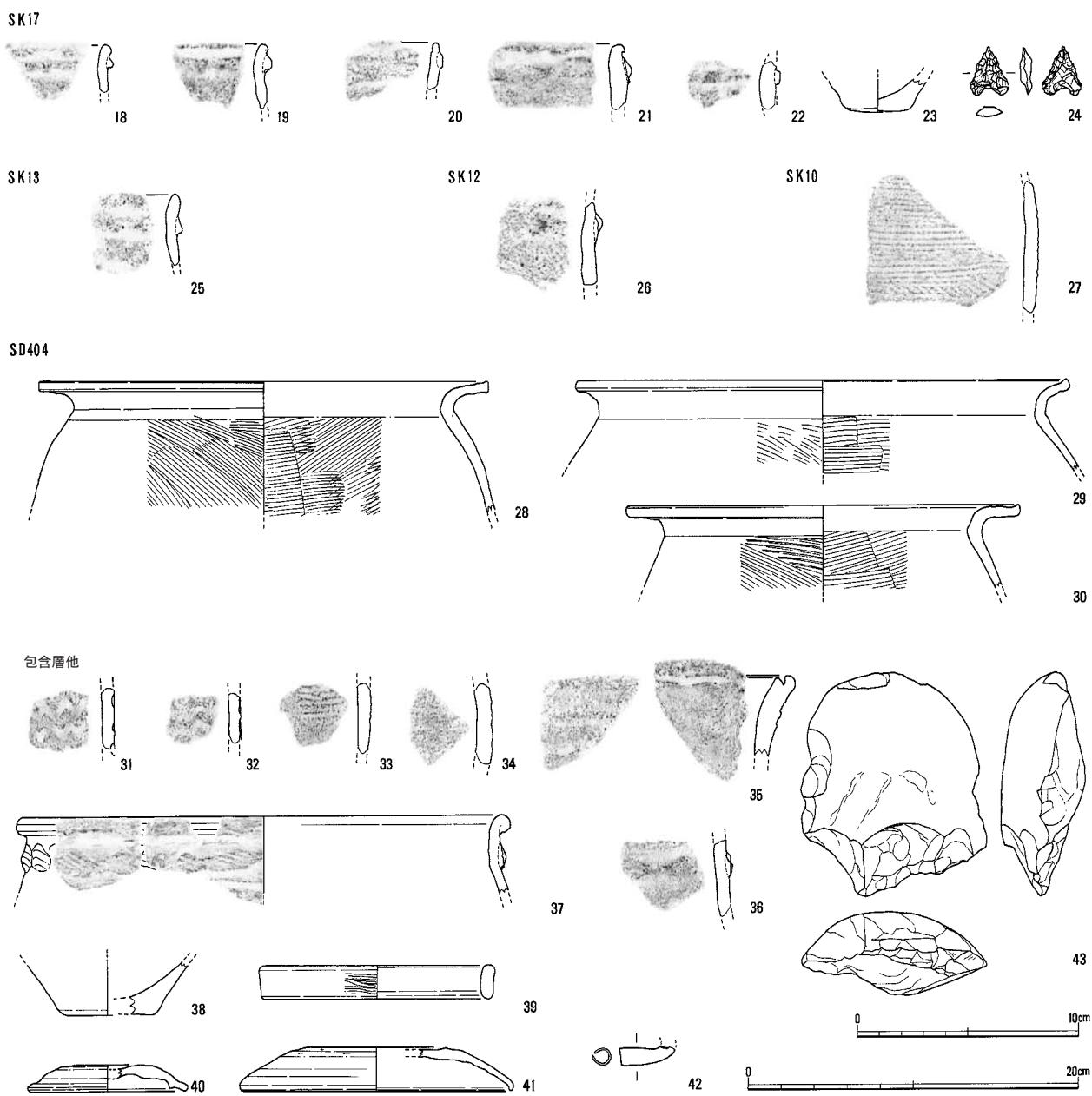
図示できるものは25のみである。口縁部小片であるが、深鉢と推定する。口縁端部は丸くおさめ、1

cmほど下がって凸帯を貼り付ける。凸帯には凹凸があるが、摩滅によるものと考えられ、素文と思われる。凸帯上端のみをナデて体部に貼り付ける。

### (10) SK17出土遺物（第29図）

18~23は縄文土器、24は石鏃である。18~21は口縁部片、22は頸部片、23は底部片で、いずれも小片であるが縄文時代晚期後半の深鉢と推定する。

18・19は、口縁端部を外に折り返すことにより低い凸帯状を呈している。その直下には幅の狭い凸帯を貼り付ける。凸帯は素文であり、断面半円状を呈し、19は貼り付けるためのナデを上端にのみ棒状工



第29図 SK10・12・13・17、SD404、包含層他出土遺物実測図 (18~22・24~27・31~36・43= 1 : 3 23・28~30・37~42= 1 : 4)

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種 器形	法量(cm)			調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
					口径	器高	その他						
1	004-02	SX101	E-9 SX1	縄文土器 深鉢	—	—		ナデ	浅黄橙(10YR8/3)	2mmの砂粒含	良	体部小片	刻目凸帯。摩滅が激しく調整不明確。
2	004-06	SX101	E-9 SX1	縄文土器 深鉢	—	—	底径 5.0	ナデ	外：橙(5YR6/6) 内：にぶい橙(7.5YR6/4)	4mmの砂粒含	良	底部1/3 残	
3	005-02	SX101	E-9 SX1	縄文土器 深鉢	—	—		外面工具ナデかへラケズリ、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	2mmの砂粒含	良	体部小片	
4	005-01	SX101	E-9 SX1	縄文土器 深鉢	—	—		外面へラケズリ、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	2mmの砂粒多含	良	体部小片	
5	003-01	SX102	G-8 SX2	縄文土器 深鉢	30.0	38.0	底径 6.6	外面ハケメか工具ナデ、内面弱いナデ	橙(7.5YR6/6)	6mmの砂粒含	良	口縁部1/4、 体部1/2残	口縁部に刻目凸帯1条。内外面に炭化物付着。
6	008-01	SX103	G-6 SX3 №1	縄文土器 深鉢	—	—		外面条痕、内面ナデ	外：にぶい黄橙(10YR7/4) 内：浅黄橙(10YR8/4)	2.5mmの砂粒含	良	体部小片	刻目凸帯1条。摩滅のため調整不明確。
7	008-02	SX103	G-6 SX3 №1	縄文土器 深鉢	—	—		—	外：にぶい黄橙(10YR7/3) 内：にぶい橙(7.5YR7/4)	1.7mmの砂粒含	良	体部小片	刻目凸帯1条。摩滅のため調整不明。
8	011-03	SX103	G-6 SX3 №1	縄文土器 深鉢	—	—		内面へラケズリ	にぶい黄橙(10YR6/3)	3.5mmの砂粒含	良	体部小片	摩滅のため外面調整不明。
9	015-01	SX103	G-6 SX3 №2~4	縄文土器 深鉢	48.0	—		外面条痕、内面上半条痕、下半ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	5mmの小石含	良	口縁部1/4残	外面煤付着。摩滅が激しく調整不明確。
10	004-01	SX104	D-5 SX4 №4	縄文土器 深鉢	25~35	—		ナデ	にぶい黄橙(10YR6/3)	2mmの砂粒含	良	口縁部小片	口縁部に素文凸帯。
11	004-03	SX104	D-5 SX4 №4	縄文土器 深鉢	—	—		ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	2mmの砂粒多含	良	体部小片	素文凸帯2条以上。
12	004-05	SX104	D-5 SX4 №4	縄文土器 深鉢	—	—	底径 5.0	ナデ	外：橙(5YR6/6) 内：にぶい黄橙(10YR6/3)	2mmの砂粒含	良	底部1/4 残	
13	002-01	SX104	D-5 SX4 №1~4	縄文土器 深鉢	—	—		外面、口縁部条痕・体部へラケズリ、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	7mmの小石含	良	体部1/3 残	体部上半に2条凸帯+円形浮文。
14	014-01	SX105	E-4 SX5 №1	縄文土器 深鉢	34.2	35.8	底径 6.4	外面ヘラケズリ、内面ナデ	橙(7.5YR7/6)	7.5mmの小石含	良	口縁部1/4残	口縁部に素文凸帯1条。摩滅が激しく調整不明確。
15	006-03	SX106	G-2 SX6	縄文土器 深鉢	—	—		ナデ	外：灰黄褐(10YR5/2) 内：浅黄橙(10YR8/3)	1mmの砂粒・雲母含	良	口縁部小片	口縁部に素文凸帯1条。外面煤付着。
16	001-01	SX106	G-2 SX6 №2	縄文土器 深鉢	34.5	—		口縁部外面条痕、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	0.1~0.3mmの砂粒含	良	口縁部完存	口縁部に刻目凸帯。
17	007-01	SX106	G-2 SX6 №1	縄文土器 深鉢	—	—	底径 6.0	ナデ	外：浅黄橙(10YR8/4) 内：黒褐(7.5YR3/1)	1mmの砂粒含	良	底部完存	摩滅のため調整不明確。
18	013-06	SK17	F-4 SK17	縄文土器 深鉢	—	—		—	灰(N4/0)	2mmの砂粒含	良	口縁部小片	口縁部に素文凸帯1条。摩滅が激しく調整不明。
19	013-05	SK17	F-4 SK17	縄文土器 深鉢	—	—		—	灰(N4/0)	2mmの砂粒含	良	口縁部小片	口縁部に素文凸帯1条。摩滅が激しく調整不明。
20	013-03	SK17	F-4 SK17	縄文土器 深鉢	—	—		—	にぶい橙(7.5YR6/4)	2mmの砂粒含	良	口縁部小片	口縁部に凸帯1条。
21	013-02	SK17	F-4 SK17	縄文土器 深鉢	—	—		—	外：にぶい橙(7.5YR7/4) 内：橙(5YR7/6)	2mmの砂粒含	良	口縁部小片	口縁部に刻目凸帯1条。
22	013-04	SK17	F-4 SK17	縄文土器 深鉢	—	—		—	にぶい褐(7.5YR5/4)	2mmの砂粒含	良	体部小片	体部に凸帯。
23	013-01	SK17	F-4 SK17	縄文土器 深鉢	—	—	底径 3.8	ナデ	外：浅黄橙(10YR8/4) 内：灰褐(7.5YR5/2)	2mmの砂粒含	良	底部1/4 残	摩滅のため調整不明確。
24	016-01	SK17	F-4 SK17	石器 石鐵	長 2.2	厚 0.5	重 1.4g	—	灰(N4/0)	サヌカイト	—	完形	
25	013-07	SK13	H-6 SK13	縄文土器 深鉢	—	—		—	浅黄橙(10YR8/4)	3mmの砂粒含	良	口縁部小片	口縁部に素文凸帯1条。摩滅が激しく調整不明。
26	013-08	SK12	E-6 SK12	縄文土器 深鉢	—	—		—	浅黄(2.5YR8/3)	3mmの砂粒含	良	体部小片	体部に刻目凸帯。
27	013-09	SK10	F-7 SK10	縄文土器 深鉢	—	—		外面条痕、内面ナデ	外：にぶい褐(7.5YR5/4) 内：橙(5YR6/6)	3mmの砂粒含	良	体部小片	
28	006-02	SD404	G-17 SH1	土師器 甕	27.0	—		ハケメ	浅黄橙(10YR8/4)	1mmの砂粒若干含	良	口縁部1/9残	
29	010-02	SD404	G-17 SH1 W区	土師器 甕	29.6	—		ハケメ	浅黄橙(10YR8/6)	1mmの微砂含	良	口縁部1/8残	
30	006-01	SD404	G-17 SH1	土師器 甕	23.6	—		ハケメ	浅黄橙(10YR8/4)	1mmの砂粒若干含	良	口縁部1/6残	
31	012-06	—	F-5 P1	縄文土器 鉢	—	—		外面山形文、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	2mmの砂粒含	良	体部小片	摩滅が激しく調整不明。
32	012-04	—	F-5 P1	縄文土器 鉢	—	—		外面山形文、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	2mmの砂粒含	良	体部小片	摩滅が激しく調整不明。
33	012-03	—	G-4 P4	縄文土器 深鉢	—	—		外面条痕、内面ナデ	赤褐(5YR4/6)	3mmの砂粒含	良	体部小片	
34	012-05	—	E-5 P2	縄文土器 深鉢	—	—		外面条痕、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR6/3)	2.5mmの砂粒含	良	体部小片	摩滅が激しく調整不明確。
35	012-02	—	H-9 包含層	縄文土器 深鉢	—	—		内面ナデ	明褐(7.5Y5/6)	2.5mmの砂粒含	良	口縁部小片	口縁部に凹線2条、口唇部に刻目。摩滅のため調整不明確。
36	012-07	—	G-6 P4	縄文土器 深鉢	—	—		—	にぶい黄褐(10YR5/4)	2.5mmの砂粒含	良	体部小片	外面に刻目凸帯1条。摩滅が激しく調整不明。
37	012-01	—	H-6 P2	縄文土器 深鉢	29.2	—		—	にぶい橙(7.5YR6/4)	2.5mmの砂粒含	良	口縁部1/6残	口縁部に刻目凸帯1条。
38	012-08	—	G-4 包含層	縄文土器 深鉢	—	—	底径 5.2	ナデ	外：橙(7.5YR6/6) 内：にぶい黄褐(10YR5/3)	4mmの砂粒含	良	底部1/3 残	摩滅のため調整不明確。
39	011-04	—	G-3 包含層	土師器	14.0	2.1		外面へラミガキ、内面ナデ	橙(7.5YR6/6)	精良	良	口縁部1/12 以下残	特殊器形
40	011-02	—	C区 6層	須恵器 蓋	9.4	—		天井部外面クロケズリ、他はロクロナデ	灰(5N6/0)	2mmの砂粒含	良	口縁部1/6残	ロクロ右回転
41	011-01	—	C区 6か28層	須恵器 蓋	16.3	—		天井部外面クロケズリ、他はロクロナデ	褐灰(5YR5/1)	3mmの砂粒含	良	口縁部1/4残	ロクロ左回転
42	011-05	—	C区 4層	金属製品 煙管	1.0	—		—	にぶい赤褐(5YR4/4)	真鑄	—	雁首残	
43	011-06	—	F-3 包含層	石製品 礫器	幅 8.4	長 10.1	重 311.4g	—	にぶい黄橙(10YR6/4)	砂岩	—	完形	

第6表 遺物観察表

具で行っている。18は19と同一個体の可能性もあるが、凸帯上端の工具によるナデはみられない。

21も18・19と類似する口縁端部をもつが、凸帯は上下端ともナデにより口縁部に貼り付けられ、断面形は低い三角形を呈する。凸帯には刻目が施され、摩滅のため施文具は明確でないものの指によるものと推測される。

20は前述のもと異なり、口縁端部はやや尖り気味に丸くおさめ、若干下がって細い凸帯を貼り付けける。凸帯は素文で主に上端をナデにより口縁部に接合する。したがって、断面形は半円状を呈する。

22は頸部片で、外面に素文凸帯を貼り付ける。凸帯の上下端は工具により強くナデられ、体部との境が明瞭である。したがって、凸帯断面は方形にちかい低い半円状を呈する。

#### (11) SD404出土遺物（第29図）

図示したものは土師器の長胴甕である。28・30は、大きく外反する口縁部をもつ。両者は異なる口径で図化したが、小片からの推測のため不確定な要素もあり、両者が同一個体の可能性もある。29は上述したものより口縁部の外反がやや弱く、別個体か。いずれも奈良時代前半あたりの時期と推測している。

#### (12) 包含層他出土遺物（第29図）

31・32は小片ではあるが、両者とも山形文を施す尖底の鉢と思われ、縄文時代早期に属するものである。当遺跡から出土した早期の土器は、この2点のみである。両者は同一の柱穴状遺構から出土しており、色調等も類似することから同一個体の可能性がある。

33～38は確証のないものもあるが、縄文時代晩期に属するものと思われる。35・37は口縁部片、33・34・36は体部片、38は底部片で、すべて深鉢と推測する。33の外面には、櫛状工具による浅い条痕がある。34も同様に外面には条痕が施されるものと考えられるが、摩滅のため明確でない。35は口縁部の傾斜が不明であり、深鉢としたが、壺の可能性もある。口唇部には鋭利な工具による刻目が施される。刻目は深く、一単位3cm以上の長さをもつ沈線状のものである。小片からの観察のため、あるいは沈線かもしれない。外面には浅い凹線を施し、凹線間に凸帯に擬している。36の凸帯は上下端ともにナデにより

体部に貼り付けられ、断面は低い三角形状を呈する。凸帯には刻目が施され、その施文具は摩滅のため不明である。強い押し引きにより凸帯全体を押し潰している。37の口縁部は外側に折り返すことにより肥厚させ、結果的に口縁端部外面が凸帯状を呈する。さらに2cm下がって低い刻目凸帯を貼り付ける。刻目は工具により押し引くもので、幅2cm程度の広いものである。

39は、輪形を呈する特殊な器形である。土師質で精良な胎土で鮮やかな橙色を呈する。外面はヘラミガキにより丁寧に調整する。用途、時期ともに不明であるが、飛鳥時代以降、比較的新しい可能性もある。

40・41は須恵器の蓋である。両者とも宝珠つまみを貼り付けるものと推測され、7世紀後半から8世紀前半までのものであろう。40は口縁部内面にかえり有し、41は全体に還元が不十分のためか、赤褐色系の発色を呈する。

42は煙管である。雁首のみの残存で火皿は完全に欠損している。C区旧耕作土直下のオリーブ黒色土(5Y3/1)から出土し、おそらく近世のものであろう。

43は礫器である。分割礫の一辺に粗い剥離を加えている。片刃状であるが、裏面にも簡単に剥離が加えられることから両刃とすべきであろうか。31・32に伴うものかもしれない、縄文時代早期に属するものであろう。

（森川常厚）

## 4 自然科学分析

今回の分析目的は、縄文時代晩期後半の土器棺および土壤墓と考えられている遺構内土壤について、微細物分析を実施し、内容物の有無および種類に関する情報を得る。

### (1) 試料

試料は、B区F8SK7およびB区G8SX102の各遺構内より採取された土壤試料2点である。試料は各遺構の覆土部分から一括してタッパウエアに採取されていた。試料の土質は、両試料とも黄褐色シルトからなる。

### (2) 方法

土壤試料各400ccを水に一晩液浸し、試料の泥化

試料名	分析量(cc)	種類名	乾燥重量(g)	点数	樹種( )内は点数
B区 F8 SK7	400	炭化材	0.2	5	コナラ属コナラ亜属クヌギ節(2) コナラ属コナラ亜属コナラ節(3)
		不明炭化物	+		
B区 G8 SX102	400	炭化材	0.1	5	マツ属(1) コナラ属コナラ亜属コナラ節(4)
		不明炭化物	4.5		

注) +は0.01g以下を示す

第7表 微細物分析結果表

を促す。0.5mmの篩を通して水洗し残渣を集め、双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な植物遺体等を抽出する。抽出した植物遺体を24時間40°Cで乾燥後、形態的特徴から種類を同定し、乾燥重量を求める。また、炭化材については、比較的状態の良いものを各5点、合計10点選択し、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡で観察し、種類を同定する。分析後の炭化材を除いた植物遺体等は、乾燥剤とともに種類毎にビンに入れて保存する。

### (3) 結果

微細物分析結果を第7表に示す。

篩別後の残渣からは、炭化材の微細片（2mm角以下）と、木材組織が確認されない、部位・種類共に不明である炭化物が確認された（以下、不明炭化物とする）。不明炭化物は、B区G8 SX102からは4.5g検出された。これらは不定形で発泡しており、由来・種類は不明である。

各遺構から検出された炭化材は、針葉樹1種類（マツ属）と広葉樹2種類（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節）に同定された。以下に、同定された炭化材の樹種の主な解剖学的特徴を以下に記す。

#### ・マツ属 (Pinus) マツ科

軸方向組織は仮道管と樹脂道が認められる。放射柔細胞の分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁の鋸歯の有無は、保存が悪く観察できない。

#### ・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris) ブナ科

環孔材で、孔圈部は1～2列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら単独で放射状に配列する。放射組織は単列で1～20細胞高のものと、複合放射組織がある。

#### ・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (Quercus subgen.

Lepidobalanus sect. Prinus) ブナ科

環孔材で、孔圈部は1～2列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。放射組織は単列、1～20細胞高のものと、複合放射組織がある。

### (4) 考察

縄文時代晩期後半の土器棺および土壙墓と考えられる遺構内土壤からは、微細物分析の結果、少量の炭化材と炭化物が確認された。これ以外に有機物に由来する遺体は認められなかった。

炭化材の樹種は、SK7が落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属クヌギ節とコナラ属コナラ亜属コナラ節、SX102が針葉樹のマツ属と落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属コナラ節に同定された。これらの樹木は、現在の遺跡周辺の山地に極めて普通に見られる種類であり、暖温帯における二次林の構成要素でもある。縄文時代晩期後半の頃も、これらの種類が遺跡周辺の植生を構成する要素であった可能性がある。この点に関しては、周辺での古植生に関する情報の蓄積をもって検討するようにしたい。

今回の結果、遺構内堆積物中には遺構の性格を検討する上で有力な骨片などの存在は確認することができなかった。上記したように分析の結果、得られたものが全て炭化物であったことから、炭化していない有機物遺体などは全て分解消失している可能性が高いと考えられる。また、今回の遺構堆積物中に認められた炭化物は、当時の人間活動と何らかの関係を持っている可能性もあり、今後調査成果と合わせた評価が必要と考える。

（パリノ・サーヴェイ株式会社）

### 5 結語

今回の調査では、土器棺をはじめ縄文時代晩期の遺構・遺物が大半を占め、当該時期の考察に貴重な

資料を提供する結果となった。

### (1) 時期

今回の調査での出土遺物は少量であるが、その大半が縄文土器である。時期の異なるもの数点を除き、全て晩期の凸帯文土器に属するものである。

伊勢地方の凸帯文土器は、鈴木克彦氏により整理されている。<sup>⑥</sup>ここでは、氏の分類に従って、その所属時期を検討する。

口縁部の残存するもののうち、外反する傾向にあるものが多く、口縁端部に刻目を施すものは出土していない。凸帯は、半数ちかくが口縁端部からやや下がる位置に貼り付けられ、残りは口縁端部に貼り付けるものと若干下がるもののがおよそ同数である。刻目では、素文のものと刻目をもつものがあり、刻目にはD字状のものは無く、全てO字状を呈する。施工工具は、1・5のみが指またはヘラ、他は全て二枚貝状工具である。

以上から、鈴木分類による1・2類は無く、3類から8類までに限定される。ここで、D字状の刻目をもつものは出土していないことから、素文のものにおいても3類の可能性は少ないものと考えられる。また、4・5類においてO字状刻目をもつものは少數であるので、O字状刻目をもつものは6～8類に属する可能性が高いものと推測される。したがって、今回の調査で出土した凸帯文土器は、古相を示し特異な15を除き、6～8類に属するものとしてよさそうである。時期的にはⅢ期からⅣ期で、馬見塚式並行期から櫻王式並行期に考えられ、縄文時代晩期後半～終末に當まれた遺跡であることがわかる。

個々にみれば、9は7類でⅢ期、5・10・13・16・18・19・21・37は8類でⅣ期となる。他のものについてはⅢ期とⅣ期の識別は困難である。遺構でいえば、SX103がⅢ期でやや先行し、SX102・104・106、SK17はⅣ期で後出である。また、土器棺と土壙墓には明確な時期差は無く、並存していたことになる。

### (2) 土器棺

上述により、今回の調査において縄文時代晩期後半～終末の土器棺墓が6基検出されたことになる。6基の土器棺は、2～8mの間隔をもち、近接するものは無い。構造は、いずれも上半以上を削平により欠損するため明確さに欠けるが、SX106を除き、

横位または斜位に埋設される。残存の最も劣悪なSX101を除き单棺であるものと推測され、別個体片により蓋をするものもみられる。埋設される土器はいずれも深鉢であるが、器形は多様である。また、埋設時の口縁部方向に統一性は無い。埋設された深鉢には煤の付着するものが多く、煮炊きに使用されていたものが転用された可能性が高い。埋設された器形が多様なこととあわせ、埋設する土器そのものを重視する姿勢はみられず、棺としての機能があれば、土器の形態にはこだわらない様である。

次に、SX106は一方に他方を完全に被せ、正立状態に埋設された特異なものである。隣県の麻生田大橋遺跡では、入れ子状の土器棺が報告されている。<sup>⑦</sup>斜位に埋設された深鉢内に同方向に鉢を入れ込んだもので、鉢は蓋と理解することもでき、棺内を2室に仕切るものと理解する事も可能である。前者の理解の場合、両遺跡ともその機能は共通するが、後者の場合は大きく異なる。いずれにしても、両遺跡とも類例の少ない形態のため、今後の良好な類例資料の検出を待って再検討されるべきものであろう。

さて、当地方の晩期後半の土器棺は、これまでに13ヶ所の遺跡から検出されているが、4基が検出された北一色遺跡<sup>⑧</sup>・蛇龜橋遺跡<sup>⑨</sup>が最も多い、ほとんどの遺跡では、1～2基が検出される程度であった。晩期前半の下川原遺跡では26基、中谷遺跡と同時期に調査が行われた大原堀遺跡では、滋賀里IV式並行の土器棺が14基程度検出されており、これら直前の時期では群集する様子がうかがえるのに対し対照的である。前述した大原堀遺跡では馬見塚式期においては1基に激減し、この傾向を裏付けている。こうしたなかで6基の土器棺を検出した中谷遺跡は、晩期後半において比較的多くの土器棺が群集する数少ない遺跡といえるであろう。

### (3) 土壙墓

B区では多数の土坑を検出し、人骨等の出土は無いものの、それらの多くに土壙墓の可能性があることは既述したとおりである。繰り返すと、土壙墓と想定できそうなものはSK2・3・5・7・9～12・14～17・21・23の14基である（第5表）。これら14基の平面形は全て長方形で、長辺100～150cm、短辺60～80cm程度におさまるものである。深さも比較的

浅いもので底部は平らで、これら14基は比較的統一された形態・規模を呈している。これらのなかには埋土の観察から掘形が認められるものがある。堀形埋土は無機質で検出面と酷似する土質であるため、掘削後まもなく埋め戻されたものと考えられる。この様な状況から、底部が有段であるSK21を除く13基は、直接の根拠は無いものの、箱形の木棺を埋設した木棺墓と想定できそうである。そして埋設された木棺の規模は、長辺110cm前後、短辺60cm程度のものと想定できる。この規模は、滋賀県で多く検出されている木棺墓<sup>13</sup>と比較して矛盾は無い。ただし、滋賀県のものは、木棺規模に対する堀形が当遺跡のものより大きい傾向にあるようである。

#### (4) 墓制

以上により、中谷遺跡では縄文時代晩期後半から終末の6基の土器棺墓と14基の土壙墓が群集する墓域であることがわかった。しかし、並存する土器棺墓と土壙墓の関係は不明とせざるをえない。土壙墓には、再び掘り返された痕跡が無く、土壙墓を一次埋葬墓、土器棺墓を再葬墓として関連付けることはできない。また、土壙長と埋葬遺体の相関を研究した山田康弘氏は、屈葬の場合、0.8mを目安にして幼児と小児（概ね6～12歳程度）以上の峻別が可能とし、小児以下の伸展葬の事例は無いとしている。これを当遺跡の木棺墓に摘要すれば、当遺跡の木棺墓は小児以上の屈葬と推定できる。土器棺墓が乳幼児单葬<sup>14</sup>とするならば、小児以上対乳幼児は2：1となり、3人に1人は6歳までに死亡したものと推測可能である。しかし、他の調査事例では土壙墓対土器棺の比率は多様であり、縄文晩期社会の様相に結

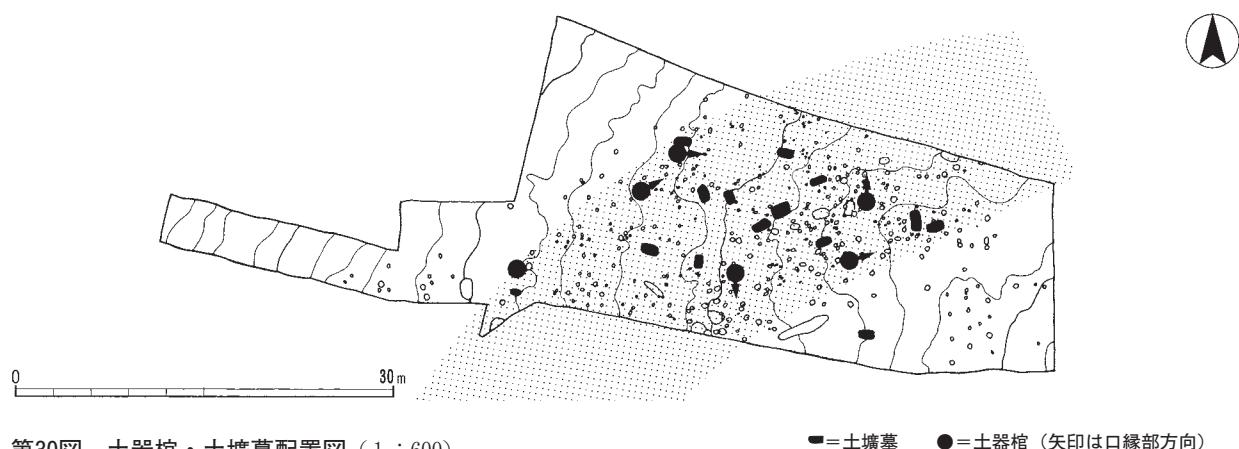
論付けることはできず、中谷遺跡の墓域を構成した一集団の事例に止めておく。

次に、SK2とSK3は長軸を直行する方向で隣接し、SK16とSX104は長軸と口縁部方向を揃えて近接並行する。これらは、被葬者に何らかの関係を想定できそうなものである。また、これらの土器棺墓や土壙墓に重複するものは無く、多数の墓が並存する。このことから、当時の地表において何らかの墓標的なものが存在したと推測することも可能ではないだろうか。土壙墓や土器棺墓の周囲では多数の柱穴状遺構が検出されており、これらが墓標とかかわる遺構であるかもしれない。大阪市長原遺跡でも同様な柱穴状遺構が土器棺や土壙墓の周囲で多数検出されおり、石棒が出土したものもある。今後の類似資料の蓄積に期待したい。

最後に、これら墓域に関連する遺構はB区中央部に比較的集中して分布する。近畿地方の墓域は、住居域よりも低い外縁部に形成されるといわれており、滋賀県滋賀里遺跡では弧状に配列されている。当遺跡の様相も、狭い調査区ではあるが、同様にみることも可能で、より高地の住居域を弧状に取り囲むように墓域を形成した可能性が大きいものと考えられる。こうした場合、調査区の南東側に近接して住居域が想定され、土壙墓埋土に散見されるサヌカイト剥片がそれを暗示しているものと考えられる。

#### (5) おわりに

三重県内では、晩期前半では群集する土器棺が、晩期後半になると激減し、単独にちかいかたちで分布する傾向にあり、遺物出土量においても同様な傾向にある。これについて奥義次氏は、稻作文化を受



第30図 土器棺・土壙墓配置図 (1:600)

■=土壙墓 ●=土器棺（矢印は口縁部方向）

容する社会変革のなかで、縄文集団の解体の様相を予察している。<sup>㉙</sup>こうしたなかで、土壙墓を合せ多数の墓が群集する中谷遺跡のありかたは、この傾向に合致しない様相を示している。縄文時代晚期後半の集落様相には、縮小拡散していくものと墓域を形成し得る集落を保つものの二様が有ることを提起する

#### [註]

- ① 鈴木忍ほか『松阪の地質』三重県教職員組合松阪支部 昭和56年1月30日
- ② 高尾一彦「たばこ」『日本史辞典』京大日本史辞典編纂会 平成2年6月5日
- ③ 岡田憲一「土坑「墓」認定の手続き」『関西の縄文墓地』関西縄文研究会 2000年9月16日
- ④ パリノサーヴェイ株式会社の鑑定による。
- ⑤ 河瀬信幸・服部芳人ほか「杉垣内遺跡」『昭和61年度農業基盤整備事業地域内埋蔵文化財発掘調査報告I』三重県教育委員会 1989. 3
- ⑥ 鈴木克彦「伊勢湾岸地方における凸帯文深鉢の様相」『三重県史研究第6号』平成2年3月三日
- ⑦ 安井俊則ほか『麻生田大橋遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1991  
他に、豊川市教育委員会の調査でも検出されている。
- ⑧ 森川幸雄「三重県の縄文墓址」『研究紀要第11号』三重県埋蔵文化財センター 2002年3月
- ⑨ 前掲⑧に同じ
- ⑩ 新田洋「蛇龜橋遺跡」『昭和56年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1982. 3
- ⑪ 前掲⑧に同じ

結果となり、当時の社会変革の複雑さを暗示している。  
(森川常厚)

- ⑫ 調査担当者の小山憲一氏の御教示による。
- ⑬ 前掲③に同じ
- ⑭ 前掲③に同じ
- ⑮ 山田康弘「縄文人骨の埋葬属性と土壙長」『筑波大学先史学・考古学研究 第10号』筑波大学歴史・人類学系 1999
- ⑯ 前田清彦「埋葬人骨からみた伊勢湾東岸地域の晩期墓制」『関西の縄文墓地』関西縄文研究会 2000年9月16日
- ⑰ 安井俊則ほか『麻生田大橋遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1991  
松尾信裕・森毅ほか『長原遺跡発掘調査報告III』財团法人大阪市文化財協会 1983. 3
- ⑱ 松尾信裕・森毅ほか『長原遺跡発掘調査報告III』財团法人大阪市文化財協会 1983. 3
- ⑲ 泉 択良「II 縄文時代」『図説発掘が語る日本史4近畿編』新人物往来社 1985
- ⑳ 奥義次「三重県における凸帯文系土器出土遺跡の分布相」『Miehistory vol. 1』三重歴史文化研究会 1990. 5

報告書	調査時	報告書	調査時	報告書	調査時
SK1	B区 SK1	SK19	B区 SK19	SD401	A区 SD1
SK2	B区 SK2	SK20	B区 SK20	SD402	A区 SD2
SK3	B区 SK3	SK21	B区 SK21	SD403	A区 SD3
SK4	B区 SK4	SK22	B区 SK22		A区 SH1
SK5	B区 SK5	SK23	B区 SK23		A区 SH3
SK6	B区 SK6	SK24	B区 SK24		A区 SD4
SK7	B区 SK7	SX101	B区 SX1	SD405	A区 SD5
SK8	B区 SK8	SX102	B区 SX2	SK502	A区 SK2
SK9	B区 SK9	SX103	B区 SX3	SK504	A区 SK4
SK10	B区 SK10	SX104	B区 SX4		A区 SK1
SK11	B区 SK11	SX105	B区 SX5		A区 SK5
SK12	B区 SK12	SX106	B区 SX6	SK507	A区 SK6
SK13	B区 SK13	SD201	B区 SD1		A区 SK7
SK14	B区 SK14	SD202	B区 SD2	SK508	A区 SK8
SK15	B区 SK15	SD203	B区 SD3	SK509	A区 SK9
SK16	B区 SK16	SB301	A区 SB1		A区 SH2
SK17	B区 SK17	SB302	A区 SB2	SH602	A区 SK3
SK18	B区 SK18	SB303	A区 SB3		

第8表 遺構番号对照表

丸野遺跡写真図版 1



周辺の空中写真（昭和27年撮影）

丸野遺跡写真図版 2



遠景（西から）



全景（上から）



全景（東から）



SD15 断面（南西から）



SD15 検出（北から）



SD15 完掘（北から）

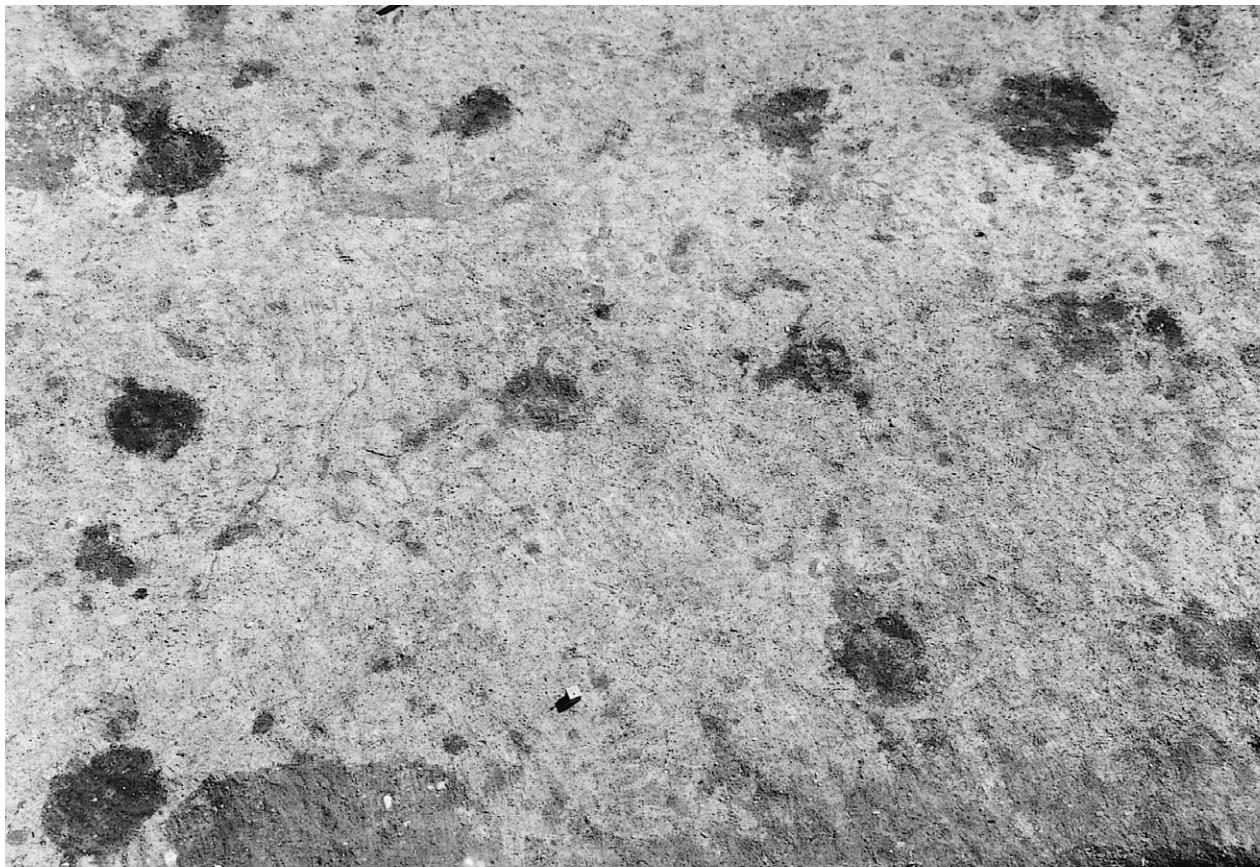
丸野遺跡写真図版 4



SH13 土器出土状況（南から）



SH13 完掘（南から）



SB 4 検出（北東から）



SB 4 完掘（北東から）

丸野遺跡写真図版 6



17



16



5



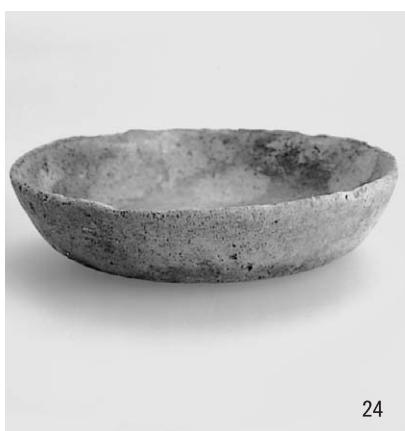
51



68



42



24



65



42



67



50

出土遺物



A区 調査前風景（東から）



B区 調査前風景（西から）

中谷遺跡写真図版 8



調査区全景（東から）



A区 上層全景（北から）



A区 下層全景（西から）



B区 全景（東から）

中谷遺跡写真図版10



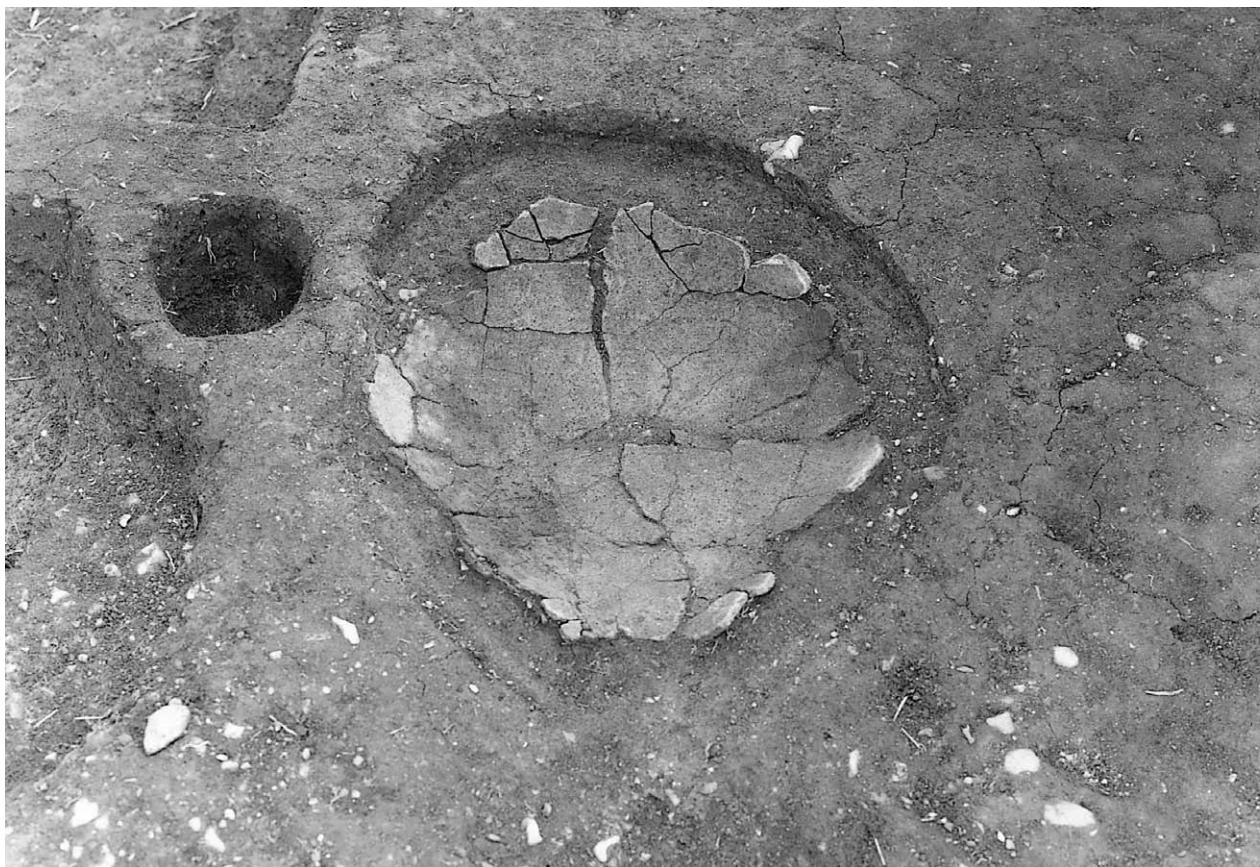
B区拡張区からC区を望む（東から）



SX101（南から）



SX102（南東から）



SX104（西から）

中谷遺跡写真図版12



SX103 (北から)



SX103 (北から)



SX105 (南東から)



SX106 (東から)

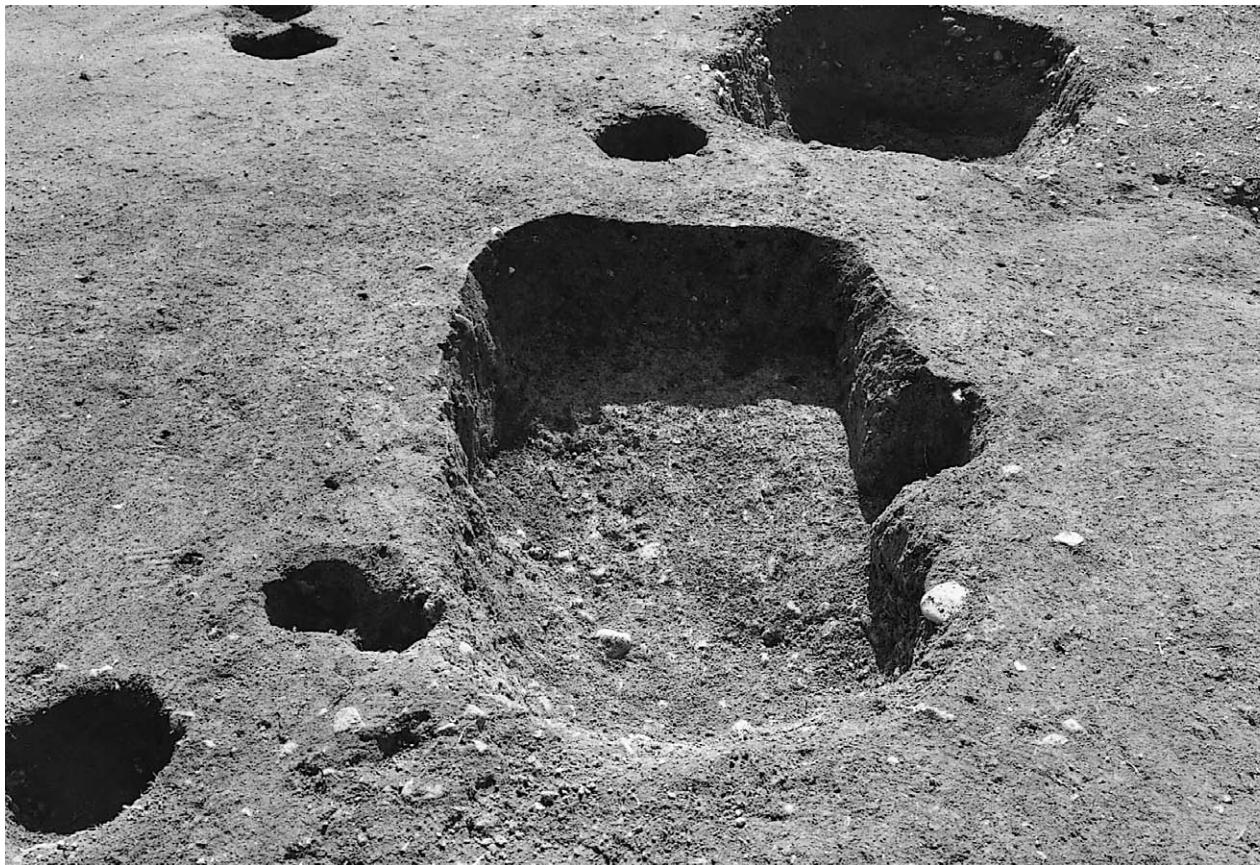
中谷遺跡写真図版14



SK 2 (北東から)



SK 6 (南西から)



SK12（北から）



SK17（西から）

中谷遺跡写真図版16



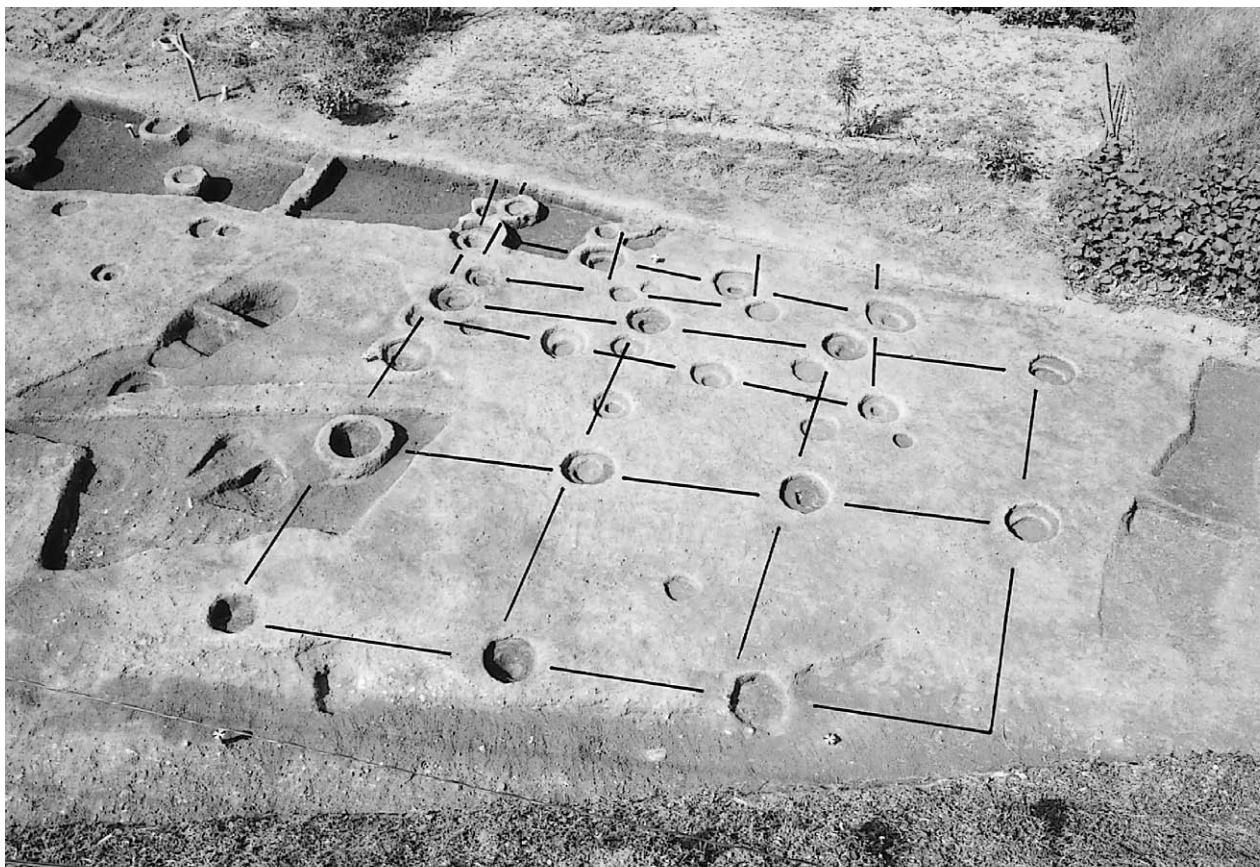
SK16土層（西から）



SK16（西から）



SK21（北から）



SB301～303（南から）

中谷遺跡写真図版18



出土遺物（1：3）



13

出土遺物（1：3）

中谷遺跡写真図版20



16



14

出土遺物 (1 : 3)



出土遺物（1：3）

中谷遺跡写真図版22



10



15



20



21



1



27



19



11



24



17

出土遺物 (1 : 3)



43

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	まるの・なかたにいせきはくつちょうさほうこく								
書 名	丸野・中谷遺跡発掘調査報告								
副書名									
卷 次									
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告								
シリーズ番号	246								
編著者名	森川常厚・川崎志乃								
編集機関	三重県埋蔵文化財センター								
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596-52-1732								
発行年月日	西暦2003年8月								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯 ° ′ ″	東 綏 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因	
まるのいせき 丸野遺跡	みえけんまつさ かしとよはらちよ う 三重県松阪市豊原町	市町村	遺跡番号	214	34° 32' 38"	136° 34' 24"	20020708 ~ 20021028	1,853	一般地方道松阪環状線 緊急地方道路整備事業
なかたにいせき 中谷遺跡			204	216	34° 32' 38"	136° 34' 34"		1,506	
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項				
丸野遺跡	集落跡	古墳・飛鳥～平安	溝（環濠）掘立柱 建物 壓穴住居	土師器（椀、杯、皿、甕） 須恵器（杯） 灰釉陶器（椀）					
中谷遺跡	集落跡	縄文時代晚期・奈良	土器棺 土壙墓 壓穴住居 掘立柱建物	縄文土器（深鉢） 土師器（甕）	晩期土器棺				

---

三重県埋蔵文化財調査報告246

丸野・中谷遺跡発掘調査報告

2003(平成15)年8月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター  
印 刷 伊 藤 印 刷 株 式 会 社

---